
クロキ ユウ の ぼうけん

ユミル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロキ グウ の ぼうけん

【Zコード】

Z8024M

【作者名】

コミル

【あらすじ】

俺、黒木悠は十七歳。

ある日、思い切つてあるビルから飛び降りてみた。

確実に死んだと思ったが、なぜか生きていて、どこかも分からぬ森の中に。

呆然としていると、空からヒラリヒラリと一枚の紙が。

『かわいそーだから、たすけてあげました。えらいでしょ？b y 神
……ふざけんなアアアアー！』

最初の一歩（前書き）

作者は初心者です。どんなやつでも受け入れてやるぜー...といつ心の広い方はどうぞ見ていくください。
コメディ・シリーズ・なんでもあります。

最初の一歩

名前 黒木 悠。
性別 男。
年齢 17歳。

以上。

そんな俺は、今現在あるビルの屋上にいる。
眼下に見えるのは、マッチ棒ほどの大きさに縮小されて見える人々や、高速移動する色とりどりの車。
俺はゆっくりと屋上の手すりを乗り越えると、大きく身を乗り出した。

一つ、深呼吸をする。

そして、飛んだ。

で、気付いたら森の中でした。

「…………あれ？」

天から降りそそぐ優しげな木漏れ日。
遊んでいる小鳥達の美しい歌声。
風が木々を渡り、囁きあう。

…………ここは、どこだ？

人間は紙切れにさえも殺意を抱ける生き物である

飛び降りたら森でした。

…………どこの映画の宣伝だよ。

しかし、俺は確かに森にいる。
鳥達がつるやこぐらいで鳴き叫び、
木漏れ日（といつか直射日光）が容赦なく照りつけ、
そこいらじゅうで竜巻が発生しているような森に。

新手のいじめか？

なんで晴天と竜巻が同居してんだよ！

とりあえず竜巻から逃げるよつにして足を進める。竜巻は縦横無
尽に動き回り、樹齢がなんか古そうな大木を次から次へと根っこか
らもぎ取っている。

…………この森、よく無くならないな。

竜巻から充分距離をとつてから一息つく。

俺はもともと体が丈夫なほうじゃないから、いちいち休憩しなけ
りやつていけない。

そこまで考えて、俺はハツとした。

そうだ、まず最初に

（ハハハ、ビビだー！？）

あわてて周りを見回すも、田に入るのは日光・鳥・竜巻・森のみ。
ここが日本なのかすら分からない。とりあえず地球であることは

間違いないと思つただが

。

その時、頭上から一枚の紙切れが降つてきた。

空から紙！？ とかいう疑問は置いて、とりあえず振つてきた紙切れをつかむ。

そこには、日本語でこう書いてあつた。

『ふつぶー。はーずれ（笑。）ここは地球じゃないよ～』

俺は瞬間紙切れを握りつぶすと竜巻の方向に放り投げた。紙切れはいつたん空中で停止し、竜巻の中心へと引き寄せられたあと姿が見えなくなつた。

……ふう。ポイ捨てはよくないけど、まあいつか。

さつきの紙の事は記憶から抹消し、再び思考を始める。その時だつた。

『ちよつとー、ひどいじゃないか～』

いきなり、地面から人間が生えてきた。によきによきつと生えだそは、俺よりもでかい人型をしており、半透明に透けていた。

「…………は？」

あいた口がふさがらない。何だこの近未来的なカンジの物体は。

『ハロー、はじめましてコウ。神です』

次の瞬間俺はこのおかしな物体に思いつきつ蹴りを食らわせていた。

『べふらばあアアアー！？』

半透明なくせに律儀にダメージをくらつて吹っ飛んだ（自称）神は、三メートルほど樂々と空を飛んだ後に大木にぶつかって跳ね飛ばされていた。

見てこのじつちが同情してしまつぽいの見事な飛びっぴりだつた。

「というか……何だ今のキック力！」

慌てて自分の足を確認するも、某名探偵で有名なあのちびっ子がはいているめちゃくちゃ便利な靴ではない。俺がはいているのはどこにあるようなスリッパだ。

なぜスリッパなのか、といつ疑問は割愛させていただく。

問題は、異常なほど上昇したキック力だ。それと、なぜこじこじるのか、こじは一体どこのか。

俺が疑問に頭を悩ませてこると、向こいつ側で何かがむくつと起き上がる気配がした。

俺が振り返ると、わざわざアヤシイ半透明の物体が痛みをこじれてこじるところだった。

『せ……背骨が……』

見なかつたことじよつ。

俺はすぐさま前に向き直り、少しでも距離をとらうと歩き出そうとした。が。

胸をがじつとつかまれた。

『あ…………まひやハリト…………』

ねえ、自称神。

あなたきっと神よりも背後靈に向かっておると想いますよ。

神は必ず人型である（前書き）

感想を書いてくださった方、評価ポイントを入れてくださった方、
ありがとうございます！

このことを励みに、今後ともがんばらせていただきます！

神は必ず人型である

『で、話を聞いてくれる気になつた?』

「はあ……」

今、俺は地面にあぐらをかいて座つてゐる。
目の前には先程よりも透明度が増した気がする（自称）神が、ふ
んぞりかえつて俺を見下ろしてゐる。…………ここつ、どつぐそ。

「んで、話つてなに?』

『この世界についての説明だよ』
神が話しあげめた。

『ここには私が初めて創つた世界なんだ。他の世界の良い所を真似し
てね。

だからここには人間もいるし、君の世界に居たような動物もいる。
気候や自然も君の世界によく似ている』

「確かにそうだな」

俺は頷いた。さつき見た森や鳥達は、俺の世界の物とほほ同じだ
つた。

『でも、それだけじゃないんだ』
神は、ここで急に話を変えた。

『私は君の世界に憧れていた。特に…………』
「ちよ、近い近い近い！」

突然、神がこっちに身を乗り出して叫んだ。

『君の世界のゲーム……』

「…………は？」

思わず呆然としてしまった。

「ゲーム…………だと？」

『そうー』

神はそれこそ効果音が出そうなくらいに目をキラキラと輝かせた。

…………ハツキリ言って、引くぞ。

『剣と魔法が重なり合つあのすばらしきファンタジーの世界！
ドワーフ・エルフ・ドラゴン・フェアリー達との出会い！
勇者と魔王の壮絶な戦いに、そこに至るまでの仲間達との友情・恋
愛！

ヤバイ、ヤバすぎる！…………』

ああ、確かにヤバイな。お前の頭。病院に行け。
つか、お前オタクだつたんか。

『あの時だけは本氣で君たち人間を尊敬したよ。人間の想像力は尽
きることを知らない！

だから私は、あのファンタジーを現実にしたんだ！－』

…………つまり？

- 1、神ゲーム大好き。
- 2、ゲームを現実に。
- 3、イコールここファンタジーの世界。

「…………」

驚きすぎて声も出ない。

ここが、あのゲームの世界だと？

「あ、でも、別にどのゲームを参考にしたとか、そんなことはないから。

全てのゲームのいいところをとつて創つたからね。
おかげで街とか増えまくつて、お城も多いしさ。
何も考えずに創つてたら、魔王が大量に出来ちゃつて。
「は…………はあああああああああああ…………」

俺は思わず叫んだ。だつてそうだろう。

「おい、魔王つて最強なんだぞ！」 それこそレベル1から育てた勇者でやつと勝てるんだ！

なのに一匹じやないつて……一匹倒してゐる間に他の魔王に攻められたらどうすんだよ！？」「

勇者がかわいそうだ。

「もとから俺は、バー・テイー組んで魔王倒すって、言つちまつたら
リンチだよな」とか思つていた。

たかこうなると……逆リンク発生！？ いじめられっこの逆襲か！

そんな俺の必死の叫びを聞いて、神は一ツコリと笑つた。

嫌な予感。

『君つて意外と頭イイね』。そ。君が今回ここにいるのはそのため

10

『えーと、簡単に言つて、いつなる』

1、テキトーに魔王じゅんじゅか増やしてやつたぜ

2、あ、やべー。人間絶滅しそう。

3、勇者勇者勇者、ちょ、勇者足りないーー 誰か持ってきてーー。

4、俺、召喚

「て…………てめえ…………」

俺は怒りにフルフルと震えた。なんだって

それって完全にお前が悪いだろ！

つか

なんで俺！？

『一応勇者こっちで製造してたんだけど間に合わなくてやー。そこでちょっと休憩してたときに君見つけたの』

え、え！？ ていうか勇者製造って

その時、俺と神の目が合つた。

【場か！？

『その命、捨てるくらいなら私がもうう

「…………なんで捨てようとしたかは、聞かないのか」

『そういうと、神はふつと笑つた。

『なんとなく予想ついてるしね。それに、無理やり連れてきちゃつたおわびもしたんだから

「おわび？」

俺が首をかしげると、神はちょっと顔を引きつらせた。

『ほら……身体能力がめちゃくちゃ上がつてたでしょ

「ああ！ あのキック力か！』

これで納得がいった。よかつた、変な病氣とかじやなくて。

病気なんて、今かかるやつだけで充分だ。

『他にも色々あるんだよ～』

神がうれしそうに披露する。

『視力もよくなつたし、ここには魔法もあるから、魔力も最大にし
といった。

それと……君のその病気も』

体が、震えた。

『よほどの事がない限りは、発作も出なことにしてある。
でも、君の世界の病は強すぎて……ここまでしか』

「いいよ、別に」

俺はぶつきりぱりついた。

「もともと一回捨てた命だ。気にしない」

『そつ……ならいいや』

突然、神の姿が薄れ始めた。
どんどんと完全な透明に近づいていく。

「お、おニコ!?」

『んじゃ、私はこの辺で帰るわ。あ、そういう、一つ間に忘れてた。
なぜいつも引張ってきたのが君だったのかといつと

そして、神は完全に消えた。

「……最後まで言つてから行けよ」

そんな俺の声が聞こえたのか、また僕はなるめぐらしく僕はなる

そんな俺の声が聞こえたのか、また空から一枚の紙が。

ララ、ララ。

掴み取つたそこに書いてあつたのは

○

『かわいそーだから、たすけてあげました。えらいでしょ？』 by 神

「つたく、あのHセ神、そのうち殺してやる……」

ブツブツ言いながら森の外へと足を進める。

手元には、あの時空から降ってきた紙。

そこには、さつきになくなつたはずのHセ神が半透明の生首となつて浮かんでいる。

……軽くホラーだ。

『だれがエセだ、だれが。私は正真正銘のカミサマですうー』

しかもしゃべる。

「お前が本物だつたらカミサマなんてそりゃあふれてるよ
『ひつどーい。まあ、実際そうなんだけどね』

「は？」

俺は思わず手元の紙を凝視した。実際にはそこには浮いてる生首だが。

神はすらすらとしゃべりだした。

『世界なんていぐらでも存在するし、がんばつたら何個でも創れるからねー。世界を十個ぐらいいつも結構いるしい？

世界一つに付き神一人つて決まつてるわけでもないしねー。

あとは、それぞれの世界の“内側”にいる神かなー』

「“内側”？」

『そー』

神はうなずいた。

『世界の中で勝手に生まれたり、私達が創つたりしたやつ。君たちでいう守護霊とか、仏とかキリストとか？

山のぬしに海のぬし、そして何といつてもフェアリー……。』

「あーはいはい」

俺は軽く流した。こいつはなぜかおどき話の生き物が大好きらしい。まあこっちには関係ないが。

『ちょっとー、流さないでくれない？』これ結構重要なだけだ

「分かつたから、顔を近づけてくるな。この紙破るぞ」

『えー、それは困るー』

なんでも、この空から降つてきた紙は、神をここに実体化させるための媒介だとか。

これがないと、力を無駄に消費してしまうらしい。別に、破れたらまた降らせればいいと思うのだが。

『それが出来ないからいつてるんでしょー』

「何で出来ないんだよ。魔王は馬鹿みたいに増やしたくせに

『そりや魔王はカッコいいもの。大好きだもの。がんばっちゃうじやん？

でも紙だとね……やる気が出ない』

「お前のやる気の問題か。働けエセ神」

魔王なんていう面倒なものを増やすな！ 人様の役に立つやつを創れ。

『ん~、確かにやる気がないのも自覚してるけど、それだけじゃない。世界の仕組みっていうのが関係しててね』

神が説明する。

『世界の大きさによって、そこに存在できる物体の数は決まつてんの。』

で、私みたいな神は、それにあわせていろんなモノを創る』

神が周りを見回した。

『大地を創るために土と砂と石を創つて、海を創るために海底と塩と水を創つて。

それぞれに適応する植物や動物を創る。
葉っぱ一枚でも、人間一人でも、物体としては両方一つだ。それを調整して、うまく循環させる』

「……つまり、規定の数以上のものは創れねえのか」

『そー。今この世界はギリギリでね。他に創らなきゃいけないもので手一杯なの。私が創つたものが自然に数を増やすのはいいんだけど』

「ふうん」

俺はそこでうなずいたが、疑問が一つ生まれた。

「待てよ。この紙を破つたらその分物体の量が減つて、もつと紙を創れるようになるんじやないか？」

『…………ねえ、君つてバカ？』

「殺す」

『ぎやーす！！ ちよ、ストップストップ！！ 目が、目が怖いよ君イイイー！！』

だれがバカだ。俺はこの生首を殴りつと拳を振り上げた。神が必死に首を振るが、知るか。

俺は、問答無用で生首をぶん殴つた。

ガンッ！！ といい音がして、紙の上の生首が何度も高速回転した。たぶんかなり吹つ飛んだ。

まあ、殺意がこもつてたし。

つか、やつぱつ半透明でもダメージはこくのな
転が止まつた生首は、由由をむいて固まつてゐた。

回へりへりまじ

……か、とやこあわたか

とか思わないのが俺である。

俺は氣絶した（よう）に見える）生首にビンタを食らわせた。

ハシチイハセノミ

『もういいや』俺の前で気絶してゐフリなんて通じると思つたか。張り倒すぞ

涙目なのは放つておいて、ズイツと神に詰め寄つた。

女 ト 近 ト て

卽答！？

俺は神の目を見つめた（といふにらんだ）。

「で、俺がバカだつて？」

『 』

卷之三

俺が神の頭をつかむと、よつやか話し始めた。

頭がミシミシいつてゐるのば、氣のせいだ。（言い切つた！？） b

神

『えー、たとえこの紙をバラバラにちぎって燃やして風に飛ばしても、その物体はなくなつたことにならないの』

「なんでだ？」

『それは、もとあつた紙が姿を変えただけだから。物体のモトになる、核がこつちに戻つてくるためには、その存在が完全に消え去らなきゃいけないの』

たとえばね、と神は例を挙げた。

『君たち人間だつたら、死んだ後に埋葬されるでしょ？ それから肉が他の動物や虫に食われたり、骨がだんだん風化したりして、その人を構成する物質が完全に“消滅”しないとダメなわけ』

「へー」

『だから、紙を破つても核がこつちに戻つてこないし、私が媒介として使えないっていう損ばかり。

君を生きてるうちにこつちに引っ張つてきたのもそういうこと。レベル1から育てるこども出来るけど、今はあいにく満員なのよ』

俺は納得して神から手を離した。

神が頭をさすつて『何も見えない（こども）』（わすれて）。

だいぶ歩いたからだらうか、ようやく森の出口いらしきところに近づいてきた。

かなり遠くにだが、うつすらと森が開けた場所が見える。

『で、そろそろ本題に入つていい？』

「本題？」

『私がこんな痛い思いしてまでここに来た理由だよー。』

『私とぼけたら危うく噛み付かれそうになつた。』

『勇者である君には、まずは王都に向かってもらひ。とりあえず、だれでもいいから王族と会って君の勇者といつ存在をアピールするんだ！』

『……なんだかますますファンタジーっぽくなつてきたな』

『だってファンタジーだからね！』

何でお前はそんなにうれしそうなんだ。

「……はあ、行くか」

観念して、俺は森を抜けた。

。

一つの決意を胸に。

決意と脱出（後書き）

……ついで森を抜けましたね。一息つけてほっとしています。
さて、この後は田舎王都！どんな展開になっていくのか、私にも
まったく分かりません！
見放さずに見守つていただければ幸いです。

到着（前書き）

はい、作者のユミルです。

ある親切な方からのアドバイスを頂き、今までの話全てを一度編集しました。

これでより読みやすい作品になっていると思われます。

作者は初心者です。何かありましたら遠慮なくしかりつけてください。

では、どうぞ。

到着

はい、黒木悠です。ただいま王都に到着いたしました（わ～パチパチ）。

え？ なんですかそこの人。「めんどくさいから省いただひ？」いやいや、そんなことはありません。

ただ、何事もなく王都についてしまつただけです。

あの森からこの王都まで徒歩十五分。神が媒体に使っていた紙を地図にしてもらい、平坦な道のりをほてほてと歩いて、はい 到着。

……うん、寂しかつた。

神もいつの間にか消えるし、だれにも会わないし、なんも無いし。門が見えてきたときには涙がこぼれそうになつたね。

で、その門の前。

さすが王都の門、だけあって、その威儀ははかりしれない。古くとも重厚なこの門は、今までずっと王都を守っていたのだろう。両端にある見張り台から見える兵士達も、表情だけでこの仕事に誇りを持っていることが分かる。

が。

（い、怖え……）

訪れる人々に恐怖を『える』こともある。

門というよりも壁といったほうがふさわしいかもしないこの石造りの門は、高いわでかいわ厚いわで、人々に向けて発する威圧感が半端ない。それにくわえて出入国のチェックをしている兵士さんがやけに怖い。

ガタイのいい体付きに腰にさした剣。歴戦の戦士っぽい顔の傷。

……子供は無理だな。うん。

とりあえず入国審査の列に並ぶ。そんなに人がいないため、意外と早く兵士さんに会えた。

「心の準備が……！」

「次！
「は、はい！」

思わず声が裏返る。変に思われない程度に最大限ゆっくりと兵士さんに近づいた。

「名前は」
「ユウ・クロキです……」
「神から、この世界は名前が先に来るのだといふことも教えてもらつていた。
「歳は」
「17です」
「入国理由は」
「か、観光に……」
「……観光？」
「は、はい」

ない頭を振りしぼつて考えた入国理由を問い合わせられ、表面上はいつもの顔でも、内心はめちゃくちゃ慌てていた。

「……そつか。 いつていいぞ」

「…………」

「……？ おい」

「はー？ はいすみませんすぐ行きます！」

やばい。一瞬記憶が走馬灯のように頭の中を駆け巡っていた。
どうしようつこれ捕まる？ 捕まるのかな何死刑？ 死刑になんの
俺ああどうしようつせめて彼女の一人でも欲しかった
みたい
な。

最後の部分は言いふらしたやつ口ロス。

とりあえずダッシュで門を抜け、いよいよ王都に足を踏み入れて
驚いた。

「う、わあ…………」

そこには、まさしくファンタジーの世界が広がっていた。

入つてすぐに市場があり、様々な店が客を集めようと声を張り上げている。それだけなら俺の世界となんら変わりがないが、商品が一味も二味も違っていた。相当な人の数でだいぶ混雑しているにもかかわらず、俺の目は自然と商品に釘付けになる。

売つて いるのは 魔法の品々 だつた。

薬草の束から回復薬を取り扱つて いる薬屋。

よろいやかぶと、盾などの防具を扱う防具屋。

現在の日本国では 一度もお田にかかつたことがなかつた本物の剣
やオノを 売る 武器屋。

杖から魔術書から水晶から、怪しげなものが数多く置いてある魔
法具屋。

全てが俺を魅了した。

到着（後書き）

やつと王都に到着。
このあとは身支度を整え、誰かと接触させたいと思つています。
なかなか難しい……（汗）

服屋とゆ（前書き）

なかなか話が進まない……。

「……うし、とつあえず一くんくらいか

今、俺は市場から一本横道にそれたところにいる。大通りが広すぎるせいで、一つ通りが違うだけですごく静かだ。手の中には大量の荷物が。

「めぼしいものは全部買ったかな……」

ついさっきまで、俺は市場で買い物をしていた。とりあえず田に付いたものを片つ端から買い込んだ。おかげで荷物は両手で抱えきれないほどになってしまっている。それこそ薬草やら水晶やら魔術書やら食料やら寝具一式やら多種多様だ。

え？ 金はどうしたかつて？

あの例の紙から神を呼び出して、金を巻き上げ……ゲフンゴフン、いただきました。

袋一杯の金貨と、四次元ポケット的なカンジの不思議カバン。その金を使い切らんばかりの勢いだったな。

とりあえずカバンの中に荷物を全部放り込んで、疲労した両腕を大きく回して伸びをする。

市場はとても混雑していて、つぶされないように体を張つて筋肉が疲れた。

ちなみに、最初に加減が分からず思いつきり突き飛ばしてしまった人は他の人を五人くらい巻き込んで吹っ飛んでいきました。

……だれが驚いたって、俺が一番驚いたよ。

「他に必要なものは……防具と服と武器、か

ちなみに服は病院着です。

いや、飛び降りたところが病院だったから、着替える暇がなかつたんだよ。

おかげで市場にいた人々から白い眼で見られていた（気がする）。

「……とりあえず服だな」

よし、と気合を入れて、再び市場の喧騒の中に入つていった。

／＼＼＼＼

しばらくさまよつた後に服屋（らしきもの）を発見。

チラツと中を覗くと、カウンターに、座つている立派な体格のおばさんが見えた。

「いいでいいか。

ドアを引いて中に入る。気付いたおばさんがこいつを見たあと、少しだけ目を瞠つた。

そのあと、興味深そうに声をかけてきた。

「こひつしゃい。珍しいね、“黒”のお姉さんなんて」

「“黒”？」

「おや、知らないのかい」

カウンターに近寄りながら問いかけると、おばさんはちょっと驚いたようだ。田舎から出てきた若者だとでも思ったのだろう、詳しく説明してくれる。

「お前さん、地方の出身かい？ まあ、そうなう仕方ないね。服も

なんだか特徴的だし」

「故郷の民族衣装でね。それより、“黒”ってこのは一体何なんだ？」

「じめんおばさん。故郷の民族衣装は着物であつてけつしてこんなジジくさい病院着じやありません。

なんて言葉を心の中でつぶやきながら、続きを促す。

「“黒”ってこのはね、黒田黒髪の容姿を持つたやつのことや。他にも、赤目赤髪なら“赤”、それに、青目青髪なら“青”って呼ばれる」

「じゃあ、おばさんは“金”か？」

「だれがおばさんだい。あたしはまだ二十代だよ」

「ついつてえ――！」

思いつきりげんこつをくひつた。

目から火花が飛んだ氣がしてふらふらする。

つーかおばさん二十代？ うそだろ詐欺だろお詫びして訂正しろ。

どう見たつて、子供を3人は持つてて旦那を尻に敷いてそつな三

十代後半の主婦だろう。

「それに、その答えもハズレ。あたしは“金”じゃないよ」「え？ でも金髪に金目…………」

「この目はね、金に見えるけどただの明るい茶色さ。だから、あたしはただの“無色人”だよ」

「む、“無色人”？いやでもおばか………… オネエサンは透明じゃないよな？」

オネエサンからの刺すような視線に慌てて言葉を訂正する。

つーか、“無色人”とはなんだ。

「あんた、本当に何も知らないんだね…………」

呆れたような声とため息は無視する。

「“無色人”つてのは、ようするに“色”的称号を持つてないやつのことだよ。逆に持つてるやつの事を“有色人”って呼ぶ。あんたは“黒”的称号をもつてるから“有色人”、あたしは持つてないから“無色人”さ」

「ふーん。でもさ、そんなもんもつてて何になんの？」

「“有色人”つてのは、ようするにお貴族さまのことさ。色の称号を持つていなやつよりも、持つているやつのほうが格段に優遇される。他にも色ごとに階級があつて、一番上が“金”、次が“黒”、他に“銀”やら“赤”やいろいろあつて、一番下が“白”だね。“白”は、唯一“有色人”でありながら“無色人”よりも階級が低くて、その分世間から冷たくされてる」「…………それって、さ。差別だよな」

俺がそういうと、相手はすこし驚いたようだつた。続いて、優しげな声が降つてくる。

「あんた、相当平和なところで育つたみたいだね。でも、そんな考えここでは捨てな

厳しい声音と視線。

「ここじゃ、差別なんて当たり前、それが常識なんだ。奴隸なんてのもいる。ちょっとの失敗で“無色人”なら打ち首さ。普通なら、“有色人”がこんな店に入ること自体がありえないんだ。あんたみたいな綺麗な“黒”は初めて見たから、悪いようにはされないだろうけど、こここの事に口出しするんじゃないよ。そんな事をしたつて、何の得にもなりやしない」

「…………そつか

おばさんが表情を緩めた。俺が納得したと思つたんだろう。

「なら、
「でも、
「でも、と俺は続けた。

「俺が今まで生きていたところでは、全部が全部同じだつた。ここの言葉を借りるなら、家族も親戚も友達も赤の他人も、全員が全員“黒”さ。中には自分から髪や目の色を変えるやつだつてい

おばさんが、驚きに目を見開いた。

「だから

俺は、笑つて言つてやつた。

「色があらうがなからうが、階級が高からうが低からうが、俺には何の関係もないのさ」

……………じぜむへあと、おまわんせふつと息を吐いた。

「…………あんた、あいつと早死にするよ」

「そんな気はサラサラないけどな」

俺たちは顔を見合わせて、どちらからともなく笑い出した。

ひとしきり笑いあつた後、俺が話を切り出した。

「で、服を買いたいんだけど」

「服かい？確かにそんな格好じや田立つだらう。いいのを選んでやるから、少し待つてな」

おばさんはさうして店の奥に消えると、程なくしてすぐに戻ってきた。

「けつこいヤツ選んでやつたから、高こよ

「だいじょーぶ。金ならあるから」

ふとこの袋から金貨を取り出してジャワジャワ音を鳴らすと、おばさんにまた呆れられた。

「ほんと、アンタみたいなヤツは初めてだよ。はい、金貨三枚ね」「ありがとう。奥で着替えてきても良いか?」「いいよ。サイズがあわなかつたら言いな」

金貨を渡して奥の試着スペースへと入る。俺の世界とそんなに変わらない服と、まったく着方が分からぬ服に混乱しながら着替えを済ませた。

その間に。

「ほんと、おもしろいやつだねえ……」

『俺には何の関係もないのや』

この国にはびこる“闇”。自分達はそれを知りながらも、それが「必要な犠牲」だと言い訳をして、目をそむけて逃げていた。

でも、そんな“闇”を、あの少年は鮮やかに断ち切つて見せた。いつも軽々しいほど簡単に。

「ほんと、おもしろいやつだよ……」

入ってきた新しい“風”。

「何か、変わるかもしれないねえ……」

どちらに転がるのかは、まだだれにも分からぬけれど。

服屋と色（後書き）

さあ、やつと神以外の人物登場！
これからちょいちょい出していく予定です。
つーか、自己紹介せるの忘れたアアアアアー！！

“白”と“黒”

着替え終わり、奥から出てきた俺を見て、おばさんは満足げに顔を緩ませた。

「へえ、似合ひじゃないか。サイズは大丈夫かい？」
「ああ、平気だよ。ま、馬子にも衣装つてやつかな」
「なんだいそれ？」

「俺の故郷のことわざだよ」

俺は着替えたばかりの服を見下ろした。

黒で統一された色が、髪と瞳の色にとてもあつていい。動きやすい素材で作られたシャツやベストに、ズボンにつけられたベルト。ベルトには袋など吊り下げる機能が付いている。そして、フード付きのマントと来れば、

(俺、冒険者っぽい！？)

やべー、なんか感動する。

「で、あんた宿は取つたのかい」

「え、宿？」

新しい服に見とれていた俺は、おばさんの問いかに首をかしげた。

「今のうちに取つとかないと、夜になつてから野宿、なんて事になりますかねないよ。ここは曲がりなりにも王都。旅人や観光客の数が半

端じゃないんだからね

「へーえ。んじゃ、一回行つてみるかな。」いつから一番近い宿は?

「どんなのでもいいなら色々あるけど、私のお勧めは【黒の巣】だね。値段も手ごろだし、結構いい穴場だよ

「ん。何から何までありがとおばさん」

「おばさんじやないつて何回言つたら分かるんだいこのチビガキが

!—!

「つてえエエエエー!—」

本日一度目の制裁。頭が割れる脳細胞が減る背が縮む!—!

「じゃあ名前! 名前教えてくれ。俺はコウ・クロキ」

「ふん、ガキがいつちょまえによく言つよ。あたしはティーズ・クロード。困つたことがあつたらなんでもいいな

「了解! ジャあなティーズさん」

俺は服屋をでた。

／＼＼＼＼

で、俺は迷うことなく【黒の巣】について、部屋を一つ取つた。なかなかいい部屋で、狭いけどベットふかふかだし、文句なしだ。

窓から外を見ると、よつやく日が大地に埋まつとしていた。

「腹減つた……」

ここに来てから何も食べていない。

一度食堂に下りて従業員の人に聞くと、ここでのサービスは朝だけらしい。

一度自覚した空腹感はなくなるどころか更に存在をまじ、俺は外の露店で食うことに決めた。

~~~~~

で、歩くこと十分強。

露店を適当に冷やかして歩きながら、食べ物を探す。

しかしどれがうまくてどれがまずいのかがさっぱり分からず、いまだに食べ物にはありつけていなー。

俺の胃は繊細なんだよー異世界まで来て食中毒なんて起こしたくない。

食中毒は軽くアラウマだ。

とりあえず、つまいでいを発見したので歩いてみると、うまい匂いのするほんとにひたすら歩く。

歩いて、歩いて、歩いて。

気が付いたらどこを追つてきたのだが、ここがどこだかわっぱり分からぬ。

ちゃんと匂いを追つてきたのだが、ここがどこだかわっぱり分からぬ。

とりあえず、また歩く。

歩いて、歩いて、歩いて。

見えてきたものは、つまらものとはかけ離れた光景だった。

「ヒヤハハハハ！ 上田じやねえかこいつア。しかもこのガキ“白

”  
だぜ  
！  
”

「いいいにしだなアおじよーちゃん。悪くはしねーからね」

声につられて横の路地を覗き込むと、聞こえた声とあわせて、他にも三人ほどの柄の悪い男達。合計五人の野郎が、何かを囲んで立っていた。

# 一人かかかみこんた

「しつかしまあ綺麗なお顔だこと。“白”的ガキつてだけでも高え  
のに、この面じゃあ、どこかのお貴族様にかわいがられるんじゃね  
えか？」

一 ピサ ハハハハ !!!

俺が見ると、野郎たちに囲まれているのは、まだ幼い少女だつた。

腰まである長い髪。そして、その色は綺麗な白だった。  
じいちゃんばあちゃんの縮れたよつた毛ではなく、美しくなめらかな髪。

(キレイだな)

素直にそう思つた。

「じゃ、さつさと売り飛ばすか」「金賃何枚になることや。」

男達が少女の腕を無理やり引っ張った。

次の瞬間、俺はそいつらの前に姿を現していた。

「つーーー？ 誰だテメエはー！」

俺を見つけた男が声を上げる。

「別に、通りすがりの若者ですけど。オッサンどもがいたいけな少女を誘拐しようとしているのを、見過ごせるわけないだろーが」

「ああ！？ てめえヒーロー気取つてんじゃねえぞ！」

「見られたのはまずいな。やつちまえーー！」

一人、二人と大声を上げて襲い掛かってくる。

だが、あまりにも遅い。

「うつせーんだよ糞が。」近所さんの迷惑も考えて、」

俺は思いつきり足を引いて、あの時工セ神を蹴つたように振りぬいた。

「静かにしどけツツツーー！」

一人の体に俺の脚がめり込んだのが分かつた。

一人は悲鳴をあげるまもなく吹っ飛び、他の仲間にぶつかって気絶した。

唚然としている男達に声をかける。

その時、薄暗かつた路地に一筋の夕日が差し込んだ。男達の背中のほうから差してくる光が路地にあふれ、視界が一気に明るくなつた。

俺の髪と目の色が見えたらしいそいつらは、気絶した一人を担いであつという間に消え去つた。

「さなく逃げるくらいたら最初からすんなーーーのそんなにこの髪が怖いかね？」

ぶつぶつ言いながら少女に近づく。と、彼女はおびえたようにあ  
とずかった。

## しかも目には涙

(……なんか、懶こじらつてゐ坂になつてくんな……。それにしても

「キレイな髪だよな～」

少女は驚いたように目を見開いた。  
俺はそんなことに気付かず続ける。

「俺がじいちゃんになつてもいいまで綺麗になんねーぞ。しつかしつまく色素抜けてるよな」

を開いた。

「あ、あの」

「ん?」

「ありがとうございます。助けてもらつて……」

「いーや、別に? つかそつちのほうが大丈夫?」

「は、はい。なんともないです。“商品”には傷をつけないので……」

「……“商品”?」

俺は顔をゆがめた。せつしき話したばかりのティーズさんの声が頭によみがえる。

『いーじや、差別なんて当たり前、それが常識なんだ。奴隸なんてのもいる』

奴隸。“商品”とは、やつこいつなんだろう。

(でも、)

まだ十歳ぐらこの子供が、そんな事を言つ。

それは、酷く哀しい。

「なあ、お前、名前は?」

「……白<sup>ハク</sup>。でも、この名前は嫌いです。“白”であることを、忘れられなくなる……」

「そ…………んじゅ、お前の名前は今から“ゼロ”だ  
「え？」

少女 ゼロが驚いたように皿を見開く。

「“ゼロ”っていうのは、俺の故郷で“なにもない”ことを表すんだ。  
お前はお前、色なんて関係ね！」

俺は笑った。

「お前、気に入った。一緒に来ないか？」

少女はしばらぐ何も言わなかつたが、少し後に泣きながら笑つた。

「…………っはい！－！」

ゼロの皿じりから、最後の一滴が零れ落ちた。

## “白”と“黒”（後書き）

結構強引に仲間にしちゃいました。とりあえず一人目ゲットです。次は、何も知らないユウ君に、ゼロからこの世界の事を教えていただこうと思います。  
誰か、文才分けてください…………！

夜と闘う（前書き）

なんかめつめや短いです……。  
すいません。

俺たちは、とりあえず露店で夕食を食べて宿に帰った。

メニューは、ゼロのお勧めでカルの串焼き。カルつていうのは何か分からぬけど、豚みたいな味がした。

ゼロには四次元ポケット的なカバンの中から出したフード付きローブを着せた。これもティーズのところで買つておいたもので、俺のサイズだからぶかぶかだ。前がちゃんと見えているか心配だ。

俺はゼロの歩幅に合わせてゆっくりと、ゼロは長すぎるローブの裾によたよたしながら歩を進めていた。

で、宿屋。

帰つてきたときには満室になつてあり、ゼロの部屋が取れなかつた。んで、今は俺の部屋のベッドの上で、ゼロと向き合つてこる。

……別にやましいことなんてなにも考えてないからな！

ちょ、その人！ そんな汚らしいモノを見る眼で見ないで！ 仕方がないだろ！ この部屋ベットか床以外に座るところがないんだよ！ つーかベット以外の家具がない。せいぜいベッド脇の小さなテーブルぐらいだ。

「……あの」  
「ん？ なんだ、ゼロ」

意識をアツチ（ビッちだー！？）に飛ばしていくと、ゼロが声をかけてきた。

「『』主様のお名前を教えてもらつてもよろしいでしょうか？」

「ツゲほごほがは！！」

「『』ご主人様！？」

思わずむせた。

だつて「『』主人様」だよ！？ なんなんだそのメイドさんとかが  
言いそうな名称は！？  
俺にはそつちの氣はない！？ ……はずだ！？

「お、俺はユウ・クロキ。ユウって呼んでくれ、頼むから」

「……？ はい、分かりましたユウ様」

またむせそうになつたがこらえた。「『』主人様」よりはました。  
息を整えてから問いかける。

「で、ゼロ。なんであんなどこに居たんだ？」

「……はい。お話します」

ゼロの話を要約するとこうなる。

元は山奥の農村で生まれ育つたが、奴隸商人達に村を襲われ、捕まつたあとは街を転々としていた。そして、近くの街で買われたが、ここについてから隙を見て逃げ出してきた。  
ということらしい。

「へえー」

「ユウ様に助けていただいたのは、ちょうど逃げ出してから一時間  
ほど経つたときです」

走りつかれて休んでいた所を、あの『』のつつきもに見つかったの  
だとか。

奴隸、ね。 いまだに実感が沸かず、よく出来た映画を見ているような感覚だったが、現実に起こっていることだとなんとか認識する。

「本当にありがとうございました。あのままだつたら、きっとまた奴隸商人の所へ連れて行かれてしまつたと思います」

「いいつて、いいつて。こつちがムカついたからやつただけだし」

頭を下げる。口を、手を、まことに。おまかせ。

本当に、感謝されることなんてないのだから。

「ま、いいか。とつあんや寝ながーーー」と言つたこなじも、どうか  
るかな……？」

やつを言つたよつて、この部屋にはベット以外の家具がない。

俺が考へてゐると、ゼロが慌てたように声を発した。

「ユウ様はベッドでお眠り下さい！  
「そーいう訳にはいかねーだろ  
「ひやあ！？」  
わ、私は床で結構ですから！  
が！」

慌ててベッドから降りようとしたゼロを引き止めた、つーか首根っこの引つつかんだ。そのまま布団をかぶせる。

「ユ、ユウ様！？」  
「はい逃げるな暴ね

はい逃げるな暴れるな～落とすぞ」

「ん、よし」

バタバタと手足をばたつかせるゼロを大人しくさせ、自分も布団

に潜り込んだ。

「じゃ、諦めて寝る。おやすみ」

「は、はい、おやすみなさい」

……いま思えば、こっちに来てからはじめての睡眠だ。色々と知らないところで疲労がたまっていたのか、俺は五秒後には深い眠りに落ちていた。

夜と眠り（後書き）

……話がすすまねー。

登場人物少ねー。

……文才ないな、自分（涙

## 世界観と“術”と病

すーぱーらしーーーあーさがきた、きーぼーうのーあーさーだ、  
よーうじーびにむねをひーらけ、おーおぞーらあーおーげー。

……なぜか知らんが、夏休み恒例の朝の体操の歌が出てきた。ナ  
ガ。

むくつと体を起こし、寝ぼけ眼のまま、周りを見回した。

そこにあるのは、優しい朝の光に照らされた室内と、見慣れない  
木製の壁と床。

ふつと隣を見ると、昨日拾った白い子供がすやすやと寝息を立て  
ている。

見慣れた白く硬質な病室とは違う、暖かな空間。  
窓の外から鳥の声が聞こえた。

「……ふあああ

あぐびが出た。まだ朝の早い時間帯らしく。もう一眠りしようと、  
もぞもぞと布団の中に潜り込んだ。

もう一眠りぐらい、しても構わないだつと思ひながら。

で、気付いたら暁でした。

真上からさんさんと降り注ぐ太陽の光に、活気にあふれる市場の

呼び声で目が覚めて、こんなに時間がたつたことに驚いた。隣を見ると、朝と同じ格好でゼロが寝ていた。

上体を起<sup>い</sup>し、ベッドから降りる。大きく伸びをして、体をほぐした。

(……ずいぶんよく寝たな)

体の軽さに驚きながら、いつして立つていられる喜びを噛みしめた。

(今日はどうするか)

第一に食事を取つて、その後にゼロの服だな。またティーズに世話になる事になる。

とりあえづ、ゼロを起<sup>い</sup>すことにした。

（――）

「すみません……コウ様をお起<sup>い</sup>しすることができます。……」

「ゼロ、こいつて言つてんだろ？ それよりほり、服選べ服

「は、はい……」

こ<sup>こ</sup>はティーズの服屋である。遅い朝食、といつか昼食を食べた後にやつてきたのだ。ティーズに言つて、ゼロ用の服をいくつか出してもらつた。今まで来ていた服はぼろぼろで、とても着れるような代物ではない。

ゼロの前には色々の服が並べられている。ゼロは落ち込みつつも、真新しい服を見て目を輝かせ始めた。

(……そりゃそうだわな)

ゼロも女の子だ、買い物が楽しいのも当たり前だろ？。それに、いままでろくな生活をしてこなかつたはずだ。ゼロはとても楽しそうに見えた。

ティーズが奥からなにやら引つ張り出してきた。

「お嬢ちゃん、アンタにはいつこののが合ひと細ひよ  
「あひの細ひよ

そついつて取り出したのは、いくつかの腕輪だった。

「なんで腕輪なんだ？」

「そういうや、アンタは何も知らないんだつたね。こいつらの腕輪とかの装飾品は、ほとんどが宝石や結晶なんかで作られてるんだ。それに魔職人が魔力を込めるとい、立派な魔法具になる」

ティーズは腕輪をもてあそびながら言つた。

「魔法具には能力を高める効果があつてね、冒険者や傭兵なんかの間では必需品や」

「……俺の時は何にも出でなかつたくせに」

「あんたは今身につけてるやつだけで充分さ。どれだけ奮發してやつたと思ってるんだい。もう防具を買わなくともいいくらいいだね」

「これ、そんなんにするのか？」

俺は今来ている服を見下ろしたが、そんなスゴイ風には見えない。まあ、こんな服を着てるだけで俺に取つかやあスゴイんだけど。

「全部で金貨三枚だろ？ 金貨一枚で平民の半年分の給料になるよ」

「……まじでか」

平均月収を一十万円とする、半年分だから六ヶ月……百二十万！？

つまりこの服は三百六十万円！？

「つそだろ……」

「本当だよ。まったく、金勘定も出来ねえのかい」

ティーズがあきれたようにため息をついた。

「じゃあなんで腕輪なんだ？ 首飾りとか色々あるんだろ？」

「もともと“白”は魔法が使えないんです。でも、武術に関しては天才的な能力を見せるんです」

「武術はたいていが腕と足を使つからね。田標に近い装飾品を選んでおいたほうが効率がいいのさ」

「武術か……ゼロも戦えるのか？」

俺が聞くと、ゼロはフルフルと首を振つた。

「私は戦えません。産まれた時に施された“術”のせいです……」

「“術”？」

「はい」

ゼロはおもむろに両腕の袖を肩までめくつた。

あらわになつたそこには、なにやら幾何学的な模様が刻み込まれている。

つか、ティーズさんが邪魔でよく見えねえ。

「私達“白”は、男は産まれた時から武術を叩き込まれますが、女はこの紋様を刻まれるんです」

“封印”的紋様かい。はじめてみたねえ」

「はい。女は戦えないよつて、『白』の特性を封じます。それは何十年も前から続いてきたことです」

ゼロの話を聞きながら、俺は首をかしげた。

「なんで封じちまつんだ？ 話によれば『白』は差別されてるんだろ？ それだったら、少しでも戦力を蓄えておいたほうがいいんじゃないのか？」

「いいえ、差別されてるからこそです」

ゼロは顔をうつむかせながら言った。

「差別されているからこそ、女に“術”を施して抵抗できなによつにするんです。……こぞといつ時の供物のために」

「……信じられないな」

「そうかい？ あたしは信じるけどね。言つただろ、『こんな』ことは“当たり前”なんだよ。あんたがどんなに平和なところで育つてきましたか知らないけど、あんたのものをして世界の全てを測るひとつとするんじやないよ」

ティーズは言つた。まるで幼い子供を諭すかのように。

“当たり前”。……本当に、そうなのだろうか。

「“当たり前”ね……じゃあ、あんたはそのこと納得してるのか？」

？」

ティーズは顔をこわばらせて凍りついた。まるで、聞きたくないと  
思つていたよ。『

ゼロもつむいてしまい、きいちない雰囲気が流れた。

「……ちょっと外の空気を吸つてくる」

その顔を見ていられなくて、俺は外に飛び出した。

~~~~~

大通りから一本外れた、さびれた薄暗い路地に俺はいた。
どこの家とも知れない壁に背中を預け、ずるずると座り込む。

体の力を抜いて、はあ、と息を吐いた。

『“当たり前”ね……じゃあ、あんたはそのことに納得してるのが
?』

さつき自分が発した言葉が頭に響く。

考えるよりも先に言葉が出ていた。自分でもなぜそんな事をいつたのか分からない。

さつきのティーズの顔が、網膜にこびりついていた。

（でも、おかしいと、思ったんだ）

差別が当たり前の世界。

それを“当たり前”だという人々。

“上があつて下がある。上のものは敬われ、下のものは虐げられる。それが普通だ”

(……違う、そんなことは、ない)

……平和ボケした日本から来たからかもしない。考えが受け入れられなかつた。

それに、上下が努力で決まるならまだいい。それは受け入れるべき当然の結果なのだから。でも、生まれで決まるなんて。

子は親を選べないのに。

頭が、霞がかかつたかの様にぼんやりとしている。呼吸がどんどん苦しくなる。あえぎながら左胸をわじづかんだ。

ドクン、と体が揺れた。

発作だ。

世界観と“術”と病（後書き）

ゼロの“術”はあとでユウ君に解いてもらひつつあります。けど、なんだかユウ君死にそうです。大丈夫か……！？

この小説は作者の考え方と違う方向にあれよあれよといつまに転がつてしまふので、もしかしたら……。

ヤフ医者と元王宮騎士（前書き）

ん～・・・・・思つてゐよつて話が進まない。
想像と全然違うな・・・・・。

白い、白い、白い。

壁も床も家具もベッドも何もかもが、白い。

ここが、生まれた場所。

そして、母親が死んだ場所。

（子供を生まなかつたら、もつと生きられたかもしけないのに……）

（あんなにキレイで若い人が……）

（気付いた時には、もう墮ろせなくなつてたらしいよ……）

（産まれてこなればよかつたのにね）

望まない子供。母を殺し、父を殺し、その身に呪いを宿して産まれた子供。

(嫌よ！ 誰があんな子供を引き取るもんですか！)

(孤児院にでもやつてしまえ！！ 僕たちは近づかぬ！！)

(気持ち悪い…… 病を持っているなんて………)

(やうだ、どこかへ捨ててしまえばいい)

(ここではない、どこか遠くへ)

(捨ててしまえ…… 消すんだ！)

近くの野山に打ち捨てられた。あの時はまだ冬だっただろ？
か。
産まれて間もない幼子は、産まれてから全ての出来事を記憶して
いた。

冷たい、冷たい、寒い。

吹雪が吹きすがぶ中、幼子はゆづくつと田を見開いて、思つた。

(これで、いいんだ
)

（――）

気が付いた時、俺はベッドの上にいた。

まだぼんやりとする頭。天井を見つめていると、だんだん思考が
はつきりとしていた。

木で作られた部屋で、広さはそんなんにない。白ではない茶色をみ
て、どこか安心している自分がいた。

「目が覚めた？」

いきなり、俺の前に背の高い男が現れた。つてか……！

「……すいません。どこのどなたか知らないんですけど顔が近い。鼻と鼻が触れ合つてます」

「花と花が触れ合つ？ なかなか詩的な表現だね」

「脳みそは元から存在していなかつたようですね」

俺は重い右手を上げて、男の顔をつかんだ。ついでに男のかけている眼鏡も一緒に。

「あれえ？ なんだか君の顔は変だねえ？ セツキまでは田とか鼻とかあつたのに、いまじやあまるでのつべらぼうだよ」

「それはあんたが見ているのが俺の手の平だからだと思いますが」「手の平？ 君は顔に手の平があるのかい？」

「すいませんとりあえず退いてもらつてもいいですか殴るぞ」

無理やり顔を押しのけて男を遠ざける。つこでに体も起こして、男を観察した。

年は若い。25かそのぐらいにしか見えない。インテリつぽい眼鏡に整つた顔立ち、すらりとした細身の体には白衣を羽織つている。眼鏡の奥にあるのは薄いブルーの瞳だが、髪は柔らかな茶色だ。といつことは、といつは“無色人”になるんだろう。

「……つーか、あなたは一体何者だ。そして「」はどこだ

「そして僕は誰？」

「知るかアアアアアー！」

俺は思いつきり枕を放り投げたが、男は軽々とよけた。「」「」「と笑っているのがどこまでもムカつく。
……さっきから思っていたが、」につけばどうも頭のネジがほとんど抜け落ちているらしい。

「つたぐ、なんだって俺は「」

そのとき、俺はハツとした。

そうだ、俺は発作を起こして

。

「君が路地に倒れていたのを、アーリアが拾ってきたんだよ
「」アーリア？」

相変わらず「」と笑っている男が話しかけてきた。

「僕の助手だよ。僕はレイ・ノワール。」で“闇医者”をやって
いるんだ」

“闇医者”？ ヤブ医者の間違いだろう。というかせっかくそれを
言つてくれ。

つーか、自分で“闇医者”って言い切りやがった。いいのか、それ
れ？

「……いいんです。ノワールが普通の医者なんてできるわけが
ありませんから
「」のわああーーー？」

突然、後ろから声が聞こえたかと思つと、背後に知らない女が立つていた。

腰まである色素の薄い水色の髪に、同じ色をした、感情の少ない瞳。白すぎて逆に不健康に見える細長い手足。……そして暗いオーラ。なんだか亡靈みたいだ。

「やあ、アーリア。こちらがさつき君が拾つてきたコウ・クロキ君。クロキ君、こっちが僕の助手のアーリアだよ」

「…………よろしく」

「よ、よろしく。つじやなくてあんた何で俺の名前…？」

「だつて僕は“闇医者”だよ？名前、ぐうじ知つてなきやね」

意味分からん。

「ま、実際はあの子に聞いたんだけどね。アーリア、もう入つていよいよって言つてきて」

「え、あの子つて一体誰」「コウ様ああああ…！」ぐぼぼぼ…？」

ヤブ医者に問いただそとしたら、いきなり腹部に強い衝撃が走つた。

「ああもうコウ様つたらいきなり飛び出していくかと思つたら行き倒れてたとか一体何をしてたんですか！ 私本当に心配したんですからね…！」

「ちょ……ゼロ、離れ……！」

ゼロの頭が見事にみぞおちにクリーンヒットしている。しかもわめきながらぐりぐりと押し付けてくるものだから意識が危うくなつてくる。

そんな俺を救つたのは、服屋のおかみさんだつた。

「ゼロ、いい加減に離れないとコウの口から魂が出るよ」

「へえ、クロキ君つて口から魂出せるんだ〜すごいねえ」

「ティーズさんは俺からゼロをベリッと引き剥がした。荒い息を整えるついでにヤブ医者に裏拳をかまそつとしたが余裕でかわされた。

……チッ。

「やあティーズ、久しぶりだねえ。相変わらず君はキンキラキンだねえ」

「どう答えればいいのかまったく分からないうけど、久しぶりだね、レイ。ちょっと話があるから、顔貸しておくれよ」

「顔？」『めんよティーズ。僕も長いこと医者をやつてているけど、いまだに頭と顔を分離させられたことはないんだ。試してみたことはあるんだけどね』

「違うわバカ野郎が。あいかわらず抜けてるんだねえ。ちょっとそこまでついて来ておくれつて言つてるんだよ」

ティーズはヤブ医者と知り合いだつたのか？

てか、ヤブ医者は本当に頭と顔を分離させようとしたことがあるのだろうか。

俺はヤブ医者の頭と顔が別々のところで動き回つてゐるのを想像して酷く気分が悪くなつた。かなりシユールな絵になつてしまつた。ティーズさんはそのままヤブ医者を連れて部屋を出て行つた。

~~~~~

「つたぐ、こんなところであんたを見つけるなんてね、レイ。“闇医者”になんかなつて」

「そういうティーズこそ、今はのんびり服屋を経営しているらしいねえ。それを聞いたときは本当に驚いたよ。元王宮騎士、しかも一番隊の隊長が服屋だなんて」

「……昔の話や」

ティーズはレイを見つめた。レイはうれしそうに笑う。

「それでも、たった数年前じゃないか。よく君がここまで丸くなつたものだよ」

「……そんなことはどうでもいいんだよ。それより、あんた、あいつの“呪い”を見たんだろう?..」

ティーズは無理やり話を打ち切ると、レイに聞いた。レイは珍しく真剣な顔になつてから、答えた。

「……うん、見たよ。アレは相当強いね。僕でも癒せないよ。ぜひ、研究材料にくわえたいなあ」

「……あんたの材料になんてされたら、あいつはひとかけらも残らないだろうね」

レイ・ノワール。数年前にティーズ率いる王宮騎士一番隊に属していた男。

別名、“黒悪魔”。

退治した魔物の死体を持ち帰つては、自分の持つ地下研究所で弄くりまわすのが趣味。敵国の捕虜は、彼の研究所に連れ込まれ、全てを吐いてから死に逝く。その間、地上にすら響き渡るような恐怖の絶叫は絶え間なく続き、歴戦の戦士でさえその前では無力だ。死神よりも怖いと称されてこの名が付いた。

見た目の穢やかさは本当に見た目だけ。

中身は、ちょっとあたまのネジが足りない、究極のサディストだ。

ティーズは、レイに問いかけた。

「 治るかい?」

「 .....君にしては珍しいね。会つてまだ口の浅い子供を気にかけるなんて」

「 .....いいから早く答えな」

「ふふ、しようがないなあ.....」

ティーズの真剣な顔に、レイはやれやれと首を振つた後、口を開いた。

「 “呪い”を消すことは出来ないよ。たとえこの僕でもね」

「 .....そう、か」

「 .....でも、治すことならできるよ

「つー? なんだつて!?

一度落胆したティーズは、レイの言葉に目を輝かせた。

「 その治療法は!?

「 君、本当にクロキ君を氣に入つていいんだね。.....簡単なことだよ

よ

レイは、無表情にティーズに近づくと、その耳元に囁いた。

ティーズは、それを聞いて愕然とした。

レイはその様子をチラリと見やると、ゆっくりとティーズに背を向け、病室へと戻つていった。

ティーズは、ふらふらする頭を押さえて考えた。……レイは、そんなことにまで手を出していたのか。“黒魔”とまで称されるあいつなら、別段おかしくもないけども。確かにこれなら確実だ。しかしコウがそれを聞いて納得するのだろうか。

『俺にはなんの関係もないのさ』

あの時のコウの言葉が頭をめぐる。さつき囁かれたレイの言葉も。

『クロキ君と同じくらいの年の子供を捕まえて、一人の心臓を入れ替えればいい』

ヤハ医者とい元王駕騎士（後書き）

・・・・・なんか話が飛びすぎててる感が。  
もひつもひつと内容を詰めたほつがいいのだからつか・・・?

「で、なんでユウ様は倒れたんですか？ 怪我もしていないとこいつの  
に……」

「……ゼロ。ちゃんと説明してやるから、触るな」

ベッドの上にいる俺の体をべたべたと触つまくる白い子供。  
この年でセクハラか？

「おい、いい加減にしねえと『パンツあるだ』  
「で『ピン？ なんですかそれ』  
「身をもって味わえ。ていつ  
「いたつ！？」

地味に力を込めてテロップンをかますと、ゼロは慌てて後ろに下が  
つた。額をさすっている様子を見てちょっと笑つてると、ゼロを  
かばうようにしてやけに青白い女性が前に出つた。

「…………女子に暴力を振るうなんて。クロキ君、ちゃんと切りま  
すよ？」

「……アーリアさん、あなたの理論でいくと、男子には暴力を振  
るつてもいい事になるんですけど。つーかちゃんと切るつて何を？ 首  
ですか？」

「…………男子はいいんです。総じて気持ち悪いから  
「まるで男が害虫みたいな言い方！」

男女差別ですか。男子にだつて気持ち悪い奴はいるわ！ そ  
れに俺は気持ち悪い！！  
そう叫ぼうとしたけど、やめた。

……アーリアさんがなぜかメスを構えているから。てか怖ッ！  
無表情なのがめちゃくちゃ怖い。

生命の危機を逃れるために、ゼロの質問に答える。

「俺が倒れたのは、発作のせい。俺は病氣にかかってんの。つーか呪い？」

でも、治療法も（たぶん）あるし、（おそらく）今死ぬわけじゃないから大丈夫。

……かつこのなかがめっちゃ不安だけビ。

そう説明しようとした時、ゼロが俺にタックルをかましてきた。

「ぐぼああーー？」

「病氣！？ 病氣なんですかユウ様！！ もしかしなくても不治の病で余命はあと一週間ですか！？ そうですかそうなんですか分かりました！ 私、今すぐ教会に行って神を呼び出す儀式を

「ちょっとまってい

ひとしきりわめいた後に急に外へ飛び出そうとするゼロを、肩に手をかけて止めた。

そしてすぐに手を引っ込めた。

次の瞬間、俺の手があつた場所を鋭いメスが何本も通り過ぎた。

俺は冷や汗を流しながらアーリアを見る。

「…………いい度胸ですね、クロキ君。いつたそばから女の子に暴力を振るうだなんて」

「肩に触つただけですけど！？ ビコからビコ見たら暴力を振るつ

たよつに見えるんですか！？

「…………触るだけでも許せません。ヘンタイ」

「誰がヘンタイだコノヤロー！」

ダメだ。この人もあのヤブ医者と同じ思考回路の持ち主だ。

「…………女の子はいいけど、男の子はダメです」

「男女差別か！ 本当に男は害虫だと思つてゐみたいですね！？」

「…………だつて、そつです」

「認めやがつた！？」

とりあえずアーリアさんにメスをしまつてもうつてから、ゼロにさつきの事の説明をした。

ゼロはしじばりじつと聞いていた後、俺の皿をまっすぐ見つめて聞いた。

「…………死にませんよね？」

小さな不安。それをあらわすかのよつな体の震えに苦笑しながら、俺ははつきりと言つた。

「ああ。死なないよ。約束してやる」

笑つてそうこうと、ゼロは安心したよつに顔を緩ませた。

「あら、もう元気そうだね～」

その時、どこからともなくヤブ医者が現れた。ティーズはどこへ行ったのか。

「アーリア、奥の部屋から薬を取つてくれないかい？ 鎮痛剤と頭痛薬と毒薬が欲しいんだけど」

「おい、ヤブ医者。鎮痛剤と頭痛薬と毒薬を一体何に使うつもりだ？」

しかし、その疑問は解決することなく消えた。

「…………氣安く触れないで下さいノワール。きれいなお花畠を見ることになりますよ」

「お花畠かい？ いいねえ、今度一緒に花を摘みに行こうか」

「…………片道切符であなただけ送つて差し上げますよ」

そういうとアーリアは田にも留まらぬ速さでメスを投げた。が、ヤブ医者は余裕で避ける。

…………アーリアさん怖え。ちょー怖え。

そんな事を思つていると、突然、ズボンのポケットの中で何かが震えた。

(……ん？ なんだ？)

いまだに言い争つてゐる(?)二人と、それに見とれているゼロにばれないように、そつとポケットに手を突つ込んだ。

そして引っ張り出たのは、あのエセ神からもらつた例の紙だつた。

丸めてポケットに突っ込んだのを、今の今まで忘れていた。

慌ててぐしゃぐしゃになつた紙を広げると、紙面には“着信中”的文字が。

……ケータイですか？

とりあえず、ばれないように部屋を抜け出して、廊下でその紙をつついてみた。

『ハロー、ユウ。久しぶりだね』  
「でたなエセ神……」

ブウン、と音を立てて半透明の生首が姿を現した。相変わらず中途半端な姿だ。

「何が久しぶりだ、まだ一日しかたつてねえよ」  
『そうだった？ やっぱり人と神との時間の感じ方は違うんだよ、うん』  
「テキトーだな」  
『いいんだよ。それよりも……』

神がくわつ……とこつちに身を乗り出してきた。  
首だけで。

……微妙な迫力だな。

『君、王族に会えつていったのに何も努力をしてないでしょ……』  
「いや、まだこつち来て一日目」

『だ・か・ら！　私があるイベントを用意してあげました！』  
「話を聞け」

エセ神はちよつと下を向いて『そしした後、えいっ！　といつちに何か紙のよつなものを突き出してきた。

「なんだこれ……『勇者決定戦』？』  
『そーです！』

エセ神はニッコリ笑つて言つた。

『一週間後にこれがあるから、出場して王族と接触するんだ！』  
『いいけど……俺弱いし、痛いの嫌だし』

だいたい、こつちに引っ張つてきたときに『身体能力最強・魔力最大』とか言つてたくせに。

まあ、確かに身体能力は上がつていたけど、そんな大会に出て勝てるほどのものではないと思つ。

『そー言つと思つた。はいこれ！』

エセ神が笑顔で差し出してきたのは、なんだか分厚い本だつた。

「なんだよこれ」

『魔術書だよ。君専用の。ちゃんと日本語で創つたんだからね』

なぜか偉そうにするエセ神を見て殺意が沸いた。

『これを見れば、たいていの事は分かるはずだし、後はあの二人に聞いてね』

「あの二人？」

『レイ君とティーズ君だよ。あの二人は、君が思つてる以上に強いから』

『ふーん。てか、絶対それに出なきゃいけねえの？　俺に拒否権はないよ』

即答かよ！（？）

俺ははあ、とため息をついた。

君にしては思しきりかしけね

「ハセガワのないしな」  
「標はないよ」もあつたほんかし

そういうと、エセ神は満足そうに目を細めた。

卷之三

「は？ 優勝？」

あ、そうそう、とエセ神は消える前にいついた。

『優勝しなかつたら金賃全部没収するからね』

「……………」

静かな廊下に、俺の叫びが響き渡つた。

といつあえずいつたん病室に戻る。

すると、ティーズが戻ってきていた。

「あ、ティーズさん。どこでひつてたんだ？」

「いや……ひつとな

「……？」

歯切れの悪い方に少し首を傾げたが、俺はとりあえず“勇者”の事を説明することにした。

……しかしながら。

(どうやつて説明すればここのものやつ……)

1、正直に話す。

『さつき力!!ナマヒ念ひで、これに由りて言わされました。優勝したこと金賞を没収されるらしくです』

……絶対信じないな。

2、黙つている。

(…………いやあびひさひて協力してもひだよーーー)

3、逃げる。

何で逃げる? ハンドがあるんだーーー

……一体、どうしようと？

と、その時、家の外から大きな声が聞こえてきた。

「大変だ、大変だー！ 一週間後に、王様が“勇者決定戦”を開催するらしいぞ！ 優勝したやつには金貨一千枚と、“魔王を倒す権利”が与えられるそうだ！」

たぶん、部屋の中にはいるみんなにも聞こえただろう。それぐらいの大聲だったが、問題はその内容だ。

王様が“勇者決定戦”を開催つてのはまだ分かる。どうせあのヒセ神が『神のお告げじゃぞよ～』とかなんとか言つたのだろう。

しかし、“魔王を倒す権利”つていうのは一体なんだ？ そんな権利が存在すんのか？

てゆーか、誰も欲しがらないと思うんだが。金貨一千枚のほうがよっぽど魅力的だらうに。

が。

「“魔王を倒す権利”だつて！？ 本当だらうなそれは！」

「こうしちゃいられない、今すぐ準備をしないと！」

「一体何年ぶりの“勇者決定戦”だ！？ ワクワクするぜーーー！」

……なんか、みんなが沸き立ちました。  
すごいねこれ。そんなに魔王を倒したいの？

でも、部屋の中はいたつて冷静。

「ふん、 “勇者決定戦” だつて？ そんなことするなんて、バカだねえあのクソジジイも。自分の軍に自信がないって言つてるようなもんじやないかい」

ティーズが鼻で笑つたクソジジイさんは、たぶんこの国の最高権力者のことだと思う。

……不敬罪でしょつ引かれないのかね？

「 “勇者決定戦” かあ。なつかしいなあ。僕が子供の頃が一番最近だつたつけ？」

「…………ノワール。そうなるとあなたは三年で子供から大人に成長したことになります」

「あれ、三年前だつた？ いやあ、このじろり物忘れが激しくてね」

「…………あなたはこの三年で子供から老人にまで成長したらしい」

相変わらず頭に花を咲かせているヤブ医者を、絶対零度のまなざしで突き刺すアーリアさん。

……相変わらず怖い。思わず身震いした。

ゼロはそれを見て、やつぱり目を輝かせていた。

……大丈夫かね、うちの娘っ子は。何でアレを見て目がキラキラするのかさつぱり分からん。

ともかくにも、これで立派な口実が出来た。

「なあ、ティーズさん。 “勇者決定戦” つて一体何なんだ？」

よし、これで自然に話題を振れたぞ。

「……やつこや、あんたは何も知らない田舎者だったね」

「……ティーズさん、お願いですかからその哀れむような視線はやめて。  
泣きたくなる。」

「“勇者決定戦”っていうのは、その名前の通り勇者を決める大会  
さ。ここ、王都では何年が””とに行なわれているんだよ。上位入賞  
者には王宮騎士の資格、優勝者には“魔王を倒す権利”が与えられ  
る」

「王宮騎士ってのは、城で働く兵士のことか？」

「それよりももっと位が高い。騎士とつくだけあって、無駄に権力  
がついてまわってくる。普通の兵士よりも立場が上だから、ほとん  
どのやつを頸で使える、いつてしまえばエリートだね」

「へえ、やけに詳しいな」

俺がそういうと、ティーズはぎくっとしたように体を揺りした。

「……知り合いで、そういう職業についている奴がいるだけさ」  
「……田が泳いでいますよティーズさん。  
ま、問い合わせるのは今じゃなくともいい。」

「じゃあ、“魔王を倒す権利”って言つのは一体なんだ？」

「そのまんまさ。國中の猛者をかき集めて作った魔王討伐隊の中で  
唯一、“魔王に止めを刺すことを許されている人間”だよ」

「はあ？ なんでそんな権利があるんだよ。さつとこいつて、倒し  
て来たらいいじゃないか」

「古の誓約でね。簡単に言つと、魔王を人間達が刈りすぐると、世  
界がおかしくなっちゃうのや」

……どういふことだ？

「単純なことだよ。あたしたち人間は、魔王を倒したものたちを褒め称える。災厄を祓つてくれてありがとうってね。だから、自分も褒め称えられたい、つて思う馬鹿どもが昔はあふれかえったんだ。血氣盛んな者達が、我先にと魔王に攻撃を仕掛けまくったのさ」「でも、魔王つて言うくらいなんだから強いんだろ？」

「もちろん魔王は強いけど、人間も弱くはないし、なにより数が多い。持久戦に持ち込まれて、魔王たちはだんだんと勢いをなくし始めた。それでも人間はやめる気配を見せず、攻撃を続けた。もはや、虐殺といつてもいいほどにね」

きっと、その人間達は“正義”的ため、“平和”的に戦つたつもりなんだろうけど、そうなつてしまえばもう意味はない。魔王が人間を虐殺するのと大して変わらない行為になってしまった。

(……馬鹿だな)

流されまいとあらがつても、もう遅い。

「人間達は狩りつけた。そしてついに、魔王が最後の一匹になつたとき、世界が狂つた」

太陽が昇らない。星も月もない、完全なる暗黒の世界。黒以外の

色が存在しない。いや、色さえも無くなってしまったのかも知れない。人々は恐怖した。

一ヶ月後、太陽が昇った。月も星も昇った。しづまなかつた。世界は眩いばかりの白に覆われ、影も闇も消えうせた。人々は神に許しを求めた。

一ヶ月後、空が消えた。海が消えた。大地が消えた。ただひとつ、どこかで輝く太陽に焼かれながら、人間は限りのない“虚無”に放り出され、どこまでも墮ち続けた。人々は泣き叫んだ。

三ヶ月後、元の数の千分の一にも満たない人間達が残つた。世界は元に戻つたが、神は人間を許すことはなかつた。

食べ物がない。水もない。他の生き物がない。動物も植物もない。土や岩を食べて暮らした。

大地は人間を拒み続けた。住むところがない。生きる場所がない。死に場さえも、ない。

世界が狂つて一年後、神はほんの一握りの人間だけを許した。彼らは新しい土地で生活し始め、仲間を増やし、村を作り、街を作り、国を作つた。

それが、この国。

「その時、残された人間達は神と誓約を交わした。『魔王を殺さないこと』を。また、神はひとつ条件を付け加えた。『神からのお告げがあったときは、一人だけに、魔王を殺す権利を与える』と

それが“勇者”と、 “勇者決定戦” の始まり。

「まあ、結局はその誓約もほとんど知られていないんだけどね。ただそのかわりに、魔王は馬鹿みたいに強くて、小指を振るだけで世界を握りつぶせるって言つ言い伝えがあるけどね」

「……へーえ」

あつとこう間に話に引き込まれてしまつた。ふと横を見ると、ゼロも同じような顔をしている。

「で、出るのかい？」

「え？」

「とぼけんじやないよ。あんた、さつきから出たそうな顔してゐる」

思わず顔を触つてしまつた。そんなに顔に出ていただろうか。

「……かなわないな。まあ実際、出てみたい気持ちはあるよ」

それに、金貨没収なんて冗談じやない。

……あのヒセ神、今度会つたらアッパー決定だな。

「わ、私も出てみたいですね！」

ゼロも行きよこすべく名乗りを上げた。

「んじゅ、明日から訓練するといよつか」

「へえ、君たち出場するの？いいなあ、僕も出よつかなあ。そこなら、いい研究材料が手に入りそうだしね」

「…………あなたが出たら一匹血の海になります」

一人のやり取りを聞きながら、俺は決意を固めた。

「…………よし！んじゅ、やるか！」

「はい！」

……話が進まないねえ（ハア  
……がんばります。

## とりあえず準備

「……うーん。どれにしようか」

今、俺は武器屋にいる。ゼロとティーズ、あとアーリアが一緒だ。ヤブ医者はなんかやりたい実験があるとかで診療所に残つた。

……なんの実験か激しく聞いてみたい。きっとグロテスクだな。

「あんまり重いのはやめときなよ。体の出来てないあんたみたいなガキには、到底扱えないよ」

「親切なアドバイス Bieber」

俺は今、ゼロと一緒に武器を見ている。“魔者決定戦”に出るために、とりあえず武器を調達しようとすることになったからだ。ゼロは基本体で戦うファイターだから武器は使わない。だが、短剣やナイフなどの刃物も持つていたほうがいいと、アーリアが助言したため、俺達と同行している。

「しつかし、やけに種類が多いな～」

俺はずらつと並べられた武器を見てため息をついた。

光を眩いばかりに反射する鋭利な刃物。

槍や棍棒に斧、それに弓などの飛び道具。

あとは、杖や水晶の埋め込まれた魔法具だ。

(Hセ神によると、俺の魔力は強いらしいから……やっぱ魔法具か

(?)

でも、どれを手にとつてもこつくり来ない。中には水晶玉なんかもあつたが、これを使つてどうやって戦えとこつのか。

(…………敵に投げつけるとか？　いやいや、そんなの意味なくね？)

確かに重くて硬い鈍器だが。

「どれにしましようか。コウ様、どれがいいと思つます？」

「ん？　見せてみろ」

ゼロに声をかけられ、俺はゼロの手元を覗き込んだ。  
そこにあるのは、五本ほどの中剣。

それぞれの柄には違う色の水晶が埋め込まれてあって、見た目としてはとてもキレイだ。

「どれかを選ぼうと思つんですけど……」

「別に選ぶ必要なんてないだろ。全部買つちまえばいい」

「え！？　ダメですそんなこと！　コウ様のお金を私なんかが使うなんて！」

「いいつつてんだろ？　俺が許すんだから」

ゼロの頭をぽんぽんとたたいて、ゼロも本当に全部欲しかったようで、にへへと表情を緩めて笑つた。

……ほんと、癒されるわあ～。

と、次の瞬間背後に殺氣を感じてすぐさまゼロから離れた。

「…………またか弱い女の子に暴力を……！ 許せません」

「待て待て待て！ だから俺はなんにもしてないだろー！？」

「…………喚くな叫ぶな喋るなちゃんと切りますよ。汚らわしい」

「ひどい… それは酷いと思しますアーリアさん…」

俺がアーリアさんの不平等さを訴えていると、突然横からボカッ  
と殴られた。

「ついて！？」

「あなたはいつまでおしゃべりしてんのだい。せつせと選びな

「なんで殴るんだよ…………」

ぶつぶつと文句を言いつゝ、また横から鉄拳が飛んできたので間一  
髪で回避した。

「これ以上殴られたくはないので武器に思考を戻す。

とりあえず水晶玉は候補から除外して、斧なども重すぎるため却  
下。

そうなると、軽めのナイフや剣がいいのだが

。

(……刃物、だもんな)

人の命を奪う道具。

「」の世界と前の世界は何もかもが違う。生きているものも、生活

も、全て。

この世界で生きていくために一番手っ取り早いのは、前の世界での考え方を捨て、じつに順応することだ。そうしないと、前の世界に縛られ囚われて、きっと身動きできなくなる時が来る。

( でも、俺はそれでもいい )

囚われてしまつても構わない。

( 俺は、自分のしたいようにしてやる )

刃物から田をそりして魔法具のほうを見る。すると、怪しげな杖や水晶玉などの間に、なにやらおかしなものが見えた。

「…………日本刀？」

黒い鞘に入った、昔ながらの刀。手に取つてみると意外と軽く、柄を握るとなぜか手になじんだ。

( つか、刃物はやめよつて思つたばっかなのに )

それでも、なぜか魅せられる。

スウッと鞘から抜くと、シャラーンという軽い音を立てて刀身が姿を現した。

「…………あれ？」

すると、少々おかしな点を発見した。

なぜか刀身がかなり白い。

白といつてもペンキを塗りたくつたようなものではなく、物質そのものが放つ透き通るような白さ。

そして、柄の少し下にある真っ赤な結晶が映えてとても綺麗だった。

（なにでできる？ 鉄じゃあなさそりだし……新種の金属か？）

「コンコンヒノックをするような形で刀身を叩くと、結構硬く丈夫そうだった。

と、手が滑つて思わず刃の部分を触つてしまつた。

「やべつ……！？」

が、切れなかつた。

まじまじと自分の手を凝視して、今度は自分から恐る恐る触つてみる。ゆっくりと刃に指を滑らせて、痛みを感じることはないかつた。

「…………切れない？」

「何一人で百面相してるんだい」

「つづおわー？」

突然ティーズが横から顔を出してきた。

「一か突然出でくるなよー。心臓に悪い。マジで。

「いや、これは」

「…………見たことのない武器」

「ひぎやあああーー?」

死角からぬつとアーリアが出てきた。  
アーリアさん青白すざめるんだよー。幽靈に見えるつてか幽靈にしてか見えないからヤメ口ー。

「…………これは俺の故郷の武器だよ。ここにはないのか?」

「少なくとも、こんな武器は今まで見たことないね」

「…………刀身は水晶でできています。魔法具でしょうか」

「魔法具?」

日本刀が魔法具。……納得できねー。つかイメージできなー。  
けど、それなら切れない」とついての説明は出来る。

(これなら、敵の攻撃も受け止められねつだし、魔法も使える。……よし)

……

「んじや、俺これにするよ。おっさん、これいくらだ?」

「へい、そいつなら銀貨一枚で結構でさあ」

「…………やけに安くね?」

俺は武器屋のおっさんが言つたこと元首をかしげた。

銅貨一枚でだいたい千円、銀貨一枚で大体一万円ぐらゐの価値がある。それだけを言つとそんなに安くないが、セツキのゼロの短剣

は5本で銀貨三十枚だった。

……一本六万円？ 包丁でも持つて来ればよかつたかな。

「そいつは結構な材料を使つてる一級品ですが、なにぶん買い手がつかなくて。かれこれ十七年はここにありますかねえ」

「へえ。ま、いいや。安いに越したことはないし」

俺は銀貨一枚を取り出しておつせんに渡すと、なぞの日本刀を手にみんなと一緒に武器屋を後にした。

日本刀が武器屋にあつた時間と俺の年が同じ事は偶然なのか、と思いながら。

## ひとつあるべき準備（後書き）

いつもやく投稿です。すみません。  
キャラの案があつたらいじらしてね。

## “呪”と“解”

武器を調達したところで早速訓練をはじめた。

街の外にある大きな空き地にやってきた俺達は、ティーズさんと俺、アーリアさんとゼロのペアで向かって合つた。

「とりあえず、あんたら一人の力を見させてもらひつよ」

ちなみに、いつの間にかやってきたヤブ医者は横で楽しそうにこちらを眺めている。

……なんか腹立つ。

「まずは組み手からやつてみよつか」

「お願ひしますー。」

「…………」

ゼロとアーリアさんが組み手をはじめた。それを横目で、ティーズさんに声をかける。

「んじゃ、ひとつもやつますか」

向かい合つて、構える。

先に攻撃してきたのはティーズさんだった。

一瞬で俺の懷に入つて蹴りを繰り出す。俺はあのエセ神に授けられた身体能力を最大限に發揮してよける。

「へえ、なかなかやるじゃないか」

「それはどうも」

ティーズさんは話しながらも攻撃の手を緩めず、なかなか隙が出来なかつた。

（ただの服屋のおかみさんじゃあないとは思つてたけど……）  
（……）

内心焦りで冷や汗を流しながら、必死に攻撃をよけた。

（からか反撃しようにも手も足も出ない状態だ。  
隣で戦つてゐるはずのゼロのことも気になつたが、今は余所見が  
出来るような状態ではなかつた。

回し蹴りをギリギリまで体をかがめてよけ、バネのよつと跳ね上  
がる。

すぐさま放たれた鉄拳が耳のすぐ横を通りヒヤッとした。

そして、十五分ほどの組み手を終えた俺は、終了の合図が出ると  
共に地面に突つ伏した。

「ぜえ、ぜえ、し、ぬ……」

「情けないやつだねえ。いんないじでくたばつまうなんじ」

ティーズさんに見下ろされてるのは屈辱だが、今は体力を使いす  
ぎて息も絶え絶えの状態だ。

突然えられた身体能力は使い勝手が分からなくて、無駄な動き  
が多すぎた。そのせいで今はもう指一本動かすことも出来ないよう

なありますま。

復活したあとに復讐することを心に誓い、「ひとつと仰向けになつた。

「大丈夫ですか、ユウ様？」

「…………」

頭上に、邪魔にならないよう髪紐で髪をくくつたゼロが見えた。のぞきこんでくるゼロに、疲労の色は見られない。なぜなら、アーリアさんが手加減していたから。

女の子に攻撃するなんて出来ないと、それこそ赤子でも止められるのではないかと思うほど攻撃の遅さに、ティーズから田を離してチラ見した時は愕然とした。しかもよそ見したせいでティーズさんから鉄拳を食らつた。ちくしょう。

俺を心配そうに見ているゼロとは裏腹に、どこかすつきりしたような顔のアーリアさん。

さつき俺の横に来た時、口元を吊り上げて「…………まあみる」と小声でつぶやいたのは幻聴だと思いたい。

「いやー、なかなかいい戦いだったねえ」

パチパチと、やる気のない拍手を送つてくるヤブ医者。

「でも、どうしてもゼロ君の動きがねえ」

それは、俺も思つていたことだつた。

ゼロは“白”とはいえ、その性質を術で抑えられているため、実質ただの子供だ。人生経験は普通の子供よりも豊富かもしねりが。

「……やつぱ、封印解くしかないか」

「そうだね。レイ、あんた解けるかい？」

「見てみないことにはどうにも。ゼロ君、封印見せてもらえる」

「あ、はい」

するするゼロが服の袖を巻くりあげ、両肩をあらわにする。ヤブ医者はかがみこむようにしてそれをみてくる。ちなみに、アーリアさんはその様子を噛み付くような皿つきで見てくる。

……てか、瞳孔が開いてます。めっちゃ怖いです、アーリアさん。

「……ん？ これ、“魔語”（スペル）じゃないみたいだねえ」

「“魔語”（スペル）？ なんだそれ」

「そのまんまの意味さ。魔法を使うための言葉で、私達の言葉だよ。私達が日常的に使っている言葉に魔力を込めて使うのさ」

「ふーん」

「でも、その“魔語”じゃあないってことな」

「……古代語の可能性が高い」

アーリアさんがボソッとつぶやいた。つーか古代語？

「そうみたいだねえ。うわー、初めて見た。是非ゼロ君には研究材料になつて欲しいなあ」

「待て待て。なにゼロをモルモットにしようとしてんの……」

「……ノワール。ちゃん切られなくなれば諦めて」

「ええー、いいじゃないか」

その後もヤブ医者がなんかぶつぶつ言っていたが、アーリアさんが黙らせた。

「なあ、ティーズさん。古代語って？」

「ああ、この地域にはるか昔に存在した言葉さ。一番魔法を使いやすい言語だといわれているけど、いまじやあもつほとんど残っていないのや」

「いまだに古代語に魅入っているヤブ医者とアーリアさんを放つておいで、話を進める。

「でも、もうほとんど残つてないって事は……」

「……ああ。レイ、あんたはこれを解けるのかい？」

問い合わせられたヤブ医者は、うーんとうなつた。

「そうだねえ。研究せてもらえるのなら出来るかもしねないけど、今はなんとも」

「そつか……なあ、俺も見せてくれよ」

ゼロのゼロにようつてこくと、だんだんその文字がよく見え……見え、て……。

「…………はあ？」

ゼロの両肩に刻まれていたのは、なにやら文様に囲まれた文字。

俺がよく知っている、漢字の“呪”と“解”だった。

## 封印解除ー（前書き）

この年の夏、一ヶ月で一万突破ー。二二一クは、十五歳と、うれしい限りです！

どうもありがとうございますー。またー。

今回がひとつ最後ですが、お楽しみくださいませ。

## 封印解除！

とじあえず、一息つくためにじつたん町に戻った。

ちょうどいい具合に腹もすいてきたので、ティーズさんオススメの店で昼食を取ることになった。なかなかじじやれたい雰囲気の店で、それなりに盛況なようだ。

五人で席に着き、料理を注文した後、俺はみんなにゼロの封印の事を説明した。

ゼロの封印に使われていた言葉が、俺の故郷の言葉にそっくりだつたこと。

ふたつの文字に込められた意味の説明もしておいた。

なんで古代語がまだ残ってるんだとか、アーリアさんとティーズさんに首を傾げられたが、海の向こうの島国だからとかなんとか言って誤魔化した。

「うん、そうなると、封印を解くのが簡単になってきたかもしけないね」

スープをすすりながらヤブ医者が言つ。

「お前さん、なにか故郷の魔道書は持っていないのかい？」  
「ん~……魔道書って言われてもなあ

おそらく、魔道書とは魔法の教科書みたいなものなんだろうが、現代日本に居た俺がそんなものを持っているはずが……ん？

待てよ。

俺はベルトにぶら下げる袋の一いつを開けると、そこから分厚い本を取り出した。

これは、ヤブ医者の家で、ヒセ神から勇者決定戦の事を聞いたときにもらった本だが……。

俺はその本をぱらぱらとめくつてみた。

と。

「…………す、」「

「見事に全部古代語だねえ」

アーリアさんとヤブ医者が、横から覗き込んで感嘆をあげる。ティーズさんも珍しそうに目を見開いていた。

「う、う……？ 何にも分からないです」

ちょうど俺の向かい側に居るゼロは、精一杯じつに身を乗り出し、日本語の羅列に目をパチパチさせてくる。

そして、俺はといつ。

そのページの題名を見て絶句していた。

どんぴしゃかよ！？

あの神どんだけ適當なの！？ 絶対「たぶん」いつなるだらーなー  
的なカンジの考え方だろコソ！

どんぴしゃだけどなー！！ 田発田中の可能性で当たりまくつたけ  
どなー！

内心でそんな事を叫んでいると、ふとある気が気になつた。

「……ゼロ。今お前何歳だ？」  
「はー？ ……えーとですね、もうすぐ12歳になります」  
「つまり今は11才か？」  
「はい、そうなりますね」

ゼロに確認を取り、本に田を戻すと。

いつの間にかページが書き換えられていた。

本シシッ当に適当だなあの神！……年ぐらじ把握しつけよ！ 行き当たりばつたりすぎるわ！

てか、年齢で解き方変わるの！？

心の中でひたすら叫びながら、重い口を開いた。

「……あつた、解き方」  
「え？ あつたんですねか！？」  
「本当かい？ いいことだけど、ちよと残念だつたなあ」  
「……解剖は許しません」  
「へえ、なんて書いてあるんだい？ 言つてみておくれよ」

ちょっとやるせない気持ちを抱えながらも、ページに再び目を落とした。

「えーっと、 “黒い魔”を“呪”に、“白い魔”を“解”に押し付ける  
「ふむふむ。それで？」

ヤブ医者にうながされて、続きを見る。

「…………以上、だ」

終わりかよっ！？ しかも意味分かんねーーー！

またまた心の中で叫びまくる俺を放つて、大人組3人は議論を続けていた。

「“黒い魔”と“白い魔”、かあ」

「…………おそらく、闇属性と光属性の魔力の事」

「光はあたしが持っているからいいとして、闇は、やっぱりあいつしか居ないねえ」

ヤブ医者が二つを見たので、とりあえず聞いてみた。

「で、どうすればいいのか具体的に分かつたのか？」

「うん。多分ねー、魔力の塊を古代語に押し付けるだけでいいと思うんだけど、闇属性の魔力を持った人が僕らの中に居ないんだよー」  
「え、どうすんだよ」

……なんか、嫌な予感。

ヤブ医者が一ヶコリと笑つた。

「と、いつわけで、クロキ君はアーリアの教育の元、がんばって魔力を出せるようになつてねー」

「…………死ぬ氣でやらないと、ちゅん切りますよ」

「死刑宣告…？」

地獄が見えた。

~~~~~

もうそこからは怖かつた。つーか恐ろしかつた。

だつてアーリアさんメス投げてくるんだよ…？ ビーにしのばせておいたのつていうぐらい大量に…！ いくつか首にかすつて死ぬかと思つたからね俺…！

まあ、そんな地獄の特訓のかいあって、一時間足らずで手の平から魔力の塊を出せるようになった。

コツは、深呼吸しながら、出来るだけリアルにイメージすること。アーリアさんから襲い掛かるブレッシャーと、生命の危機に耐えながらでも出来るようになつたところで、ティーズさんからOKがでた。

ちなみに、俺の魔力は真っ黒だ。

それこそ黒以外何も見えないような色に、ひどく感動した。が、ティーズさんの出したそれこそ神々しいまでの白い魔力にちょっとへこんだ。

で、俺たちは店を出てヤブ医者の店に戻った。その時に店長が泣き人が涙を流して喜んでいたのがなんともいえない。

だつてアーリアさん店の中なのに手加減しないんだよ！？ 店員さんの鼻先をかすめていったときは本当に心の底から謝りたくなった。

でも文句なんていえるはずがない。アーリアさん最恐だもの。みんなビビッて何も言えなかつた。

んで、ヤブ医者の家。ゼロを椅子に座らせて、俺がゼロの右側に、ティーズさんが左側に立つた。

「用意はいいかい？」

「ああ、多分大丈夫だよ」

ティーズさんと田をあわせて、最後の確認をする。

「よし、いくよー！」

掛け声と共に、手の平に魔力を集める。そして、それをえいやつと“呪”の文字に押し付けた。

ゆらゆらと揺れていた俺の魔力は、ゼロの皮膚の中に徐々に染み込んでいき、それと同時に文字が薄れていった。

手の平が肩に付いたところでパツと手を離すと、文字が完全に消えてなくなつたのが見て取れた。

顔を上げるとティーズさんと田が合い、大丈夫だとうなづかれた。

が、ゼロには何の変化もない。

「一応、成功したみたいだけど……」「……」

「こっちもだよ。古代語は綺麗になくなつたんだけど……。ゼロ、何か体に変化はあるかい？」

ゼロは椅子からトン、と下りると、そのまま体をぐるっと回した。が、特に変わつたような場所は見られない。

「特に何もないみたいですけど……」「……」

「じゃあ、実験して見よっか。アーリア、なんか木の板でも持つてきて」

ヤブ医者の声と共に、アーリアさんがすぐさま隣の部屋に消えた。そして、若干大きすぎるのが、アーリア、なんか木の板でも持つてきた。

「じゃあ、まずはクロキ君から

「俺から?」

「そ。何事にも、対照は必要だろ?」

アーリアさんが俺に近づいてきて、木の板を手渡した。と、同時に思わずよろめく。

「重つ!?!?」

かなり重い。50キロはあるがする。

「んじゅ、クロキ君。それをゼロ君に渡してくれるかな」

「…………潰れるとと思うんですけど」

「その場合は、僕が責任持つて引き取つてあげるよ」

「…………何のために?」

「解剖」

「やつぱり!—!」

ゼロをヤブ医者の手に渡すよつなことははしたくないので、あくまでもそつとゼロに板を手渡す。

万が一何かあれば、アーリアさんが助けてくれるだらう。

ゆつくつとゼロのまつたく重さを傾けるが、ゼロはまつたく動じた様子がない。

しかも、板を完全に一人で持つてている状態でも平然としていた。

「ゼ、ゼロ? 重くないのか?」

「あんまり重さは感じませんけど……」

アーリアさんが手助けしているのかと思わず目を凝らしたが、アーリアさんはヤブ医者の隣に座るままだ。

「ゼロ君、ちよつとその板を握つてもらえるかい?」

「あ、こはー」

ヤブ医者の謎の指示とともに、ゼロが指に力を入れる。と。

パシッ。

木の板が、粉碎した。

「……は？」

思わず間抜けな声が出たが、そんなことに構つていられない。

ゼロが指に入れたとたん、なにかのCGのように、板が粉々になつた。

驚きのあまり呆然としているゼロの指から、サラサラと小麦粉のよつなこなが零れ落ちる。驚く俺を放つて置いたまま、ヤブ医者が面白しそうなずいた。

「“白”の女性は怪力だと聞いたことがあつたんだけど、これほどまでとはねえ」

怪力で済まされるよつな事ではないと思つ。

今のゼロなら、トライクでも止められるのではないか。

「は、はは」

取り残された俺は、乾いた笑いを漏らすことしか出来なかつた。

準備完了であります

そこから先は大変だった。

なんでもヤブ医者によれば、“白”の女性は元来怪力の持ち主だつたそうだが、男達がその力での反乱を恐れて封印を施したらしい。

……やっぱ女人は強いわ、うん。

で、封印が解けた＝ゼロ最強という方程式が出来た。

“白”の特性も戻つたようで、少しの組み手ですぐに相手の動きを見切れるまでになつた。

そこは、さすがだなと思うことで終わつたのだが。

しかし、これはないだろう。

今日の訓練を終え、とりあえず俺たち一人の力量を測り終えたことで満足していた俺たちは、そのまま夕食に向かつた。

ヤブ医者オススメという、若干怪しめな店だつたが、料理の味は最高らしい。

ひとまずガラガラの店内に入り、席に着く。そして、ヤブ医者が頼んだ料理が運ばれてきたあとだ。

この世界ではオーダソックスな少し固めの黒パンを手に取り、ゼ

口に手渡す。

「ほー、ゼロ」

「あ、ありがとうございます」

ゼロも結構おなかが減っていたようで、うれしそうにパンを受け取った。

そのときだ。

今日の昼にも見た光景。パンが一瞬でパン粉へと姿を変えてしまったのである。

「…………あれ？」

「…………しまった。この可能性をまったく考えていなかつた

俺はおもわず頭を抱えた。

ゼロは封印が解けたばかりで、まだ力の加減がうまく出来ないらしい。

俺もゼロと組み手をしたんだけど……死ぬかと思つた。

だつてよけた後の拳が大木にめり込んだんだよ！？ しかもその後倒れた。

つーか十一歳の女の子より腕力が弱い俺つて……あはははは（遠い目）

……（ほん。まあ、何はともあれ結論は一つ。

ゼロは、ご飯を食べられないって事だ。

{} {} {} {}

しかし、俺が思つた以上に早くその問題は解決した。

簡単なんだ。ゼロが自分で食べられないなら、他の誰かが食べさせてやればいい。

いふ讀て
今は方一リ方さくがせ口のお世讀役となつてゐる

最初に白羽の矢が立ったのは俺たちだからみんなの後ろから叫び声をこぼしてくるアーリアさんを前に逃走した。

……マジ怖え。怖すぎる。田線一つで地獄が見えた。

で、アーリアさんがゼロに食べさせているのだが、当の本人はこの年になつて誰かに食べさせてもらつということに対する羞恥やアーリアさんへの申し訳なさが入り混じつたような、なんとも複雑な顔をしている。

別に何にも思わなくていいこと思つんだけどさ。
アーリアさん顔
がホクホクしてるし。

俺への態度との差が凄まじい。そんなに男が嫌いですか。

「……………当たり前でしょ。男はみんな害虫です」「心読まれた！？ しかも言い切った！」

つーか害虫つー! ? どんだけ差別が激しいの! ?

…………まあ、こんなことがあって、騒がしい夕食を終えた俺たち。

…………とりあえず、ティーズさんとアーリアさん、ヤブ医者は自宅に帰還。俺たちは取つておいた宿に戻つた。

今日はふたつ部屋が取れたので、俺とゼロは別々の部屋だ。

最初はいつものように使用人が部屋をもじりうなんてなどなど言つてたが、最後には眠そつに部屋に引っ込んでいった。

俺もさつさとベッドに潜り込むと、明日から始まる本格的な訓練に備えて眠つた。

~~~~~

翌日からはペアを変え、俺とアーリアさん、ゼロとティーズさんで組むことになつた。

…………といつものも、アーリアさんがゼロに手加減しきて訓練にならないとティーズさんが言つたからだ。

…………まあ、それは俺も同感だから、ペアを変えることに異存はないんだけど……。

「だからついでにハツ当たりしちゃうのはやめとくだわーごめん

ああああああああ！！！」

いぬを、ひすみ害虫が、土に逃れ

ひどい！ てが、そんなにゼロとのペアがよかつたんですねか！？

「ハートが！ 奠の心がズタズタに！！」

精神的にも体力的にも殺されかけた。  
マジで。冗談抜きでだから

こんな訓練が毎日毎日……よく生きてるな、俺。

また、体術だけじゃなく、魔法もいくつか教わった。

日本語の古代語は違うらしく、古代語のほうが威力が高いらしい。

だが、その分習得が難しく、世間に回っていないことから、今は“魔語”（スペル）を使って戦おうということになった。

エセ神からもらった本にもいくつか載っていた魔法を練習する。

普通に出来るよになつたら動きながら。それが出来たら対人戦で。

もともとエセ神が俺に魔力を授けていたこともあって、魔法の習得も思いのほかスムーズに進んだ。

そして、いよいよ当口。

俺たちは、“勇者決定戦”に向かっていた。

## 受付（前書き）

テストがあつて更新がひどく遅れてしまいました。  
ごめんなさい。

これからは、もう少し精進していきます！

## 受付

俺達は、ティーズさんやアーリアさん、ヤブ医者に付き添われながら王城の横にある闘技場へ向かっていた。

ここから見る分にはだいたいサッカーコートぐらいの大きさしかない建物だが、その中に次々と人が吸い込まれていく。

道も大変混雑していて、ごみごみとした人の波に押されるような形で進んでいた。

「スゴイ数だな……この人たち、みんな“勇者決定戦”に出るのか」「そうだね。少なくとも、五千人はいるんじゃないかい？」  
「…………もうすでに中に入っている人も多そうです」  
「でも、あんな小さなところにみんな入れるんですか?」「魔法で中を拡張してあるんだよ。なかはすん」「一く広くてね、まあ……見た目の二十倍はあるんじゃない?」

ときおり雑談を交えながら歩を進める。

「五千人……」

俺が周りを見回しながら歩を進める。

五千人……この中で、たった一人が勇者になる。

金貨のためにはじめたとはいえ、これから戦いにワクワクしているのも確かだった。

入院中、走ることはおろか歩くことも制限されたあの病室に比べて、ここはひどく自由だった。

「どんな形式で戦うんだ？」

「基本は勝ち抜き戦だね。普通はパーティー対パーティーでやるもんだけ、この人数じゃあ、適当に殴り合いの戦争みたいななるかもねえ」

俺の質問にはティーズさんが答えてくれたが、そこに出でてきた言葉の意味が分からなかつた。

「パーティー？ なんだそれ」

「要するにチームのことですよ。ユウ様と私で一つのパーティーです。パーティーは、五人まで許されているんですよ」

今度はゼロだ。しかし、ゼロが知つているようなことを知らないというのは、いささか決まりが悪い。

まあ、世界が違うのだから仕方がないと諦めた。

「じゃあ、一対五になることもありますって訳か……」

「まあ、よっぽどの事がない限り大丈夫だと思うけどねえ。クロキ君もゼロ君も、この一週間でかなり強くなつたし」

「…………ゼロに怪我をさせた人はみんなちょん切ります

「だからやめよつー？ アーリアさん危険だよー！」

ゼロが擦り傷一つ負つただけでも地獄の果てまで追いかけられそうだ。

……想像して思わず身震いした。

そういつしてこるうちに、建物の前にたどり着いた。輝くような金をベースにして造られている建物で、太陽の反射が日にまぶしい。繊細に書き込まれた飾りのある門の前で、双子と思われる女性が受付をしていた。

「「んにちは」

「“勇者決定戦”によつ」」

まつたく同じ姿の二人が口を開く。髪は金、目は翠だ。

「何名様での「」登録でしょ「」うか」

「一名です」

「パーティー名をおつかがいします」

「……モノクロ、ですか」

パーティー名を言う時に、思わずためらってしまった。実はこれ、数日前に決めておいたチーム名なの だが、使うこともないと思つていて適当につけてしまったものだ。まさかパーティーなんてものがあるとは。

俺が“黒”でゼロが“白”。よつてモノクロ。

なさすぎの想像力に涙が出た。

「では「」からをお受け取り下さ」」

「今大会への参加証です」

「紛失されると再発行は出来ませんので、お取り扱いに「」注意下さい」

「では、こつてらしゃこませ」

双子に見送られて先へと進む。

建物の大きな門をくぐると、そこには。

予想をはるかに超えた景色が広がっていた。

東京ドームがいくつ入るのか、見渡すことが出来ないほど広い。細部まで造りこまれ、とても歴史を感じさせる建物だ。

そして、何より驚いたのは、天井。

天井があるはずの場所にあつた、青く澄み渡つた空だつた。

「え……？」  
「わあ……」

俺とゼロは食い入るように空を見つめた。

つーかナゼあんなところに空が。ここは室内だつたはず。吹き抜けになつてゐるといつても考えられたが、そうだとすれば切り取られたような空が見えるはずだ。

限界はある。

なのにそれを感じさせない広々とした青空に鳥肌が立つた。

「ああ、 “オールテスの空” だね」

「 “オールテスの空” ……？」

「うん。 大魔術師と呼ばれた偉人で、 この闘技場を建てた人だよ。 この空は、 この建物の上にある本物の空を天井に投影しているのさ」

「 ……すごい」

俺は思わず嘆息した。 本物と見間違うばかりの空だ。

「さあ、 ボーっとしてないで、 あんたたちはさつさとファイトフィールドに向かいな」

ティーズさんが声をかけた。 俺がティーズさんを見ると、 彼女はうれしそうに笑っていた。

「あつちを見てごらん」

俺とゼロは、 目にはいった光景に啞然とした。

約一万人の人々が、 広いフィールド内でそれぞれに武器を構えていた。

ヤブ医者のおもしろい笑い声が聞こえる。

「 第一回戦の始まりだよ」

## 一回戦

「ああ、こよこの時がやつてまいりましたーー！」

広い闘技場内いつぱいに、レポーターの声が響く。  
俺とゼロはレポーターの声を聞きながら、適当に体をほぐしていった。

「剣を研ぎ、技を磨き、己の体を鍛え上げながら待ちに待ったこの瞬間ーー！　“勇者決定戦”の開始ですーー！」

会場が大いに沸いた。歓声というよりも叫びが闘技場を満たし、全員のテンションがマックスになつていいよつだ。

「はい、ではーー！　一回戦のルールを説明します！」

レポーターが声を上げる。

「一回戦は、その名も“殴つて殴つてぶちのめせー”ですー！」

どんなネーミングー！？　そのまんますぎるだーー！」

俺は思わず心中で叫んだ。ゼロもぽかんとした顔でレポーターを見つめていたが、他の参加者達はますますハイになつていく。

……もしかして、毎回こんな感じなのか。

なんとも脱力してしまいそうなネーミングセンスだ。これを决定した人間の顔が見てみたいものである。

そんな俺の心情とは別に、レポーターは説明を続けた。

「ルールは簡単、一回戦開始から一時間経過したときに、立つていた者が勝利者だ！ その一時間のうちは何をしててもOK！ もし死んじやつたら困るという方は、今のうちに棄権してくださいねー！」  
「いやいや待てよー？」

殺されるのか！？ 勇者同士の争いで殺されるんですか！？  
俺棄権するぞそんなん！ だつて平和主義の日本人ですから！ 死にたくありませんから！ マジ冗談抜きで！

棄権しよう！ そう思つてゼロを見ると、ゼロはなぜか目を輝かせていた。

「あ、あのさゼロ

」

「コウ様！ すぐ楽しみですねー！」

満面の笑みを振りまきながらはしゃぐゼロ。……ナゼに？

周りを見ると、俺以外の人があほ全員といつていいほど同じような表情をしていた。

……俺だけ！？ 俺だけですか！ こんなところで孤立するなんて予想外だ。異世界クオリティーですか！？

「棄権したい人ー！ いませんねー！ それじゃあ一分後にはじめます！ 準備してください！」

一分後かよ！ 早ツ！

とりあえず、横に長い六角形の形をしている闘技場の壁際による。とんがつている下のほうが入り口で、上のほうに、ティーズさんたちが居る観客席があると思つて欲しい。

俺が居るのは入り口側で、周りを見ると参加者達が同じように壁際によつているのが見えた。

「はーい！ それではみなさん、準備はいいですね！ レディー、ファイツ！！！」

観客席に設置されている大きな金の鐘が、この大会の始まりを告げた。

（――）

「うわあ…………」

だいたい三十分ほど経つただろうか。

俺は、目の前のあるさまに思わず顔をしかめてうめいた。

死屍累々。地獄絵図。

三途の川がそこらに流れているんじゃないだろうか。

そんな感じだつた。

最初は人だらけでごみごみしてぎゅうぎゅうづめだった闘技場も、再起不能とみなされた人たちが外に運び出されて、大分人数が減った。俺とゼロはまだ生き残っているけど、もう千人も居ないんじゃないだろうか。まだ半分だというのに、ずいぶんなペースだ。

「アーチャーの魔術を封じる術……」

また一人、ゼロに飛び掛った男が軽々と投げ飛ばされていく。良く飛んだな。軽く十メートルぐらい？

いくら人が多くても、ゼロのような小さい女の子はほとんど居ない。つまり、それだけ標的になりやすい。

小さい女の子をねらう時点で最低な奴らだ。勇者になる資格はないと判断した俺は、ゼロにゴーサインを出した。

まあ、そつからぬもつ想像に任せるけど。

今、ゼロの前には様々な男達がひとかたまりになつて積み上げられていた。

「ふう……疲れました」

汗をかいているゼロを休ませるため、今度は俺が前に出た。  
いくら減つたとはいえ次から次へとわいてくる敵さんたちに向け

て、魔法を発する。

「“風よ來たりて渦を巻け”！」

エセ神からもひつた魔術書に書いてあつた魔語スペルを唱える。するとどこからともなく風が吹き、俺の目の前でどんどんと竜巻を形成する。

男達はそれに気がつくことが出来ず、数秒後には吸い上げられて空の上だ。まあ、加減はしているので、氣絶するだけで済んでいるだろうが。

初めて使つたときは森の木々が根こそぎ引っ抜かれてしまつた。一番最初に、この世界に来たときに見た景色のようだ。俺の魔力は一体どれだけあるのか、いくら魔術を使っても疲れなかつた。

……エセ神、加減間違えたんじゃね？ つていうぐらい。

まあ、そのおかげで今まで生き残つてゐるんだけど。

とりあえず、時間一杯まで交代に敵を蹴散らして、俺たちは一回戦で勝利を収めたのだった。

……意外と楽勝だつたのはいいんだけどさ。死なかつたのもありがたいんだけど、ねえ。

せけに“黒”があつこ氣がするの?、俺の氣のせいか?

とりあえず、一回戦を終えた俺たちはティーズさんたちのところへ戻ることにした。

観客席を歩き回りながら、三人の姿を探す。

「あ、居ましたよ」

ゼロが三人を見つけ、タツタツと軽い足取りで駆けて行く。一時間も大人を投げ飛ばしていたとは思えない。まあ、そういう俺もさほど疲労しては居ないのだが。

「あ、お帰り~」

「…………お疲れ様です」

「やつと返ってきたかい」

三人と会流すると、それぞれねぎらいの言葉をかけられた。それに返事をしながら口を開く。

「ただいま。まあ、そんなに手こずらなかつたけどね」「はい、そんなに問題ありませんでした」

「そうかい。ならいい」

「…………怪我は?」

アーリアさんにそういうわれて体を眺め回す。

「ん、俺はないかな。ゼロは?」

「私も大丈夫ですよ。ちょっとした擦り傷があるぐらいで

ゼロが言い終わる前に、アーリアさんから俺に向かつてメスが飛んできた。

「つとわあ！？ 危な！！ 何するんですかアーリアさん！？」

「…………そこに直りなさい。あなたをちゃんと切つてあげます」

「俺のせいですか！？」

つかアーリアさん、メスを片付けよつかとりあえず！ 瞳孔が開いてますよーー！」

「あはは、アーリアは今日も元気だねえ」

「元気すぎでこいつちが殺られるんですけどーー！」

やつぱりヤブ医者の頭にはネジが足りないようだ。

「はいはい、あんた等そのぐらこにしておきなよ

あきれたようなティーズさんの声で、よつやくその場が収まった。  
……よかつた、ホントに。マジで三途の川が見えた。

「それはそうと、あんたたち部屋は確認したのかい？」

「部屋？」

何の事が分からずに聞き返すと、ヤブ医者が言った。

「“勇者決定戦”が行なわれている間は、出場者は闘技場から出られないんだよ～」

「は？ なんだだ？」

“勇者決定戦”は賭け事の対象にもなつてゐるから、外に出たらい

ろんな人にねらわれるんだって」

「でも、それだったら中でも同じじゃないか？　見たところ、警備の人なんて居ないし」

「いや、外で襲われたら兵士の人が居るし、襲つてきたほうの責任でしょ？」

ヤブ医者は、笑顔で爆弾を投下した。

「でも、闘技場の中は治外法権だから、襲われても文句なしなんだよ～」

……は？

「はああああ！？　そんなこと聞いてないぞ！？」

「え、言つてなかつたつけ。いやあ、ゴメンゴメン」

「ゴメンで済むかあああ！？」

またしても生命の危機ですか！？

「つーか、中のほうが危険なら、何でなおさら外に出れないんだよ！？」

「えーとねえ、それぐらいの試練を乗り越えられないものなど勇者になる資格はないって事らしいけど」

「そんなにハードルあげられても困るわ！？！」

誰がいつたんだよそんな」とー！

「この国の最高権力者だね」

「王様かよ！？」

勅命ですか！？ 王様どんだけ“勇者決定戦”に関心あるの！？

「まあ、そういうことだから、今のうちに部屋の場所だけでも確認しておいたら？ 納分、部屋の場所は証明書に書いてあると思うし」「えーと……2階の15つて書いてある」

「じゃあ、確認してきましょうか？」

「いや、ゼロ。俺も行くよ」

「…………なら、私も」

「あたしは先に帰るよ。一回戦は明日だし、店の様子も見てこないとね」

「僕も一回診療所に戻るよ。まだやりたい実験もあるし」

ヤブ医者の言つ実験がどんなものなのか、そこはかとなく気になつたが、とりあえず別行動をとることにした。

さて、部屋の確認に行こうか。

今後は更新が遅れると思われます。  
申し訳ありませんが、どうかご了承下さい。

## “安らぎの樹”で

六角形をしてこる闘技場の右側には、やけに大きな建物が建つている。名は“安らぎの樹”。

そこは普段なら闘技場で行なわれるあらゆる行事の参加者のなかから、希望者が休憩したり宿泊したりするための施設だが、“勇者決定戦”開催中は、出場者全員がそこに缶詰となる。

そのため多少は不快感を改善できるように、快適な生活空間が提供されている。

らしい。

「……15、15……あ、ここだな

俺とゼロはその“安らぎの樹”にいる。

階段をのぼって一階へ。外から見ると“安らぎの樹”はハンパない高さだった。

……最上階の人とか、のぼる階段の数が果てしないんじゃないだらうか。

まあ、そのかわいそうな人たちの事は置いといて、あてがわれた部屋のドアを開けた。

「…………おおっ」

「わあ、すごいですね！――」

ドアを開けた状態で固まつた俺の横をするつと通り過ぎ、中に入つたゼロが歓声を上げた。

なんと、まあ。

俺の田の前には、高層マンションの一室ぐらゐの部屋が広がつていた。

台所に寝室、洗面所にリビングにバスルーム。  
普通に住めるよこ。すこによこ。若干カントリーだけどそれでもすこよい。しかもタダ。

全部で何室あるんだろうか。というか横の部屋との差がそんなになかつた気がしたんだけども。ここにも異世界クオリティーが！？

「ユウ様！ すこいですねー！」

ゼロがはしゃぎながら飛びついてくる。その上がりに上がつたテンションをなだめながら、ぐるりと周りを見渡した。

そして、気付いた。

「……“視”？」

天井の木目にまぎれて、古代語が刻まれていること。

さりげなく目を離し、辺りを注意深く眺める。

他の部屋にも移動しながら探してみると、最低でも一部屋に三箇所は“視”があった。

（“視”ということは観る……監視か。“聴”はなかつたから、さつきの声は聞かれていない。ということは、ばれていないはず）

まあ、薄々予想はしていたが。

こんな国を巻き込んだ大規模な大会に、不正がないわけがない。それに不幸中の幸いで、相手が使ってきたのが古代語でよかつた。<sup>スペル</sup>魔語だつたら逆に分からなかつたかもしれない。

まあ、魔語だつたら他の参加者に丸分かりか。

（……とつあえず、俺が使えるのは魔語だけって事にしておいつ）  
能ある鷹は爪を隠す。

（……とか隠し玉がひとつぐらいないと、さすがにダメだ。

（それに、俺の予想だと  
）

思ひ出すのは、さつきの一回戦での様子。

（ティーズさんによると、 “黒” は上からふたつ目の貴族。当然数も少ないから、そんなに出てきていないはずなのに……）

勇者になる資格に“有色人”も“無色人”も関係ない。だから、“無色人”は日ごろ逆らえない貴族に痛い目を見させてやるためにも参加意欲は大きい。

だが、それとは逆に“有色人”は今の状態でもそんなに不満はないはずだ。貴族は貴族でも下つ端なら、名を上げようがんばるかもしれないが、“黒”は桁が違つ。

国のトップ2。莫大な資産がある大富豪。俺みたいな偽者とは違ひ、本物は威厳があるとティーズさんが言つていた。

そんな大貴族が一族総出でこんな大会に出たりするだらうか。否。

その可能性は低い。なら。

「俺みたいなやつか……」

雲行きが怪しくなつてきた。どうも、おかしなことが起こつてゐるような気がしてならない。

「なんですか？ ユウ様」

「いや、なんでもない」

俺のつぶやきに答えたゼロに返事をして、俺は気持ちを切り替えた。

（ま、今度他の“黒”にあつたら聞いてやるつ）

あなたは何人ですか、ってな。

“ おひさまの樹 ” で（後書き）

更新が遅れまして申し訳ありません。今後もこのペースが精一杯と思われます。

十一月中に一度は更新しようと思つておりますが、ご迷惑をおかけします」と、どうも「ア承下さ」。

## ちびっ子侵入者

とりあえず部屋に荷物を置いた俺たちは、呼び出されるまでは各自で自由行動をとることにした。

そのため、ゼロはアーリアさんに連れられて外へ。俺は部屋に残つて睡眠を取ることにした。

一回戦はパーティーが十個ずつぐらい集まつて対戦するらしい。そのため、役員が呼びに来るまでは特にやることはない。

特に疲れていなかつたし、監視の目が気になつたが、あまり不自然な態度だと怪しまれる。とりあえず一人に監視の事を話して部屋から出すると、すぐに割り当てられた部屋のベッドに横になつた。

（――）

異変に気付いたのは、それから一時間弱経つた頃だった。

仰向けに寝るとどうしても視線が“視”に寄つてしまつうのうで、横を向いて眠つていた俺だったが、ふとした拍子に目が覚めた。耳を澄ましても何も聞こえない。二人はまだ帰つてきていないので知つて、もう一眠りしようとしたときだった。

かすかな息遣いが聞こえた。

体は幸いことに反応しなかったが、寝起きの頭が見る見るひちにさえていくのが分かった。全神経を耳に集中させて、相手の居所を探る。

フツ フツ フツ

音の出所がだんだんと近くなつてくる。ひくひくひくひくひくひくひいてきて、ひょうひょう自分の背中のほうで止まつた。

そして、相手が腰から武器を抜く氣配がして、空気が震えるのが分かつた。

俺も薄田を開けて、ベッド脇においておいた刀の位置を確認する。

次の瞬間、相手が俺めがけて武器を思つつきり振り下ろした。

すぐさま横に転がつて相手の武器をよけ、刀をつかんで立ち上がる。

相手は俺が起きているとは思わなかつたようで、驚いたよつた気配が伝わってきた。

その一瞬の隙に刀を鞘から抜き放ち、鞘を左手で勢い良く投げる。

あのエ女神に強化された、俺のでたらめな腕力は鞘を凄まじいスピードで飛ばし 見事相手の顔面に激突した。

「ハハハやあッ！……！」

見事な手際で侵入したわりには間抜けな声を上げて、相手が鼻を押さえながらドテツと倒れる。

どうやら鼻にクリーンヒットしたらしい。鼻が高いから悪いんだよ馬鹿野郎が。

相手が立ち上がらないついでにベッドを乗り越え、相手の武器を遠くへ放り投げた。目の前のやつがそれに気付く前に、相手の首筋に刀を突きつけた。

「あ……」

「さ、顔を押ませてもらおうか？ 侵入者さん

まだ鼻を押さえている腕をどこで顔を確認する。

全国の少女諸君が欲しがりそうな細い手足に加え、小柄な顔。性別は男。つーか少年。ゼロとそんなに変わらないんじゃないだろうか。

それだけならよかつたのに。

手入れの行き届いた金髪に綺麗な金の瞳。布の端切れを売つたらそれだけで三日は食えそうな代物の高級そうな服。それにちりばめ

られた、小さくも形の整ったきらめく宝石たち。

国旗。

「ぶ、無礼者ッ！！ 誰が侵入者だ、俺はキール・アイヤリムだぞ！」

キール・アイヤリム。

ただの名前だと、鼻で笑えればどれだけよかつたか。

アイヤリム。そしてこの国の姫君、アイヤリム王国。

「お、俺は第一王子なのになー！」

赤くなつた鼻を押さえながら、涙目で金髪ちびっ子は叫んだのだった。

ちびっ子侵入者（後書き）

11月14日、修正しました。

仲間が一人増えました。（前書き）

更新遅れまして申し訳ありません。  
十一月中はもう出来ないかと思います。十二月に入れば週一のペー  
スで更新することが出来るかと思われますので、もうしばらくお待  
ち下さい。

仲間が一人増えました。

この国には“有色人”と“無色人”がいる。基本的に“有色人”的ほうが位が高い。要するに貴族だ。

さて、その“有色人”だが、上から順に“金”、“黒”、“銀”という順番で並んでいる。

俺のような“黒”は、国を構成する貴族の中ではトップに位置する。ティーズさんの話によると、重要な地位を占めているのはほとんどが“黒”で、その補佐として“銀”がある。

では、“黒”的上を行く“金”はなんなのか。

この世界で、“金”は王族を示す。

王族の血は絶対だ。髪が金色のものも居るにはいるが、その瞳の色。輝く金色の瞳は、神の瞳と同じ。

この国を見据えるために与えられた、千里眼。それこそが、王たるもの。の証。王族だけが持っている能力だ。

そういえば、あの工セ神の目も金色だつたな、とぼんやり思い出す。

とりあえず首筋に突きつけた刀をどけ、顔をまじまじと覗き込んだ。

……本当に金色だ。猫みたいだな。

首根つこを捕まえているとじたばた暴れたので、手を離してやつた。

「この無礼者め！俺に触れるなど千年はやい！」

……とつあえず「パン」を食らわせておいた。ふつ飛ばさない程度に手加減はしたが、それでも痛かつたらしい。

涙目で額をわする（自称）第一王子に問いかける。

「んで、一体なんのようだよちびっ子」

「誰がちびっ子だ！キール様と呼ばぬか貴様！」

はい、「パン」発田はいつました。

ますます赤くなつた額は無視する。

「で、用事はないのかちびっ子」

「あるわ！そしてちびっ子言つくな！」

よく叫ぶやつだな。元氣すぎるだらうが。

「貴様のせいで、俺のパーティーで生き残つたのが俺一人になつてしまつたのだ！我が国の一一番の精銳を連れてきたといつのに！」

「知るか」

その返答に怒り出したちびっ子の頭を押さえながら、やついえばと思い返す。

魔語を使って倒した相手の中に、鎧兜の兵士がいた氣もする。ま

あ、何でもありの試合だったのでして氣にも留めていなかつたが。

「どう責任を取つてくれるー！」のままでは一回戦に参加できないではないか！」「

「え、なんで。一人で行つてくりやあいいじやん」

「馬鹿者め！ パーティーは一人からしか組めないだろ？が！」

まじか。それ初めて知つた。

つまり、なんだ？このちびっ子が俺を殺そつとしたのは、ただの腹いせか？

……。

「いたあッ！？ な、なにをする！？」

「あ、スマン。勝手に手が出てた」

「嘘付け！ 確信犯だろ？が！」

よく分かつたな。そんなに分かりやすかつただろ？が。

どうしてくれるとだと叫びっぱなしのちびっ子を押さえながら考  
えていくと、部屋のドアが開く音がした。

（――）

「……」

「あ、アーリアさん。どうぞ」

「……」

……こ、怖え。

時は少しあかのぼる。

帰ってきたゼロとアーリアさんは俺が押さえつけたちびっ子に田を丸くし、ついでその金の瞳にすぐさまひざました。そのことに謫子に乗つたちびっ子が、

「おこ、やこの“田”。茶を入れる」

などと余計なことをいったからまずかった。

ゼロへの明らかな侮蔑に、瞳に怒りの炎を燃やしたアーリアさん。次の瞬間ちびっ子に怒りの拳骨を落とし、ゼロから出したのか分からぬ頑丈な縄でぐるぐるに縛り上げた。

唖口とする俺とゼロを尻田にアーリアさんはちびっ子をベッドに放り投げ、両手に鋭利なメスを構えて投げた。

もしあの時ゼロが声を上げなかつたら、きっと放たれたメスはちびっ子を容赦なく突き刺していただろう。

「ちょっと、アーリアさん。相手は子供ですよ、こ・ど・も。大人気ないですよー」

「…………害虫に容赦はいりません」

「王子にも害虫呼ばわりーー？」

アーリアさんにとって、全ての世界は女の子と害虫で構成されてゐるらしい。

「で、こいつの仲間を俺が倒しちゃつたんでどうとかじつけって言つ

てきてるんですけど……」

「………… みぞに捨ててきましまつか」

「だから相手王子様——！」

ゼロニアーリアさんの機嫌を取つてもらひながら話を進める。

なんか、ゼロがアーリアさんをなでてる。……普通逆だろ。でもアーリアさんなんか微笑んでるし。あ、皿が合つた。

めつちゅいらまれてる………………

「あ、まあともかく、どうしましょうか」

「やつですね…… いっそのこと、私たちのパーティーに組み込んでやつた'うじうつですか？」

「ん？」

元気に声を上げたゼロの話はいつだ。

“勇者決定戦”開催中にはパーティーの再編成が認められている。対戦を重ねることに数多くのパーティーが脱落するため、生き残ったのに参加できないものたちを救うための救済措置だ。ゼロいわく、それを使ってちびっ子を俺たちのパーティーに取り込めばいいのではないか、と。

……うーん。

ただのちびっ子ならそんなに迷わなかつたかもしれないけど、王子だしなあ……。

「——こいつをチームに組み込んだことで、後々面倒にならぬことは避け

たい。

けど。

「……おこ、ちびっ子」

「誰がちびっ子だー、いー加減」の繩を解かぬか!—。」

「お前、実力はどのくらいある」

「少なくとも、セイの“丑”には負さん!—

やめぎやあああ!—」

……あはつが。再びアーリアさんのげといつがお見舞いされた。

手足を縛られた芋虫状態で叫びながら痛みに耐えるちびっ子。…

…「」愁傷様。

ま、ともかくだ。

痛みがひくのを見計りつて、もう一度ちびっ子に声をかける。

「…………男に!—叫ばないにな?」

「ないシ!—!」

ほとんどの怒鳴り声で言ふたちちびっ子の面葉に笑つた。

「じゃあ、おまえはこれからパーティー“モノクロ”の一

員だ」

といつわけで、仲間が一人増えました。

## 1 | 回戦（前書き）

お待たせいたしました。ようやく一段落つき、これからは週一のペースで更新できると思います。  
待っている方がいらっしゃるのかは分かりませんが、一回戦、投稿です。

## 一回戦

ちびっ子を連れて受付へ行き、その場でパーティーを編成した。受付の双子のお姉さんに聞くと、今まででもう結構な数のパーティーが編成されなおしているらしい。

で、丁度そこに居合わせた役員の人には、もつすべ一回戦だと知られた俺たちは、部屋には戻らずに闘技場に直行した。

そして、今に至る。

「第一いいい七問！！ アイヤリム王国の首都である、ここ“モルアート”の名産品を答えよ！」

レポーターの大きな声に続いたのは、男や女の様々な叫び声。合否判定を行い、次々と脱落していく人々。

その中で、一つの声が上がった。

「ふん。俺を誰だと思っている

小さくとも、その声は澄み渡っている。

「モルアートの名産品といえば、“バーンボーン”に決まっているわ！」

「せーっかいです！！ パーティーモノクロ七問連続正解！」

傲慢に胸を張るちびっ子に向けられるのは、惜しみない怒号と野次の嵐だった。

~~~~~

今現在俺たちが参加しているのは、“勇者決定戦”第一回戦。

その名も、“叫んで答えて勝ちあがれ！”である。

最初に聞いたときは、一回戦同様ぶつ飛んだネーミングに睡然としたものだが、まさにそれこそがこの試合の全てを表しているといえた。

試合、といつたが。

これは一回戦のような肉弾戦ではなく、頭を使つた頭脳戦である。一度でも間違えば即座に失格といつ、大変厳しい審査方法で、難易度は高い。

先程の第七問のようこそ、とっても基本的な問題ばかりだが、この世界には学校というものがないらしく、ほとんど自分の住んでいる地域の基礎知識ぐらいしかないらしい。

俺たちのパーティーも似たようなもので、俺にいたつては異世界人だということでこの世界の事を何一つ知らない。この街の名前もさつき知つたところだ。ゼロは一般人並の知識しか持つて居ない。何十ものパーティーがずらりと並ぶ中で、俺たちは他のパーティーが失格するまで何もしないといづ、消極的な方法に出る予定。

予定、だった。

しかし、ちびっ子がパーティーに入ったことで、状態は大きく好转した。

ちびっ子はこんなに小さくても一応王子サマである。第二王子といふことで、王位は兄が継ぐと決まっているようだが、それでも王族としての英才教育は、それこそ物心付く前から始まる。

そのおかげで、王族は一般人を遥かに超えた知識と教養を身につけることが出来、持ち前の能力“千里眼”的おかげで、知らないことはほぼないといつても過言ではない。

そしてそれは、まだ十歳になりたてのちびっ子にもいえた。

ちびっ子は周りの大人たちを哀れむかのような視線を送った後、培つてきた知識をそれみよがしに披露する。そのせいでただいま七問連続正解という、とんでもない記録をたたき出している。

「バーンボーンってなんだ？」

「はつ、そんなことも知らぬのか、この愚か者め。バーンボーンはこの首都モルアートでしか取れぬ特殊な精霊石だ。貴様のその剣もバーンボーンで出来ているだろうが」

「へえ。教えてくれたのには感謝するが、言い方がムカつく

やつぱ、生意気なガキには制裁を、つてな。

「あいたッ！？ ま、またか貴様！？ そのでこびんとやらをするのをやめろ！ 不敬罪で処刑するぞ！」

「残念だつたな。この闘技場内はただいま治外法権になつてゐるんだよばーか。法のない自由な空間。治外法権バンザーイ」

「貴様……！ ここを出た暁には、貴様など奴隸の“白”もろとも

処刑してやるッ！

「…………そのままに、お前がアーリアさんに殺されないことを祈るばかりだな」

そう。ここは法のない場所だ。だから仮にも王子であるちびっ子にも暴言の嵐嵐だ。試合に勝てるのは大歓迎だが、敵をあまり作りすぎたりするのは遠慮したい。

しかもこいつの傲岸不遜な態度。脱落していった人たちから送られてくる怨念のこもった視線が体中に突き刺さるやつだ。

結局一回戦は全三十問中三十問ともちびっ子が答えてしまい、何十もあるパーティーの中から俺たちしか三回戦に勝ちあがれないという、ある意味悲劇の試合となつた。最初は手堅く様子を見ていたパーティーも、ちびっ子の馬鹿にしたような態度に怒り心頭、叫びまくつてミスを連発。あえなく失格となつた。

……なんつーか、まあ、一言。

……俺、なんもしてねー……。

アーリアさんと

一回戦を終えた俺たちは、すぐさま闘技場を後にすると、“安らぎの樹”に駆け込んだ。なぜなら、ちびっ子が調子に乗りすぎたせいで脱落していった方々が、我先にと俺たちめがけて突っ込んできたからだ。

おそれらぐ、あの場で全員をのしてしまった事も出来たのかも知れないが、出来るだけ無駄な戦闘は避けたかったし、あの鬼気迫る般若のよつた形相におもわず足が動いてしまった。

だつて怖えよ…… みなさんそろいもそろつて目が血走ってるんだよ！？ ちびっ子なんて強がりながらもがたがた震えてたよ。俺も震えてたよ。

とりあえず部屋の中に立てこもる。なかではアーリアさんが待つていて、ゼロを見つけると前に居たちびっ子を吹き飛ばして駆け寄つた。あわれちびっ子。

「…………お帰りなさい。お疲れさまでした」
「ただいま帰りました～」

美女美少女のほんわかとした空気を楽しんじないと、ふいに部屋の外が騒がしくなった。

「…………一体なんですか」
「ああ、きっとさつきの連中ですね。追いつかれたか」
「ま、またあいつらが来たのかー？」

ゼロがアーリアさんに説明をしているつたりも、足音はどんどん近づいてきている。ちびっ子は責められて後ずさり、俺も内心緊張していた。

そして、ついに足音が止まり 次の瞬間、扉がぶち開けられた。

「ここかつ！！」

先頭集団はいかついオッサンたち。後ろには飛び道具を持つ人や、魔術師らしき人たちが居て、どいつもこいつも黒いオーラを発しているように見えるのは気のせいか。

そいつらはそろそろと部屋に足を踏み入れると、俺たちをキッとにらみつけた。

その視線に俺とちびっ子はますます後ずさりし、ゼロは小走りでアーリアさんの背に隠れた。

…………そのせいで、若干一人が幸せそうなのには言つまでもない。

「てめえらアアアアア！！」

一番前に居たオッサンが声を張り上げた。うわ、耳キーンってなつた。

「てめえらのせいだ、ここにいる奴ら全員！ 一回戦敗退だぞ！！ どうしてくれるってんだアアアアア！！」

ちよ、お前もう叫ぶな。耳キーンは結構めんじくさいんだぞ。直るまで結構イライラすんだかんな！

「ふん、情けない。素直に負けを認めぬか、虫けらめ
「お前が言える立場じゃな」って分かってる？お前も俺に同じこと
したと思つんだけど」

「…………」

「無視か」「ア。いい度胸だな。くらえ制裁ツ！」

「いたあツー？」

再びテ「ハッパン。何回食らえれば学習するんだろう。まつこにまつま
しかも、ちびっ子の言葉のせいでむこうがますます殺氣立つてい
る。

「…………はあ」

思わずため息が出てしまつた。なんかこいつに来てから災難続き
じゃね俺？

まあ、その規模が小さいことだけは救いだけ。
そのため息でまた向こうがつるやくなつた。ああもう。

「で、あんたらむかしにいたいんだよ？」

俺が声をかけると、オッサンが言つた。

「お前らをギッタギタのメッタメタに出来れば満足さ。ああ、それ
と……この女とガキは寄越せ。こいつでちやんと可愛がつてやる
よ」

止める間もなかつた。

次の瞬間狙いたがわず放たれたメスは目にも留まらぬ速さで宙を

飛び、オッサンの体中に突き刺さった。

わざと急所をはずされた、ヤブ医者特製の毒が塗りこまれたそのメスは、体に刺さると同時に毒を全身に回す。

アーリアさんは冷たい目をしていった。

「…………害虫が。そのまま血を流し続けてもがき苦しめばいい」

その瞳に見えたのは、男に対する嫌悪と憎悪。

彼女の根底に深く根付いている、世界を“害虫”と“その他”で分けるしきりが垣間見えた気がして、俺は一瞬の半分目を閉じた。

そして目を開き、オッサンに歩み寄るとメスを引き抜いた。体に触れて、意識を集中させる。

誰にも聞こえないよつこ、小さく小さくつぶやいた。

「“薬”」

俺の右腕が視認出来ない程度に発光し、その光がオッサンに流れ込むのを見届ける。

数秒後、オッサンは表情を和らげて意識を落とした。

「…………なぜ助けたんですか」

聞こえたのはアーリアさんの声。俺はアーリアさんに向き直る。背中に他の人たちの視線を感じながら、俺は口を開いた。

「じゃあ、なぜ殺そうとしたんですか」

「…………存在している価値がないと思つたからです」

彼女の声にこめられた、淡々とした感情。

「……………彼が存在していて、なんの役に立つというんですか。ただ本能のままに行動し、他人に害を与えるしかないというのに」
「……………」

俺はアーリアさんをじっと見詰めた。

「……………その存在がふざけているとしかいえません。生きていても意味がない存在ならば、死んでいたほうが人のためです」
「本気で言つてるんですか」
「……………本気です」

俺は後ろをチラリと見た。押しかけてきた人々が所在なさげにおりおろしている。前では、ちびっ子とゼロがいつの間にか部屋の隅に避難している。ため息が出た。

本当に、面倒」とばかり起きる。

「場所を変えましょうか」

アーリアさんがうなずいたのを確認して、俺たちは部屋を出た。ドアの前には人だかりがあつたが、狭い部屋を埋め尽くすほどの人達は、怒りを見せるアーリアさんを恐れてか、何も言わず自然と部屋の入り口までの道を作ってくれた。

ああもう、イライラする。

アーリアセント（後書き）

能口丈徒さまの「」拙稿により一部訂正しました。

俺の世界とあなたの世界（前書き）

冒頭部分は第10部「ヤブ医者と元王宮騎士」の最初と同じようなものが入ります。もしお忘れでしたら、一度読み直してください。完全にシリアスパートです。どうぞ。

俺の世界とあんたの世界

幼子は覚えていた。母と呼ばれる人の温かさを。

幼子は覚えていた。まだ見ぬ自分を待ち望んでくれている父の存在を。

幼子は覚えていた。

母を殺し、父を殺し、周りを不幸にしたのは自分だというのことを。

冬の野山に打ち捨てられ、身を裂く寒さに震えながらも、幼子は、生きることを望まなかつた。

産まれた瞬間に、この身に憑いた呪いを背負い、不幸を振りまきながら生きていく意味が分からなかつた。

だから、“死”が“生”の向こう側から手を伸ばしてきた時も、むしろ喜んで手をとつた。幼子は、幼子でありながらも誰よりも多くのことを理解していく、この世の真理とも呼ぶべき物を背負つていた。

“死”は恐れるものではないと知つていたし、“生”は必ずしも幸せではないことを知つていた。

なのに。

気付けば幼子は、再び“生”に抱きかかえられていた。

優しく暖かく、それでいて、残酷で血塗られた“生”に。

そして、幼子はゆっくうと、手を伸ばすことを諦めたの
だった。

~~~~~

俺とアーリアさんは部屋を出ると、“安らぎの樹”にある修練場  
の中の一つへと移動した。

そこには運良く誰も居なかつた。そこには広さがある部屋の中  
で、俺とアーリアさんは再び向かい合つた。

先に口を開いたのは、アーリアさんだつた。

「…………男なんてみんな死んでしまえばいい

強く強くこめられた、深く暗い憎悪。  
アーリアさんの心の半分を飲み込む闇。

「…………男などくずです。ただ力があるだけの野蛮であるかな動物  
に過ぎない。人型をしている害虫を駆除して、何が悪いというん  
ですか？」

「…………人型をしている害虫、ね」

俺はため息をついた。ああ、また俺の幸せが逃げていく。

「人間は、男だけでは生きていけないし、女だけでも無理だ。それ  
を分かっていますよね」

「…………ええ」

「なら、男が存在していることを認めてくれださー」

俺はアーリアさんを見た。色素の薄い、水色の瞳。彼女はきつぱりといつた。

「…………それは無理です」

無表情で言い切る彼女は、一体何を思つてゐるのだろうか。

「…………男が人間の“生”に必要なことは、いいでしよう、認めます。しかし、それは私に必要なものではありません。私は、男と関わりたくない」

そういう彼女の顔は、いつもよりもほんの少し暗く見えた。

俺は気がついた。彼女は根本的なところで矛盾してゐる。俺は口元に笑みを浮かべた。

「じゃあ、なんで俺と関わつてゐるんですか？」

アーリアさんは弾かれたように俺を見た。

「俺だって一応は男だし、ヤブ医者だってそうです。ちびっ子もさつきのオッサンも、男に間違いないでしょ？」

彼女の瞳が、揺れる。

「…………だから、なんですか」

「“男”なのに、ちやんと関わつてゐるじゃないですか」

アーリアさんは、目を見開いた。

“好き”も“嫌い”も、相手が居てこそ成り立つ感情です。本当に男という生き物が嫌いなら、嫌悪をむき出しこにするよりも無視したほうが早い。あなたは矛盾しているんですよ。男の存在を認めないといいながら、今日の前に居る俺の存在を認めていることが、証拠です」

「…………いいえ、認めてなど居ません。ただ、許しているだけです」

再び、彼女の瞳に闇が戻つてくる。

彼女は男の存在を、俺の存在を認めているわけではない。ただ、俺がその場に立っていることを、許しているだけなのだ。

俺は笑い出した。

「あは、は、はははは…！」

ぎょっとしてこちらを見るアーリアさんも田に入らない。俺は腹を抱えて笑つた。

許すだつて！ あはは、あはははは…！  
あははははははは…！

「 許すだと…！…！」

俺は一転、アーリアさんをこちらみつけたとして見て見た。

「じゃあ、この世に存在する全てのものには、存在するためにあなたの“許可”が必要なんですか…！」

アーリアさんが、うろたえながら俺をほうを見た。

「許す、だと！？」

「底に転がってる石つじから、この空も海も大地も！…！… その存在を維持するためには全て、あなたが認めなければならぬ」とでも言つんですか！？」

「……………そんな、ことは、」

「……………“俺”は“あなた”に生かされているとでも！…！…」

俺は、何か言いかけたアーリアさんをたえきつて言葉を発した。

「そうだ。

彼女の心の中にあるのは、男に対する嫌悪と憎悪。そして、隠し切れない傲慢さ。

反吐が出る。

俺は視界の隅で、ゼロとちびっ子がこの部屋に入ってきたのを確認した。一人とも恐々とした様子で、こっちを見ている。

「……………試してみるか。

「じゃあ、アーリアさん」

いきなり大人しくなった俺を怪しみながら、アーリアさんが言つ。

「……………なんですか

「俺を殺してください」

三人の瞳が、極限まで開かれたのを感じた。

「…………な、にを

「“男”の存在を認めたくないんでしょう。じゃあ、殺してくださいよ」

あなたを慕う、幼い少女の目の前で。

うりたえるアーリアさんは、どうしたりいのか本当に分からな  
いようだった。

俺はじっくりと待つた。ここでゼロがアーリアさんを止めたりすれば、彼女は止まるだろう。少女の願いをかなえるためだと、理由をつけて。

それじゃあ、ダメだ。それは“ゼロの思い”であつて、“彼女の  
思い”ではない。

俺が聞きたいのは、“彼女の思い”だ。

「…………できま、せん」

静かに言葉を落としたアーリアさんは、自分自身の言葉に呆然と  
しているようだった。

ほつとしている子供一人を横目に、俺は満面の笑みを浮かべた。

「…………そう、そうです。あなたはちゃんと、“男”ではなく俺  
を見ている。ヤブ医者だつてそつでしょ」

「…………私は」

「ちゃんと“認めて”ください。全部じゃなくて良い。でもせめて、自分の周りのやつぐらいは。あなたの過去に何があつたのかは知りませんが、それじゃああなたの世界が苦しくなる」

アーリアさんの目に、光が宿つた。

「ま、俺でも認めてもらえたんだから、時間をかければ“人”を認められるようになるはずです。だから、これ以上騒ぎを起こすのはやめてくださいね、ほんとマジで」

俺の体が持たないんで。

そういうと、アーリアさんはゆるゆると顔を上げる。  
そして、俺は見た。

彼女の口元に浮かぶ、かすかな笑みを。

「……言いたかったことはそれだけなんで。戻りましょうか」

四人で部屋を出て、歩き出す。  
さつきとは打って変わつて二口一口している子供一人に和みなが  
ら、俺も歩を進めた。

“認める”、ね。

そんなのまるで、“カミサマ”みたいじゃないか。

## お食事タイム

四人で廊下を歩きながら、俺は内心後悔していた。

らしくもない説教じみたことをしたのもそつだが、アーリアさんを試すような事をしてしまったのもいけなかつたと思う。

俺が今まで経験してきた過去と、アーリアさんの過去は何もかもが違う。だから性格も容姿も何もかもが違うことは当たり前なのだ。

それなのに、偉そうに説教たれて訳の分からぬことを喚いて、自分の価値観を押し付けてしまった。

（……あればだめだつたよなー）

やめときやよかつた。

はあ、とため息をついた。

前を見れば、身分に天と地ほどの差がある子供が一人、言い争いながらもどこか楽しげに会話をしている。それを後ろから見守り、時々王子さまに鉄拳を食らわせている女性も、かすかに口元がほころんでいた。

（……うん。後で謝つといひ）

そう決めて、再び前を向いた。

（……それでも、）

それでも、何か変わったものがあるのならば。

それでいいと、思った。

~~~~~

「よし、飯食おう」

腹が減つては戦は出来ぬといつ。その通りだ。

空腹といつものはとてもじゃないけど耐え難いもので、俺は前に居る三人に急遽そのことを告げ、行き先を食堂に変更した。なんだかんだいって腹が減つていたらしい子供一人は、我先にと駆け出す始末だった。

食堂に入ると、なかなかの盛況ぶりだった。バイキング形式のようで、さつきからひつきりなしに料理人が右往左往している。

「何食おうかな……」

「あ、私アレがいいですー」とってきますね

「おい、俺の分もとつてこい」

「…………（ギロリ）

「ひ、ひいッ……」

すぐさま皿を持って料理を取りに行くゼロに、ゼロをパシパシとしてアーリアさんににらまれているちびっ子。それを横目に苦笑しながら、俺も皿を持って立ち上がった。

「んー、とりあえず肉。あと肉と肉と肉と……お、肉じゃん」

皿に付いたものを片つ端からとつていぐ。え？肉ばつか？何言ってるのかわからないなーアハハハハ。

意外と空腹は限界に達していたようで、俺はすぐさま料理にかぶりついた。

染み出でくる肉汁を堪能し、食感に舌鼓を打ちながら食事を進めた。

「一回戦も終わりましたし、次の試合まではまだかかりそうですね」

ゼロが周囲を見回しながら言つ。

まあ、もつともだらう。一回戦でかなりの数がふるい落とされたとはいえ、残りの数も半端じゃない。

「ふん、頭脳戦では負ける気がしないわ」

「……お前そー、それはつまり肉弾戦では負けるつて事だよな」

ゼロにも負けないとか言つからパーティーに入れてやつたのに。ちびっ子は知らないようだが、ゼロは強い。腕力なり、きっと俺が五人居ても勝てない。

……言つて悲しくなってきた。十一歳の女の子に負ける俺（十七歳）つて一体……。

「…………ゼロの足を引っ張つたりしたら、あなたたち一人ともちよん切つてあげます」

「いやいやいや、たぶん無理ですそれ」

「ふ、情けないやつめ。たかが十ほどの子供に負けるといつのか」

「お前も子供だけどな」

子供といわれて、ギャン、ギャン喰くちびっ子を押さえていると、そのやり取りを聞いていたゼロがニッコリ笑つていった。

「じゃあ、キール様。私と勝負しませんか？」

（――）

「この俺が負けるとでも？はつ、寝言は寝て言え」

「ふふふ、私これでも、腕力には自信あるんですよー」

テーブルを挟んで向かい合う二人。二人とも笑いながら火花を飛ばしているのがなんともいえない。

お子様二人は、たがいの肘をテーブルにつき、手をがつしりと握り合っていた。

まあ、所詮は腕相撲というやつだ。

「よーし、準備は良いか？そろそろ始めるぞ」

俺は一人の手を包むようにして持つ。

そして、言った。

「レディ、ゴーー！」

次の瞬間、ちびっ子の腕がテーブルにめり込んだ。

ベキッ！――――

異様な音を立てた俺たちのテーブルに、いっせいに視線が集まる。無言の沈黙を破ったのは、勝者の明るい声だった。

「あは、すいません。手加減できなくて」

笑う勝者と悶絶する敗者。両方とも子供なのに、そのかもじ出す雰囲気に、俺は顔を引きつらせんしかなかつた。

夢と過去（前書き）

今回早めの更新です。かなり短いです。
なお、今後は本格的な受験シーズンになりますので、三月まで更新
できないだろうと思われます。ご迷惑をおかけします。
では、どうぞ。

俺たちが三回戦を行なうのは、どうやら一週間ほど後の事になるらしい。

受付の双子にそのことを聞いた俺たちは、もつ部屋に戻つて休むことにした。

ふと空を見れば、“オールテスの空”が深い紺色に染まりつつあるのが見えた。

四人には充分すぎるぐらいの部屋で、それぞれ各自の部屋に引っ込む。

監視を気にしながらも、俺は案外簡単に眠りに落ちた。

そして、気がついたら病院だった。

「…………え？」

周りを見回す。白い壁に、白い天井と床。立派な一人部屋だが、ベッド脇にある花瓶には花がない。冷たいベッドに横になっていた俺は首だけ回してそのことを確認した。もっとよく見れば、この部屋には生活感というものが見当たらない気がした。

窓には分厚いカーテンが引いてあつた。時計もなく、今が何時か分からぬ。だが俺は直感的に、今は夜だと思った。

体を起こすとすると、腕に力が入らなかつた。なんとか目の前

に腕を上げれば、つながれている何本もの管。そこへ流れている透明な液体を見て、俺はめまいがした。

(…………ああ、これは)

俺は再び首を回した。ベッドの横にある小さな棚の上にあるのは、治療費や入院費の明細。

無残にも破られたそれは、何かの液体で濡れていた。

(そう、だ。俺は行かなきゃ、)

「行かなきゃ、いけない」

力を振り絞つて体を起こした。布団を引き剥がし、体のあちこちにつけた管を引きちぎる。痛みが走っても気にならなかつた。

震える足でベッドから下りてスリッパを履いた。そして、數え切れないのである点滴の中から一本を選び、その点滴をとらはずしてしつかりと持つた。

次に、明細をもはや原形をとどめないほどにびりびりと破いて、洗面台に流した。

たつたそれだけの作業で悲鳴をあげている体を無視して、俺は部屋のドアに手をかけた。

はやく、早く行かなきゃならない。あいつが来る前に。

田を覚ました。

田を思いつきり見開いて、回りの景色を確認する。

木で出来た部屋、黒い服に、刀身の白い刀。

それらを確認して、俺はゆるゆると田を閉じて、再びベッドにしずんだ。

睡眠を取ったのに、ひどく疲れているような気がした。しかし、もう一度眠れるような気はしなかった。

夢の中の何倍も楽に体を起こすと、窓の外を見た。まだ日は昇つておらず、外は暗いままだつた。街を見れば、街灯以外の明かりはほんのわずかだ。

「……く、そ……」

ため息をついて、ベッドに横になる。体だけでも休めておこうと思つて田を閉じたが、結局その後、俺は一睡も出来なかつた。

まぶたの裏に映るのは、走馬灯のよつに見える俺の過去。いつまでもまわり続けるそれに嫌気がさして、俺は顔を歪めた。

現実（前書き）

更新遅れまして申し訳ありません。なお、今後は週一のペースで更新できるだらうと思われます。それでは、どうぞ。

ベッドから体を起こして、やることも無く床を見つめていると、ふいに部屋の外が騒がしくなった。

何事かと思いソーリングに繋がるドアを開くと、そこには。

「うるさい黙れ無礼者！ “由” の分際で王族にはむかうなど言語道断いたたたたたあ！？」

「…………少しあちらを向いておいでください。」Jの害虫をチリも残さず駆除しますから

「何この状況。デジャヴなんだだけだ」

ゼロを後ろに向かせながらちびっ子に向かってメスを構える（というかもう何本か床に突き刺さっている）アーリアさんと、顔を青ざめさせながらも王族としての威儀を保とうと無駄な努力をしているちびっ子がいた。

「おいちびっ子。お前は何回アーリアさんの怒りを貰つたら気が済むんだ」

実は自殺志願者だったのか？

「違うわ馬鹿者が！ つかちびっ子言つたな！ キール様と呼ばぬかうござやあああああ！？」

「…………あなたなど害虫で充分です」

「はい」アーリアさんストップ。それ以上やるとちびっ子が三途の川渡っちゃうから

「ユウ様、三途の川って何ですか？」

「……えーと、あれだ。天国にある黄金の川だ」

「ユウ様は物知りなんですねー」

ちょっとした好奇心で嘘をついたらあっさり信じられてしまった。何この罪悪感。ゼロのキラキラとした尊敬ビームに押しつぶされそうなんんですけど。

とりあえずゼロにアーリアさんをなだめてもう、ちびっ子を引っぺがす。ちょっと勢いが強すぎて床に頭を打つたとか気のせい。のせい。

「つーかなんで喧嘩してたんだよ」

「まだにらみ合つ（アーリアさんが圧倒的に有利に見える）二人を見ながら呆れたように言つと、ちびっ子が勢いよく口を開いた。

「この女が俺の事をそこの“白”より弱いなどとほざくからだ！」

「…………事実を言つて何が悪いんですか害虫」

「アーリアさんちびっ子の事害虫で定着しちゃってるんですけど。つーか弱いだろ」

「ありえんわ！ まだ若輩者であつても王族の端くれとして、そこの貴族どもよりも魔力量も熟練度もはるかに違う。それなのにたかが！ たかが“白”に負けるだと！？」

「でもキール様、腕相撲私に負けてましたよね」

「…………あ、あのときは体調が優れなかつただけだ！ いざとなればお前の一人や一人、指一本で倒せるわ！」

「見栄張るな。お前の今の腕力じゃ百回やつても無理だから」

つーか俺ですら負けるのちびっ子が勝つたりしたら泣く。マジ

泣きしてやるからな。

「つーかちびっ子の実力知らないんだよなー」

強いのか弱いのか。使えるのか使えないのか。使うなればならないのか。

三回戦はおそらく、一回戦と同じような肉弾戦だ。ソードアーマーでちびっ子の力を見極めておくほうが、今後の方針を検討できる。

「お前確かゼロよつ強いつて言つてたよな。今からそれを試してみるか」「どうやつてやるんですか?」

俺はゼロとちびっ子を見て一ヤリと笑つた。

「…………真剣に、一対一のガチンコ勝負だよ」

後に、アーリアさんから「…………あの時あなたは魔王レベルで気持ち悪い笑顔でした」と冷たく言われ、本気で自信をなくした。

腕試しと不穏な空氣

「んじゃ、用意は良いか？」

俺たちは“安らぎの樹”の中にこいつが存在する修練場の一つに移動すると、ゼロとかびっ子に向かって呟いた。入り口付近にはアーリアさんが立って、誰も入ってこないよつて見張ってくれてこる。

ゼロもかびっ子もこいつのよつた笑みを浮かべていたが、なんとなく後ろに般若が見えるのは氣のせいか。

（……子供同士のチャンバラのはずなんだけどなー）

「の吹雪が吹くよつた空氣は一体なんなのだろ？か。

かびっ子のやる氣の源は、王族としてのプライドだらうか。第一王子としても、金の瞳を持つものとしての誇りがあるのであつ。ならゼロは？ ゼロは“白”で、世間では“無色人”よりも下に位置する存在としてある。上に位置する者への反抗心だらうか。しかし、そんな気持ちがあるなら“黒”である自分にはついて来なかつたはずだ。

「うーんと首をかしげてこい、ゼロとかびっ子の会話が耳にまいつた。

「今回も勝たせてもらいますからねー。キール様なんて、瞬殺してみせますー。」

「ふん。お前！」とさに負けんよつなことがあれば、王族の名折れだ

！」

やはりちびっ子はプライドか。しかし会話を聞いていると、ゼロのやる気はただの負けず嫌いから来ているような気がする。瞬殺とかいう言葉が出てくるとこりにアーリアさんの影響を感じてちゅうと不安だが。

（……そういうや、ゼロは奴隸商人に買われてここまで来たんだつけ）

山奥の農村に住んでいたゼロ。そこには、こんなふうに喧嘩が出来る友達などいたのだろうか。

そして、ゼロの家族は。

ふと物思いからかえると、お子様一人が試合開始の合図を今が今かと待つている状態だった。

俺は小さく笑うと、上げた片手を一気に振り下ろした。

~~~~~

べたべたと、安物のサンダルの音が廊下に響く。白衣に眼鏡をかけた男は、口笛を吹きながら診療所の地下へと向かっていた。久しぶりの解剖に胸が躍る。

重厚な扉を開くと、薄暗い雰囲気のここには似合わないぐらいの光が溢れていた。歩みを止めることなく奥まで進む。

そこには王宮から派遣された兵士が何人かと、ただの肉塊と化した魔物の死体が一つあつた。男の姿を見た兵士の一人が寄つてくる。

「今回也要請にお応え頂き、ありがとうございます、ノワール殿。さつそく、こちらを見ていただきたいのですが

「分かつてゐるよ、アルマン。僕としても、早くメスを入れたいからね」

ふんわりと笑つてゐるはずなのに、なぜか背すじが寒くなるレイの微笑に、アルマンは思わずぶるりと震えた。王宮騎士になつてもうすぐ三年が経つが、この人の笑顔にはいまだ慣れることはない。氣を取り直すと、アルマンは魔物のほうへとレイを導いた。

「これは……」

魔物の姿を見たレイの瞳が、すっと細められる。

「こいつを倒したのは、少なくとも人間じゃないね」「ええ。恐らく、こいつよりも上位の魔物によるものかと」

横たわる魔物の死体には、多くの穴が開いていた。等しい間隔をあけて並んでいるそれは、何かの歯形のようにも見える。四本ある腕のうち一本が食いちぎられ、他には致命傷となつた胸の大穴があつた。

「それなりに頭脳も発達してゐるよう見えます。少なくとも、食用に殺したのではないです」

「他の生き物が食べようとした形跡もないね」

魔物とて、動物の一種である。その異様な見た目からそんな名が付けられはしたが、危害を与えなければ危険な存在ではない。

しかし、魔王が力を持っているときは別だ。

魔王といつて存在がどう作用するのかは今のところ分かつてはいな

いが、魔物はほとんどが凶暴化し、生きるためにではなく殺すための活動を開始する。

魔物による人的被害はそれが主で、だから人々は魔王を殺そつとするのだ。

「やはり、最近魔物の活動が活発化しているのも……」

「まあ、十中八九そうだろうね」

「……魔王が、もう動き始めているなんじ」

アルマンは顔を歪めて首を振った。彼の脳裏に映るのは、三年前の“勇者決定戦”。

そして、ある哀しい悲劇だった。

「……あとは僕がやつておくれよ。報告せよ」

「はっ。それでは」

アルマンは忌まわしき記憶を頭の隅に追いやると、部下を連れて部屋を出て行った。

レイは彼らの後姿を見送ると、ゆうくつと息を吐いた。

「彼にはさきついだらうね……」

レイはそっと皿を開じる。まぶたの裏には、いまだに鮮明な映像がよみがえる。

彼 アルマンが王宮騎士になるきっかけであり、自分やテイズが王宮騎士をやめるきっかけになった出来事。

しかし、今更どうにも出来ない」とだ。

レイは気持ちを切り替えると、鋭利に光るメスを手に取り、魔物の死体を見下ろした。その瞳に浮かぶのは、先ほどの憂いなど微塵もない、純粹な歡喜。

「さて……楽しめてもらおつか」

彼の唇が、ゆっくりと弧を描いた。

## 戦いの結果と服屋の逃亡

修練場で向かい合ひのゼロとちびっ子は、お互いにいつたん距離をとつた。そのままピタリと両者が停止する。

ゼロは皿の腕に力を込めて好機を待つ、ちびっ子は瞳を瞬く。

先に動いたのはちびっ子だった。

勢いよく地面を蹴り飛ばすと、瞬間的にゼロに肉薄する。ゼロが放つた一撃をかいぐり蹴りを繰り出した。

ゼロはそれを片手でさばくと、空いた胸めがけて拳を出す。ちびっ子がそれをしゃがんで防ぎ、飛び上がるよつな形での攻撃。

もはや子供同士の戦いではない。といつか戦いの中で頭突きやら頭突きやら足掛けやらの搦め手が目立つのは気のせいか。すんぐく卑怯つぽく見える手を次から次へと繰り出し、しかもそれを正確に対処する手際。

(……ここからまた子供ですか？)

俺だつたら力ずくでしか対処できないと思つ。

そんな権力構図の頂点と底辺に位置する一人は、ますます激しい戦いを続けていた。

今回まあくまでも腕試しとこいじと、ゼロの短剣やちびっ子の武器は没収してこい。よつて形式は自然と無手での組み手とこいとなり、試合の質も落ちるかと思つたのだが。

「やつまぬ……」  
「…………ええ」

ぱつぱつとつぶやくと、アーリアさんもつなずいた。

ゼロは“白”の女性ならではのパワーが、ちびっ子は神の瞳が持つ周囲の把握能力や先読みの力が突出しておつ、お互い一歩も引かない攻防を見せていた。

どちらかといつと力技のゼロの一撃は、一度当たれば相手に多大なダメージを与えるだらつ。小回りのきく小さな体でスピードもある。

ちびっ子はその攻撃一つ一つを正確にわざき、ゼロ以上のスピードで動き回る。一つ一つの攻撃は威力が少なくて、手数が多い。

ざわざわ一進一退とこつたところだが、ざつ転がるのだろうか。

田の前の戦いはますます速さを増していく。武器は一切使っていないはずなのに、時折すさまじい音が聞こえてくるようになった。

「ちこ、やつやとくたばらぬか！」  
「やつやとくたばらぬか逃げ回らなつて下せー！」

「…………ならば私があの害虫の動きを  
止めないで下さいお願ひします」

戦闘中のゼロの声に反応するアーリアちゃんはゼリヒがならないの  
だらうか。

一人の対決を見守つていると、ふいにアーリアさんが出口へと顔  
を向けた。何事かと思つてそちらを見ると、そこにはいつの間にか  
ティーズさんがいた。

「あれ、ティーズさん帰つてきてたんですか」

「そうだよ。店のほうもひと段落着いたからね。あんたたちを探し  
てたらここに行き着いたのね」

ティーズさんは部屋の中の対決に目を留めた。

「ほう、あれが例の第一王子かい。ゼロとやつあつなんて結構やる  
じゃないか」

「そうですね。俺の予想なら五分ぐらいでゼロの力にねじ伏せられ  
るかと思つてたんですけど」

「…………予想外」

「つむせ」わ貴様らー。」

ちびっ子が叫ぶが無視である。

「やつぱつあのくせじじこの息子だねえ。しつけがなつてないつた  
らありやしない」

「…………ちなみに、ティーズさん王様と面識あんの？」

「まあね。それなりに顔は知つてるよ」

「ただの服屋なのに？」

「う、そ、それはね……」

明らかに疑問点を指摘すると、ティーズさんは思いつきり顔をそらした。隠し事が下手なのか、悪いがばれはある。

「しかもくそじじいと呼べるほどに深い間柄だと見た」

「え、ええと……う、あれだよ、王様の服を仕立てたことがあつて」

「王宮には専属の服飾職人がいるつていってなかつたつけ？」

「それはその、お、王様が普段とは違う趣向の服を着たいと

」

「へえ、それはどんな？」

追い詰めると面白くうまいぼうを出す。実際ティーズさんの経歴に興味があったのは確かなので、ついつきつつきしてくると、ティーズさんが急に大声を出した。

「ええい！ ゼロー、そのガキ倒したらあたしがいくりでもお！」  
「やるよ！」

「ええ、本当ですか！」

「ちょ、までやこの女、ガキとは一体誰のことを  
あああ…」

ゼロは育ち盛りである。もう一度言おう。ゼロは育ち盛りである。そんなゼロの前に差し出された『食べ放題』の文字。

飛びつかないほうがおかしいだらう。

ゼロはティーズさんに反論といつ行為を行なうことで隙を見せたち  
びっ子を容赦なく殴り飛ばし、ちびっ子はまろくに受身もとれぬま  
に叩きつけられた。

ゼロはティーズさんに駆け寄ると、キラキラとした瞳でティーズさん  
を見上げた。ティーズさんは俺が先ほどの話題に触れないうちにそそ  
くさとゼロをつれて修練場を出て行き、アーリアさんもすかさずそ  
の後を追う。

修練場に残されたのは、いまだに床の上で悶絶してピクピクと震  
えるちびっ子と、見事に逃げられた哀しい俺だけが残ったのだった。

数分後、我に帰った俺は床の上でぴくぴくと痙攣するちびっ子を回収して女性陣の後を追つたが、どうやら見失つてしまつたらしい。“安らぎの樹”はかなり大きな建物なので、しらみつぶしに探すことも難しい。

多分どこかの食堂だろ？とあたりをつけて、ちびっ子をつれて先に部屋に戻ることにした。とりあえずちびっ子を部屋においておけば、俺も自由に動けるだろ？。

馬鹿みたいな怪力のおかげで重みは感じないが、万が一にも王子サマを落とさないようじつかりと抱えなおしながら、俺は部屋へと歩いていった。

時々すれ違う人々は試合を勝ち抜いてただけあってか、なんと いうか纏うオーラが違う。俺みたいなドーピング野郎がいることを謝りたくなる。だが俺も譲れない。全ては金貨の……ごほん、人々 のためだ、うん。

俺はぼんやりと先ほどの試合を思つた。ちびっ子は宣言していた通りゼロの動きにちゃんとついていっていた。最後こそ隙を見せて負けたものの、その動きはよどみない。俺やゼロのような急いじらえのやり方ではなく、きちんとした指導を受けて培つてきた力だろう。それでいて、正攻法だけではない。

気配を消すのも得意なようだし、戦力になるのは確かだろ？な。そんな考えにふけつていったのがいけなかつたのか。

無意識に足を動かしていた俺は、どうやら回介」と巻き込まれたみたいだった。

「なあ、兄ちゃんはどう思つ?」「ぜつて一俺のほうが強いよな?」

突然聞こえてきた声に驚いて歩みを止めると、ちびっ子より一回りが二回りの大ヤー少半が一ノ一ノ。

どうやら双子のようで、驚くほど似通つた顔をしている。翠の瞳と金の髪に既視感を覚えながら、俺はようやく声を出した。

「……え、何の話だ？」

「人の話聞かないやつは人間としてダメなんだって姉ちゃん言つて  
たぞー」「もう兄ちゃん、人の話聞いてねーのかよ」

会つたばかりの奴にダメ出しされる俺って……。

「そりやあ悪かつたな。で、何だつて？」

「だから、俺とコイツのどっちが強いかって話」

同時に口を開いた双子はまつたゞ回じ口調で話した。おお、シンクロ。

「いやそんなの知らないから分からないんだけど」

## 「んじゃ第一印象は？」

「まだ強そには見えた」

「恐つ……こきなり恐つ！」

正直な感想を述べたら顔が！顔がまるで般若のよひに何こいつ  
「らめひやくちや恐いんだけど……」

背中のちびつ子がうるさそうに身じろぎする。

俺は方針を変えることにした。日本人なめんなよ……

「えーとな……どつちも同じくらい強そつに」「元つに

「「ちやんと結論出せやでめえドタマかち割るやん」

「ほんとにお前らなんだよ！？」

一重人格ですかそうですか！？ ヤのつぐ自由業の人みたいな言葉

葉だつたよ！

「だいたい、何でそんなに強さにこだわるんだよ？」

「そんなの決まつてんじやんか」

「当たり前だろ」

双子ははつきりといつて言つた。

「「姉ちゃんを助けるためだよ」」

俺は首をかしげた。

「姉ちゃんって、お前らの姉か？」

「そうだよ、あんた知らないの？」

「入り口で受付してた双子がいたでしょ？」

「ああ、あの！」

そういえば、ここつらとそつくりの顔した双子の受付がいたな。

「こつらに既視感を覚えたのもそのせいか。

「姉ちゃんは王宮で仕官してるんだ」

「めちゃくちゃ強い魔法士なんだぜー。」

「へえー……王宮の魔法士か」

そんな人が受け付けやつてるんだ、国も力を挙げてこの試合に取り組んでいるんだろう。

「姉ちゃんの仕事はな、」

「王宮の警備と、」

「魔法の研究と、」

「そんでもって、この“勇者決定戦”の不正取締りなんだぜー。」

双子が誇らしげに語る。その瞳には、姉への尊敬と羨望が感じ取れた。

「不正取締りって、具体的にはどんなことをしてるんだ？」

「そりや、怪しい奴がいなかつて見てまわつたり、」

「古代語を使って部屋の監視を」

「馬鹿！ それは言つちやダメつて姉ちゃんが言つてただろー！」

一人が言いかけたことを片割れが頭をひっぱたいて止めた。しかし、聞こえてしまつたものは聞こえなかつたことには出来ない。

やはり、あの“視”は監視用だつたらしい。それがどうやつて監視されているかといふことまでは分からなかつたが、裏が取れただけでも良いだろつ。

とりあえず、適当に誤魔化して逃げるか。

「そーか。まあ、なんだか分からぬけどお前らの姉貴はすごいん

だな

「その通りだな！」

「なかなか分かる奴じやんか！」

「ああ、まあな。んじや、俺はこいつに逃げよで」

すばやく一人の間をぬって歩く。捕まらないにつけて逃げよ。

「あ、ちょっと待てよ！」

……逃亡失敗か。振り返りたくない。恐る恐る、ちらりと後ろを見ると、双子がニヤリと笑って言つた。

「俺とコイツ、どっちが強い？」

（――）

結局双子を振り切れたのは数十分が経つてからだった。いつまでもどっちが強いとうるさい双子を、最終的には半ばやけくそで逃げた。だつてあいつらじつこいんだよ！

遠回りになりながらも部屋へ向かう。だいぶ人のいるところから離れたようで、聞こえるのは俺の足音だけだった。

「で、いつまで寝た振りをしているつもりだ？」

「……なんで分かつた」

「寝息が聞こえなかつたからな」

「……ふん、あんなにやかましく騒がれては眠れるわけもなかろう

が

背中へ向かって声をかける。ビックリされたよつたな聲音のち  
びっ子に苦笑した。

「そんなに負けたのが悔しかったのか？」

「…………ふん」

「くじむなつて。ゼロ口相手によくやつたと嗤つぜい。實際、俺でも  
勝てるかどうか分からんつてのこ」

「俺と貴様は違つ」

「んなこたあ分かつてんだよ」

静まり返つてこの廊下に響く俺たちの話し声。ちびっ子が俺の服  
をぎゅっと握つた。

「少なくとも、こじんぱんに負けたわけじゃないだろ？」

「…………だが、負けは負け。敗北者は王族としてあることが認められ  
ぬ」

お出でなさいひみつお出でなさい。

「俺は、こつまで経つても何も出来ぬ。こぐら努力しても、あいつ  
には追いつけない……」

俺には、ちびっ子が言つ『あいつ』が誰のことなのかは想像もつ  
かない。でも、分かることもある。

「俺は…………」

「女々しいんだよ、お前」

何か言おつとしたちびっ子をたぶさる。

「一回ぐらい負けたからって何だよ。努力して努力して努力して、見返してやれよ」

「努力したつて何も変わらぬ。どうせ俺は 出来損ないだ」

「 ふざけんな」

俺は歩みを止めた。いきなり感じが変わった俺の様子に、ちびっ子が困惑したように声を漏らす。

「何が出来損ないだ。健康な体と親と地位と権力と力を持っておいて、そんな事を言つのか」

「 だつて」

ちびっ子の声が泣き声に変わる。

「どれだけやつてもダメだとこいつに、嫌といつまほど分かっているのに、これ以上何をしろといつのだ！？」

悲痛な叫び。こいつにも、暗い過去があつたのだろうか。

だが、それでも。

「自分を卑下してもう何も出来ないと塞ぎこんで、全てから背を向ければ満足か？」

背中にあるちびっ子の顔は見えない。

「前を向くこともせずに、進めないと決め付けでどつする奴だ？」

俺の服を握る力がギュッと強くなる。

「なにも出来ないな」となご。やつてみないと始まらない。やりたいことをやつて、それで出来なくても何も悪くなんかない」

ぐす、と泣く声が聞こえる。

「お前がやつたことば、なんだ?」

「強く、なり、たい!」

泣き声ながらひやく前を回ったちびっ子に、俺は笑った。

「えいや、めずら“勇者決定戦”で優勝しないとな」

お前を馬鹿にした奴らを見返してやるやく。

ひつゝ、と泣き続けるちびっ子をあやしながら、再び歩き出しだのだった。

## 二回戦（前書き）

更新遅れました。しかも極端に短いです。“じつは承くだせー……すいません。

## 三回戦

それから、俺たちはほとんどの時間を“安らぎの樹”で過ごしていった。時々闘技場に行つて他のパーティーの試合を見たり、広い敷地を散策することもあった。

強くなりたいと言つたちびっ子には、アーリアさん通りすぐりの地獄の特訓メニューでたたき上げを。ゼロと俺は、ティーズさんとヤブ医者を相手に基礎も交えた応用へと発展していった。

……ちびっ子の体験したモロモロについては触れないでおく。だつて怖えもん。

……「ホン。

まあ、そんな日々を経て、俺たちは三回戦のフィールドに立っていた。

（――）

三回戦。

一回戦は乱闘まがいの肉弾戦。

二回戦は知能かがやく頭脳戦。

この一つは、事前に内容を参加者に知らされていた（しかし配布された紙に書かれた字は読めなかつたので知らなかつた）。

だからこそ参加者はそれに応じて準備し、パーティーを組んでこの

“勇者決定戦”に参加した。

しかし、である。

三回戦はまったくといっていいほど情報がない。

何をするのか、誰と戦うのか。開けてみなければ分からぬパンダの箱である。

「一体何をするんでしょうね？」

「…………事前情報がまったくありませんから」

「ほんとにねえ。何をするんだと思う？ 僕は魔物の解剖対決がいいなあ」

「そんなことが許可されるものか。父上が国内に魔物を入れるなど、ありえんわ」

「とりあえず、解剖はないだろ。あつたら困る」

雑談を交わしながら立つ。大人組は観客席へと移動し、俺たちは他の参加者と共に中に散らばる。

「みなさん、お待たせしました……」

どこからともなく聞こえてくるレポーターの声に、会場に緊張が満ちていく。それぞれ張り詰めた表情をする参加者達が、観客席の中央に設置されてある簡易式の玉座に注目した。

「これから始まる、 “勇者決定戦” 最終戦は

」

突然、ガチャン！！ と大きな音がしたかと思うと、参加者が入ってきた全ての扉が閉じられた。

「なに！？」

「どういうことだ！？」

叫び声が消える前に、それは現れた。

玉座の下にある灰色の壁が音もなく開き、そこからなだれ込んできたのは。

「モンスター  
B級魔物との、命がけのガチンコバトルだ！！」

かつて見たこともない、醜悪な魔物どもだつた。

魔物。

そういうわれて真っ先に思い浮かぶものといえば、一体なんだろう。

某ゲームのスライムか？

昔ながらの妖怪か？

ファンタジックな猛獸か？

俺からしてみれば、魔物は 、 “ ” だと思う。

（――）

闘技場内、観客席の真下の壁の向こうから現れた、魔物。

よくゲームでは形が狼に似ているものや、ドラゴン、スライムなどがでてくるが、この魔物は似ても似つかぬ姿をしていた。

人型なのだ。

真っ黒に塗りつぶされたようなじです黒い鎧に武器。まるで暗黒の世界から飛び出してきた兵士のようす。大きさは軽く俺の一倍ぐらいある。目があるはずのところはまつかりと穴が開き、闇がそこにたたずんでいる。指や腕、瞳の数がめりやくりやくで、まるで出来の悪い人形を無理やり動かしているようだった。

俺は思わずぞっとして後ずさった。

( なんだよ、あれッ……！ )

恐怖で体が硬直する。歯がガチガチとなり、冷や汗がこめかみを伝い落ちた。

「なぜ、こんなとこに魔物がいるのだ！？ 父上は一体何を…」

ちびっ子の声が聞こえる。それでも動けない。

この世界に来たときでも、こんな恐怖は感じなかつたのに。人と戦つた時でさえ。

怖い。  
怖い。  
怖い。  
怖い。

この異形の形をしたイキモノが。  
この醜い姿のいきものが。  
この闇に覆われた生き物が。

まるで、病を具現化したようだ。

「つはあ、はあ、ああ……！」

呼吸が荒れる。顔が苦痛で歪むのが分かつた。

駄目だ。今、こんなとき、に。

「　　ゴウ様ッ！！」

突然、ゼロに腕を引っ張られた。すさまじい勢いで体が横にずれる。と、そこへ間一髪で魔物の腕が突き刺さった。

顔が青ざめるのが分かつた。魔物には真っ黒で鋭い爪があり、それがさっきまで俺が居た地面を深々とえぐっていた。

思わずゼロを見ると、ゼロも焦ったように後ろに下がった。

「貴様ら下がれ！ 今すぐそこから離れろ！」

ちびっ子の叫びにはっと我に返り、ゼロの手をとつて急いで距離をとる。魔物は次のターゲットを定めたようで、違う方向へと進んでいった。

「つなんだよ、あれは！？」

「魔物だ。人型ということはB級で、普段は国外の森の外れに住んでいる。なのに、なんだってこんなところに……！」

「私、一度だけあれを見たことがあります。私の村は国境付近で、

たまに冒険者がそこを通つて森へ向かうんです

「討伐しに行くのか？」

「はい。でも、普通の冒険者じゃC級で精一杯で……私が見たあれは、死体でした。でも、あれを一匹倒すために、冒険者が半分以上……」

ゼロはそこで顔を歪めた。悲痛そうなその顔に、俺は視線をそらせなかつた。

「通常、B級ともなれば一つのパーティーで一匹相手にするのが限度だ。ざつと見たところ、パーティーと魔物の割合は2対1だが……犠牲は免れんだろうな」

「お前の親父はなにを考えてるんだよ！？」

「知るか！ むしろ俺が知りたいわ……父上は一体、何をする気だ！」

ちびっ子が簡易玉座に座る父親を睨みつける。ここから見ても、国王は表情を変えた気配はない。

と、ちびっ子の後ろに忍び寄る黒い影。

「つ！」

俺はちびっ子の襟元を引っつかむとゼロに放り投げ、間髪入れず

に魔物の胸めがけて蹴りを入れた。

エセ神に強化された俺の脚力は相当なものだ。思いつきり叩き込むと、魔物が後ろに一メートルほど下がつた。

俺はすぐに下がつて距離をとつた。

「硬いな……」

人体の皮膚の感触だったが、その皮の下には金属板が埋め込まれているのだろうか。蹴つたこつちの足が痛くなるほどだ。

「ちつと、手こずりそうだな……」

俺は、魔物をまっすぐに睨みつけた。

いつの間にか、胸の痛みは止まっていた。

## 地獄の中で（前書き）

なんのお知らせも無く更新停止申し訳ありません。今後も週一で更新していきたいと思っていますが、またこのようなことがあるかもしれません。

こんな私を受け入れてくださる寛大なお方々は、これからもお付き合いよろしくお願いします。

では、どうぞ。

## 地獄の中で

「つまあ……」

「ひらひらやつてきた一体の魔物に蹴りを叩き込む。しかしダメージは『えられていな』いようで、ふらりと後ろによろめくだけだつた。俺がすぐさま後ろに飛びのくと、魔物の腕が空を切つた。左右の腕に加え、肩甲骨の辺りから生えるもう一本の触手が、開いた距離を簡単に詰めて伸びてくる。

「『炎よ暗闇を焼き尽くせ』……」

ひとつ手で腕を出して手の平から炎の塊を発射する。運良く触手に当たり、触手は見る見るうちに炎に包まれた。魔物が金属音のよくな叫びを上げて、怒りのままに俺に突進してくる。

「ドンッ！」と地面上に響くほどどの脚力で地を蹴つた魔物は一直線に俺に向かってきた。

（「速い、よけきれな……！」）

とつてて身をひるがえそつとするも間に合わない。

「はあつ！」

と、俺と魔物の間にゼロが飛び込み、その小さな手で魔物を思いつきり殴りつけた。

俺の蹴りよりも強いゼロの拳に、魔物が吹っ飛んでいく。

「ゼロ！」

「大丈夫ですか、ユウ様」

ゼロは周りに注意を払いながら俺の横に立つた。ちびっ子を探すと、すこし先で魔物に攻撃を仕掛けていた。一撃離脱を繰り返すその姿に、俺も加勢しようとした。

魔物の背後を取ると、刀をはじめて抜いた。

シャラン、と軽い音を立てて刀身が姿を現す。俺は魔語スペルを口にした。

「汝我が言の葉に応えよ 白刀はくとう”！」

刀（白刀と名付けた）に魔力を勢いよく注ぎ込む。刀身が俺の魔力で内側から光り始めた。

「その身に焰を宿し 我を導く灯火となれ”！」

魔語スペルを唱え終わると共に、白刀が一気に赤く発光し、刀身に炎を纏つた。

俺は刀を振り上げると、全力で魔物を袈裟切りに斬りつけた。

「うりやあああああ！」

ズバンッ！ と魔物の身が音を立てて斬れる

はずもなく。

燃える刀は魔物の肩口に食い込んだかと思うと、そこから背中の  
真ん中辺りまでをぐしゃぐしゃに抉り取つた。

傷口には魔力の通つた炎がまとわりつき、魔物が苦悶の叫び声を  
あげる。それに驚いてちびっ子がこっちを見ているのが分かつたが、  
俺に声を出す余裕は無かつた。

(く、そ……なんだよ、これっ！－！)

気持ち悪い。魔物の硬い肉を無理やり抉つた感覚が手にこびりつ  
いて離れない。

刀についた魔物のどす黒い体液をはらい、俺は顔を歪めて魔物を  
見た。

「くそ……－！」

こちらを振り返つた魔物が見えて、俺は無我夢中で刀を振るつた。  
魔物の身体に刀傷が増えるごとに、炎の勢いが増していく。ボタ  
ボタと地面に染み込んでいく体液の臭いに頭がおかしくなりそうだ  
った。

「グオギヤアアアアアアアアアアア！」

魔物が咆哮をあげる。俺は何も考えず、ただ本能のままに魔物の  
口に刀を突つ込んだ。

すぐに炎が魔物の口内を焼く。刀は口から魔物の頭の後ろまで突  
き破る。俺はその感覚に我に返り、ぞつとして思わず刀を引いた。

もはや声も出せなくなつた魔物が苦痛に苦しむ。俺はその姿に寒  
氣を感じながらも、魔物が動かなくなるまで刀を振るい続けた。

やがて魔物がその巨体を地面に倒す。俺は汗だくで魔物を見つめ、死んだことを確認した。

「……死んだ」

俺が殺した。

考えるな。今はそんな事をしている場合じゃない。

俺は周りを見回した。すると、そこには地獄が広がっていた。

死體。死體死體死體。

魔物の死体。  
人間の死体。

頭をやわらかい果実のようにつぶされ、手足をなくした人。  
生きたままに魔物にむさぼられている人。

思考回路がぶつ飛ぶ。何も考えられない。

ただ、心の奥底で思うのは。

（だ、めだ……殺やなあや。俺が、殺やなあや）

じじなこと、殺やれる。

俺は無意識のつけこ走り出していった。

その三回あるのよ、ただ真っ黒に塗りつぶされた殺意だった。

## 生まれ変われ（前書き）

ストックが切れました。

よつて、今までよりも更新が遅くなる可能性があります。  
が、がんばって更新していきたいと思いますので、どうかこれから  
もう少しよろしくお願いします。

## 生まれ変われ

俺はなぜこの世界にいるのか。

(それは俺が前の世界から捨ててきたから)  
俺はなぜここに立っているのか。

(与えられた目的へと到達するために)  
俺はなぜ刀を振るっているのか。

(みんなを守り、悪を葬るために)  
(みんなを守り、悪を葬るために)

本当に?

（～～～）

「あ、ああ、あああああ！」

頭の中が真っ白になる。瞳の奥で明滅する赤に誘われるよじて声を張り上げた。

俺の叫び声に、魔物が一匹、一匹と俺に近づいてくる。  
俺は喉が千切れんばかりに空氣を震わせる雄たけびを上げた。まるで何かから逃げるよう。

刀が届く範囲にあるものは全て斬つた。時には炎を、時には氷を、時には雷を刀身に纏わせ、ただ刀を振るい続けた。

だんだんと腕が重くなる。飛び散る体液の匂いがごびりついて離れない。伸ばされる鋭い爪はやすやすと俺の頬を搔き切り、生暖かい血がごぶりと流れ出す。

いくら刀を振るつても、魔物の数はまったく減つていないようこ  
見えた。何度刀を振り下ろしても、何度魔法を打ち込んで、魔物  
は致命傷を与えない限り何度でも起き上がる。終わらない地獄に気  
が狂いそうになつた。

「ええい、どけ！」

俺が再び目の前の魔物に向き直つた時、突然身体にどん、と衝撃  
が走り、俺は横に突き飛ばされた。

「ちびっ子！」

「貴様のようなむちやくちやな戦い方では倒せるものも倒せんわー！」

俺がはつと我に返ると、ちびっ子は自らの武器を眼前で構えた。

「正氣に戻れ！　ただ滅多切りにするだけでは奴らを殺すことなど  
できん！」

ちびっ子の声が氷のよつに俺の心に突き刺さる。　そう、  
殺すのだ。

「奴らは頭さえふつ飛ばせば体は動かなくなる。いくら身体を傷つ  
けても再生するだけだ！」

ちびっ子の声に、俺は体勢を立て直し、刀を構えた。気持ち悪さ  
と吐き気をこじらえ、明滅する赤を強制的に押さえ込む。

「……ああ、分かったよ」

俺はぐつと手に力を入れた。

「もう、今までの俺とはお別れだ」

さあ、奴らを『ロシード』。

弾かれたように駆け出す俺の頭の中で、ひつそりと誰かの泣き声が響いた気がした。

俺はなぜこの世界にいるのか。

（本当は、世界から逃げてきただけ）

俺はなぜここに立っているのか。

（本当は、目的にすがらなければ生きていけなかつたから）

俺はなぜ刀を振るつているのか。

（　　本当は、ただ自分のためだけに）

もう、お別れだ。

あの頃の脆弱な自分とは。  
あの頃の臆病な自分とは。  
あの頃の愚かな自分とは。

にい、と俺の唇が弧をえがいた。

「うおらあああああ！」

全力で白刀を振りぬく。フルスイングした刀は白い軌跡を宙に残し、無理やり魔物の首をはねた。

纏つた雷光の電圧で魔物の硬い皮膚を、その中の肉を、骨を、全てを焼き切る。

首が落ちた魔物は、ちびっ子がいつたとおりすぐに動かなくなり、物言わぬ骸と化した。顔に付いた返り血を手の甲でぐい、とぬぐう。垂れた血が切れた頬を伝い、俺のものと交じり合つた。

後ろから近づく気配に、俺は振り向くことなく呟いた。

「“斬”」

音も無く魔物の頭の半分が消し飛んだ。ぐらり、と傾いた魔物の体に、もう一度古代語を打ち込む。

「“斬”」

今度こそ魔物の頭が消滅し、肉塊が地に沈む。

最初は、古代語を使わずに魔語スペルだけで戦つていたが、それだけで追いつかなくなつていた。

もともと魔語は古代語より圧倒的に威力が弱い。

といつよりも、魔語にこじめられる魔力の量が限られているのである。

魔法には魔力の量と自身の技巧が影響する。つまり、魔力量が馬鹿でかくて纖細なコントロールが出来れば最強ということだ。

魔語なんかは特にそうで、器が小さいから魔力量の調節とかで俺からすればあまり使い勝手は良くない。

しかし、古代語は器の大きさが桁違いだ。

魔語の場合、魔力を器ぴたりまで注ぎ込めれば威力が強くなる。古代語であれば、魔力を注げば注ぐだけ威力が強くなるということだ。

「“斬”」

再び魔物の頭を落としたところで、周りを見回した。

生きている人間は、最初のほほ十分の一にも満たない。ちらほらと固まつて戦っている姿が見える程度だ。

この闘技場はかなり広い。今現在で魔物がどれぐらい減ったのかは予想が付かないが、。

おそれく、もう終わる。

「父上っ！」

遠くのまづから、ちびっ子の声が聞こえた。

身体を反転させて振り向くと、まっすぐに玉座を見つめる姿があった。その横には、ちびっ子を守るよつてロゼロガ立っている。

「なぜ、なぜこんなことを…」

ちびっ子は、必死な表情で叫んでいた。それも、そうだ。

周りは地獄絵図。

黒い体液と真っ赤な血が染み込んだ大地。  
ぐぢやぐぢやに  
臓物と脳髄を引きずり出され、もはやヒトに見えなくなってしまった人々。  
同じぐらいめちゃくちゃに身体を損壊させ、その曰体を投げ出している魔物。

観客席にいるのはそれこそほんの一握りで、他の大多数はこの惨状に顔を青ざめさせて退出した。

観客は、まだ運が良かつた。

「降伏したものまで見殺しにして………」

ちびっ子の声が聞こえる。ほんと慟哭のよつな、魂を裂く叫び。

「なぜ……！」

「はじめに、言つたであらう」

王が、初めて口を開いた。

「死んでは困るという人間は帰れ、と」

氷のように冷ややかで、触れたもの全てを切り裂くような、抜き身の刀身のじとき鋭さ。

俺が見た彼の瞳には、ただ事象を見つめる観察者の色しか映されてはいなかつた。

「そもそも、『勇者決定戦』は文字通り命がけのもの。半端な覚悟しか持ち合わせぬ愚か者にはない」

国王は、死ぬまいと必死に戦う俺たちを見下ろしながら言った。

「勇者とは、大勢いる民の平和のために全てを捧げる聖職者だ。その頭脳も、身体も、精神も、魂も、命も全て」

俺たちを冷ややかに見つめ、観察する国王の姿。

ちびっ子はそれを見て何を思つのだろうか。

「で、もつ……！」

顔を歪めて必死に叫ぶちびっ子を、国王は一言で切り捨てた。

「役立たずはこの国に必要ない。一二で生き残れぬというのなら、そのまま死ね」

ちちうえ、と呼ぶちびっ子の悲鳴が聞こえたのは、気のせいだつたのだろうか。

気付けば、俺は魔物の最後の一匹を倒し、ゼロとちびっ子の横に立っていた。

「ゴウ様……」

ゼロが心配そうな声を出す。ちびっ子を見れば、蒼白な顔で震えていた。

ぼす、とちびっ子の頭に手を落とす。びくり、とあからわめにおびえたちびっ子の金髪をぐしゃぐしゃにかき混ぜた。

「、ゴウ、あや、も……」

「もう終わった。お前は寝とけ」

俺が言つたとたん、何かの糸が切れたよつにちびっ子は意識を飛ばした。倒れないよつて叫え、ゼロの横に座りせる。

ちびっ子を、見た。そういうえば、はじめて名前を呼ばれたとほんやつと思つた。

一度目を閉じて、俺は国王を振り仰いだ。

ちびっ子と同じ金の瞳、金の髪。

その“千里眼”で、俺は一体どう見えているのだらうか。

く、と口角が上がつた。

「　　おい、国王」

かちり、と俺と国王の視線が合つた。

「俺はな、正直勇者になんかなりたいとこれっぽつちも思わねえ。魔王を倒す権利にも興味はないし、金貨一千万枚なんて現実味が無さ過ぎる」

死を選べば、突然放り込まれた異世界。

勇者になるために連れてこられた。勇者以外の道は一つたりとも無い。あのエセ神が許しはしない。

「ああ、勇者なんて幻の存在だよ。それなのに、ありもしないはずの魔法を覚えて、殺すための武器を買って、死なないための防具を身につけて。　　そして今、魔物とやらを殺した。そのおかげで、もう決して元には戻れなくなつた」

刀を突き立てれば肉を貫く鈍い音がした。飛ばした首は重く、ねばつく液体に寒気を覚えた。

それを知らなかつた頃には、もう戻れない。

「もう言つちまうとな、俺はすぐに尻尾巻いて逃げ帰りたかった。こんな事を一度としたくない。こんな面倒で生々しい世界から消えうせたい。そう思つた」

「ならば、その通りにすればよい」

国王が薄い唇を開く。

「降参は許さぬ。」そこから逃げたいのであれば死を選べ。今すぐ口

の首を刈り取ればよからぬ。せいらの骸にしたのと同じよつにな  
「 でも、」

冷たい顔。慈悲なんてカケラも存在しない。為政者たるもの顔。  
俺はそいつをまっすぐに見つめた。

「あんたが気にくわねえ」

国王が、すつと目を細めた。

「俺は決めた。勇者になつてやる。顔も知らない他人のために人を  
殺す偽善者になつてやる。でもそのかわり、」

あなたの思い通りには絶対にさせねえ。

俺がそう言い放てば、国王はゆるつと口元を冷たく緩めた。

「我を敵に回すか、小僧」

「もともと、あんたとよろしくする気はなかつたよ。それが露見す  
るのが、少し早まつただけだ」

ちびっ子を思つ。実の父親に真正面から拒否され、打ち捨てられ  
た小さな子供。

ちびっ子もゼロも。俺はもう決めてしまった。

自分を重ねて見てしまった。見捨てるなんて到底不可能。そんな

『気はもとよつやうやうやらない。』

俺は俺の偽善のために、じつに喧嘩を売つてやる。

さあ、大安売りのバーゲンセールだ。

「覚悟しとけよ、国王陛下。あんたはいつかきっと、俺と出会つたことを後悔するぜ。」

“勇者”として

“安らぎの樹”。『えられた部屋の中で、俺はベッドの上に寝転がっていた。

……はあ。

口から出るのは俺の眠気と疲労と口嫌悪が混ざり合った二酸化炭素。

国王に喧嘩を売つて、その後。

生き残つたのは、俺たち三人と、二人組らしいパーティーの男女、四人組の男達。

それだけだ。

最初の参加者が約一万。第一回戦で三分の一が脱落。二回戦でまた三分の一。それ以外でも、勝てないと踏んで去つていく者は多かつた。

それでも。

それでも、何人の人々が、“勇者”を、栄光を、金を、希望を求めて、あの地に立つていたはずだったのに。

残つたのは、たつたの、これっぽっち。

「……はあ、」

吐く息が重い。まぶたを下ろすたびに、眼裏で明滅する光景。

血と肉と骨と臓物と。

ぎゅっと眉間にしわを寄せる。

ゼロとちびっ子は、この頃良く眠れていないようだつた。昼間なら、ティーズさんやヤブ医者、アーリアさんとのじたばたで、まだ笑つたり怒つたりするぐらいの元氣があるようだつたが、夜になるともうダメだつた。

一人では寝れなくて、一つのベッドに三人で寄り添つて眠つた。暗闇に怯える一人のために、夜も明かりを絶やすことは無かつた。何度もうなされて飛び起きた。

特にちびっ子がひどくて、ふとした拍子に表情をなくしていたのを見たときにはぞつとした。

勇者がどうした。なにが英雄だ。なにが聖職者だ。

俺たちは、まだ子供に過ぎなかつた。

過ぎた力を『えられた、ただの無知な子供。夢見がちで樂観的で行き当たりばつたり。

“現実”に突き当たれば、つらたえることしか出来なかつた。

「…………、」

無言で、両脇で眠る一人を見る。ようやく本格的に眠り始めたのか、寝息は深くなつていて。しかし、それでもときどき顔をゆがめる。

ゆつくりと頭をなでてやれば、少しづつそごそと動いて、再び丸くなる。その寝顔に年相応のあどけなさを感じて、ようやく笑うことが出来た。

ははつ……まつたく、情けない。

俺は相変わらず、朝が来るまで眠れないままだ。

冴えた瞳であたりを見渡す。相変わらず、部屋の隅に怪しく潜む“視”の文字。

監視は続いているようだ。ヒセ神からもった例の本には、古代語でも魔語でも、魔術には制限時間があると記されていた。持続的に効果をもたらすためには定期的に魔力を注いで、刻まれた語を消さないことが必要だと。

（消えないって事は、見られ続けてるってことだよな……）

あのくそじじいめ。

三回戦、それが終わってから約一週間半。

俺たちは、いまやすっからかんになってしまった“安らぎの樹”で寝泊りしていた。

相変わらず外出禁止。ほとんど人のいなくなつたここはすっかり寂れてしまった。

せいぜい、毎日やつてくるティーズたちを相手に暇をつぶすことがぐらいしか出来ない。

ティーズさんは俺たちと一緒に泊まる事は出来ない。だから、毎日、ギリギリまで残つてから帰つていくのだが。

毎回帰り際のアーリアさんの視線が恐い。もつぎラギラ通り越して発光してそうな眼をしてんだよ！？

「ゼロになにかあつたら切る」つて！ もはや多少のかわいらしさを出して「ちゅん」すら取られて殺意しか感じられないよ！

ヤブ医者は慰めのつもりかしないけど毎回突拍子も無いものばかり持ってきて悲鳴あげさせてるし。

前なんて笑顔で差し出されて何かと思つたら毛虫が「うじやうじや入つてるフライス」だったし。

うわあああああ！あ、この世界にもフライスあるんだ。つて現実逃避しちゃったのは仕方が無い、うん。

生き残つたのは九人。この人数で、数日後にある“勇者歓迎式典”とかなんとかに参加するらしい。

その日から、俺たちの称号は“勇者”になる。子供でいられるのは、後ほんの少しだけ。

「……んん」

小さくうつなつたゼロの髪をかき分けて、汗を軽く拭いてやる。

……腹はくくつた。後悔はしていない。  
俺は、もういい。  
けれど。

この二人には、もう少し、時間を。

“子供”でいられる、夢と希望が詰まつた、優しくて暖かい時間

を。

与えてやりたいと思つから。

綺麗事だ。ただの、戯言。

この道を選んだのは二人で、これからを選ぶのも一人だ。それに対して、俺が勝手に哀れんで同情してるだけ。  
だから、これは戯言。

勝手に哀れんで同情した俺が、勝手に動くだけだ。  
やっこ、こいつらが何かを思つ必要は、ない。

拳を握り締めて、そつと詰めていた息を吐く。

つづらと明るくなってきた空気の中、俺はよつやく口を閉じた。

運命は、すぐそこまで迫っていた。

## “勇者”として（後書き）

これで、“勇者決定戦”は終了です。いわば第一章ですかね。次回からは、王宮を舞台に書いていきたいと思います。

極くなつた。

八月二十五日修正

「ひ、ひ。

硬質な足音が、磨き抜かれた白い石造りの床に響く。

普通の体育館の何倍あるんだよ、てな感じの広さがある大聖堂。両脇には各地から集まつた貴族がすらりと並んでいる。そして真ん中には 玉座へと続く黒い絨毯じゅうたん。

「ひ、ひ。

その道の上を、歩く。

「ひ、ひ、  
ひ。

足音が止まる。

まっすぐあげた顔は、この国の頂上から俺たちを見下ろす為政者の冷たい視線に射抜かれた。

その口が、開かれる。

「 よくぞ来た。死闘を生き延びた戦士どもよ……」

大聖堂を満たす王の声に、まわりの貴族たちの背筋せすじが自然と伸びる。

低くゆっくりとした声。しかし、そこに一切の温かみはなく、まるで氷のようだった。

「こたび、魔王の存在が確認され、世は再び暗黒に包まれんとしている。魔物の異常行動も増え、民心には恐怖と不安が根付きはじめた。この闇を開けるには、魔王を消し去ることだ。それこそ、アイヤリム王国として民のためにしなければならないことだ」

貴族たちは王の話に聞き入る。“有色人”と呼ばれる、彼ら。この場にいる“白”はゼロだけだ。

「我らがディターレ神の神託により“勇者決定戦”を開催、そして今ここにいるのが、勇者候補である選ばれし九人だ」

ディターレってのは……あのエセ神のことか？

その言葉に、貴族たちが王から視線を外して俺たちを見るのが分かる。

特に、第一王子であるちびっ子、“白”であるゼロ、そしてその間にいる俺を。

特に、玉座に近いほうからの視線が多い気がする。この“黒”的に、せいだらうか。俺はただの日本人であつて、“黒”ではないのだが、そうとしか見えないのだから仕方がないだらう。

ここに、つ、と王が俺たちに視線を合わせた。

思わず身体が強張るほどの圧倒的な威厳。なんてオーラだ。ぐ、と拳を強く握り締める。だめだ、まだこいつには勝てない。

「こ」の時をもつて、彼らを正式な“勇者候補”として認める。古の誓約により、“勇者”的の称号を持てるものはただ一人。“戦争”が開始されるまでに、“勇者”を決めることとなる

(“戦争”……？もしかして、魔王軍との全面対決なのか？)

殺した魔物の姿が脳裏をちらつく。ぐつと息を詰めた。

“勇者”の決定方法は簡単だ。この世は弱肉強食。強いものは生き、弱いものは死ぬ。これら“勇者候補”的なかで最も強者だと認められたものを、“勇者”と認定することをここに宣言する

（）

「弱肉強食、な……。まあシンプルだ。分かりやすい」

俺は目の前の奴らを見回して小さくつぶやいた。

大聖堂を出た俺たちは、王宮の西にあるヒーベルス宮に来ていた。“勇者候補”は全員ここに滞在するらしい。“安らぎの樹”とまでは行かないが、かなりの人数が入る宮だ。

そここの広間に、“勇者候補”全員が集まっていた。

壁にもたれている二人組と、真ん中に置かれている豪奢な円卓の近くに集まっている四人組。そして、壁際にあつた予備の椅子に座っている俺たち三人。

この九人で、一つの椅子を奪い合つ。

まあ、実質は三グループでどれが一番強いか、ということになりそうだが。

「やっぱ俺らが一番年齢低いよな……」

「当たり前だ。そもそも十代の子供が“勇者決定戦”に出場、しかも生き残ること自体初めてだぞ」

「言つてるお前が一番年下だけどな」

「“有色人”が半分、ですか……」

“有色人”は俺、ちびっ子、ゼロ、それに四人組の中の一人。リーダーらしい男と、その横にずっと立つてているやつだ。

「つーか男女比7：2つていうのが悲しすぎるな。過去に女性の“勇者”つていたのか？」

「ごく稀だがな。過去の事例は一度だけだ。しかし、その最近の方が魔王を倒した後に“勇者”的称号を振りかざして王権を握つてしまつてな。一時期極端な女尊男卑状態になつて、その後から女性の“勇者候補”は風当たりがきつくなつたらしい」

まあその当時の国王もたいがい馬鹿だけどな、とちびっ子がつぶやいた。

……やっぱり、こいつも王族なんだなあ。

「王宮には女性の役人さんはいないんですか？」

「基本的に全て男が政治を動かしているな。せいぜい王族の血統のものが多少発言力を持つ程度だ」

「武官はどうなんだ。ほら、女騎士とか」

「普通女性の城勤めなら小間使いや侍女だからな。特に規制されはいなはずだが、武官の中に女性がいるとは聞いたことがない」

ゼロの質問にすらすらと答えるちびっ子。こいつの頭の中にどれだけの知識が詰まっているのか……俺の脳みそのしわの少なさがよく分かる。

しかし、ちびっ子の話だと、城内にいる女性の数はひどく少ないようだ。まあ、女性禁制になつていなければマシな組織だといふべきか。

ふと顔を上げると、壁際に立つて了一人組がこちらに向かつてきていた。

思わず椅子の上で身じろぎする。それに気付いたのか、話し込んでいたゼロとちびっ子もこちらを向いた。

距離が近くなる。先に声をかけたのは女のほうだった。

「はじめまして、だな。あたしは傭兵のシーヴ・ガイストだ。こつちの仮面はテオドロ・ペリツツォーリだ。同じく傭兵」

「…………」

ひょうひょうとした雰囲気の女性だ。髪は赤毛で長め、後ろで一つにまとめていた。瞳の色は茶色。

その後ろに立つ男はやけに威圧感があつて目つきが鋭く無表情だった。

……なんか恐いんだけど。第一印象で相手をひるませるのはアーリアさんにも勝てるかもしね。こげ茶色の髪を短く刈り込み、目は鮮やかなブルーだ。

男の強い眼光にややひるみながりも挨拶を返す。

「あ、ああ。俺はコウ・クロキ」

「私はゼロといこます」

「……キール・アイヤリムだ」

ゼロはさつと俺の背中に身体を隠し、顔だけ出して一人にお辞儀をした。ちびっ子はといえば足と腕を組み、そっぽを向いている。わざわざのペリなんとかさんに負けず劣らずの仏頂面である。

「同じ“勇者決定戦”を勝ち抜いたものとして、そして“勇者候補”として、共にがんばろう

女性のほつが、にこやかに笑って手を差し出してくる。

共に、ねえ……。

俺は、ちらりと後ろの二人を見た。  
ゼロはいまだに俺の背中に張り付いているし、ちびっ子は一人のほつを見ようともしない。

「　　はい、お互に全力を尽くしましょう」

そう言って、俺は彼女の手を取ることなく頭を下げた。

……しばしの沈黙の後、すっと腕が引かれる。

頭を上げると、彼女　　ガイストさんは、先ほどのような外向けの笑顔ではなく、素の顔を見せていた。  
面白いものを見つけたような、言つなればにやりといつ擬音がつく笑いだった。

「ふ、ふは、ふはははは……面白い少年だね君は」

「……そりやビーも。けじビーナカッてこりと少年より青年だと思  
うんだけどなー俺」

ふはははと笑い始めた彼女にちょっと引きながら返事を返す。ふ  
ははって悪役の笑い方じやね？

また口を開こうとした彼女に、先に声がかかった。

「…………シーヴ。やめろ、迷惑しているだろ？」

「ふは、ふはははは、おや、テオドロじやないか、ふははは」

……なんか笑いすぎじゃねガイストさん。なんかヤブ医者の  
ネジの取れ方と似たようなものを感じるんだが。最初はまともそつ  
な人だったのに……

つーかおや、つてテオドロさんの存在に気付いてなかつたのか。

……あれ、さつき自己紹介しなかつたつけ。

あ、テオドロさんの名字は諦めた。聞き取れなかつたし言いにく  
そうだつたし。

「すまないな、連れが迷惑をかけた」

「え、あ、いえ。大丈夫ですよ」

「迷惑なんて、ふは、ふはははは」

「シーヴ」

「ふつふふふふはははは」

「…………」

……テオドロさんはテオドロさんで顔が恐いし。ただ話してるだけなのに不機嫌そうに見えるのは顔つきのせいだろうか。なんか顔を直視したくないっていうか、田つき悪いんですけど……。

笑い続けるガイストさんと、じつとこちらを見つめるテオドロさ

ん。

.....おれにギーちゃんはこうですか？

ガイストさんは一体いつ笑い止むんだらつか……。

俺たちの前に一人がやってきてから早数十分。

変わらずガイストさんはひたすら笑つてるしテオドロさんは何をするでもなく、けどなんか俺に視線を合わせて立つてるし。

「ふは、ふふふはは、そうか、あはは、ふふ」

「…………（ジー）」

「…………」

そろそろ誰か何とかしてつ…………！

何なのこの一人……何なのこの一人！

いいかげんにしろよお前ら！ 何が楽しいんだよ一体！

おま、ゼロとかちびっ子とかもう興味なくして一人で喋つてるんだからな！ 俺もそつちに混ざりたいのに、なんで見てくるんだよテオドロさん……！ あんたの視線が恐いよ！ 目エそらしたら殺られそうな気がする！

つーかガイストさん人の顔見て再び笑い出すな！ 失礼な！

「…………あのー、テオドロさん」

「…………」

「相方さん、なんかネジはずれちゃつたみたいなんんですけど」

「…………」

「…………」

「…………あれで通常運転だ」

「まじすか」

最初の頼れるお姉さん的な印象が吹っ飛んで粉々に砕け散った気分だ。

そしてテオドロさんの会話のテンポが遅い。

すると、ふ、と突然部屋に響き渡っていた笑い声が消えた。  
何事かとテオドロさんから視線を外してそちらを見ると、ピタリと動きを止めたガイストさんがいた。

先ほどは心底可笑しそうに笑っていたのに、いきなり彼女は完全に静止していた。微塵も動かず、なぜか目を閉じていた彼女はスッともふたを押し上げ、テオドロさんを見た。

俺もえ？ とテオドロさんを見ると、彼はガイストさんに頷いていた。

「…………それでは諸君、さらばー！」

「…………失礼する」

「え、はいー？」

二人はさつと身をひるがえすと、どいか早足で広間を出て行つた。  
一人分の足音が遠くなる。俺は呆気に取られてそれを見送つた。

……一体なんだつたんだ？

お子様二人組に聞いてみよつと後ろを振り向く。

が、そこにいるのは一人だけではなかつた。

「…………誰？」

「まだ手足を組んで不遜な態度をしているちびっ子に、あわあわとしているゼロ。」

そして、四人組のうちの一人と思われる人物。

金髪青目　の　ハーフェイス。年は俺より一つ二つ上に見える。にっこにっここと笑うそいつはガイストさんとは違う意味で食えないやつに見えた。

「ねー、君あの国王の息子なんでしょうー？」

「…………」

「あいつが父親ってどんな感じなのー？　ねえねえ」

「…………」

ちびっ子、ガン無視

むしろちびっ子よりゼロのほうが慌てている。

しかし、会話に入ろうとはしない。それどころか、ハーフェイスからやや身を引いているように見える。……なんでだ？

あれが、子供にしか感じ取れない禍々しいオーラとかでてんのかコイツ。

じ、とハーフェイスを見つめていると、バチッと目が合った。

その瞬間相手は満面の笑顔になる。

「やあ、君が噂のリーダー？」

「…………なにが噂なのかはさっぱり分からんですか」

「えー、子供一人を引き連れて“勇者決定戦”を勝ち進む謎の“黒”。しかもその子供の一人が“金”で一人が“白”なんだからそりや噂にもなるんじゃない？」

ねえ？ と笑顔で言つハーフェイス。

まあそりゃ 確かに目立つてたとは思つけど。自分でも異様な組み合わせだと思つ。

「しかしも、その“金”がなんとあの第一王子なんだもんねえー」

……あの、つてなんだ、それ。

その一言にますます機嫌を悪くしてそっぽを向くちびっ子とますます笑みを深めるハーフェイス。

…………あのー、いいかげん部屋に行かせてくれません？

## 知らない

そろそろこいつから解放されたいッ……！

「ねえ、こんな子供ばかりで“勇者決定戦”を勝ち抜いたのってさ、一体どんな手を使ったの？」

「しかも“使えない第一王子”になんの力も持たないはずの“白”的女子」

「そのうえリーダーは“黒”で、なのに他の“黒”には知られてないみたいだし」

ペラペラペラペラペラペラペラ。

せつときから休みことなく質問し続けてきて、じじつが口を開いたびにちびっ子の周りの空氣の温度が下がっていってるんですけど。そろそろ零地点突破しそうなんだけどー！

俺が口を挟もうとしても、ことじことしゃべられてしまつ。なぜか男はちびっ子一人に話しかけ続けた。その奥く回る口を激しく縫い付けたい。

柔らかそうに天井からの光を跳ね返す金髪に、愉しげに細められた青い目はぶつちやけイケメンだ。女に声をかけたらまず断られることは無いだろ？。かもし出す雰囲気もどこか甘い。といつか若干甘つたるい。

しかし。

いくら表情が笑顔でも、その聲音が優しげでも。

人の惡意つてもんは、ストレートに伝わってくる。

その目に映るかすかな侮蔑と傲慢の色。

ちらちらと見え隠れする無遠慮な言葉の棘。

ちびっ子はそれを確かに感じ取り、今ではもう粗手に完全に背を向けていた。

それでも、その声は耳に忍び込み、幼い心を簡単に揺さぶる。

「ねえ、『薔の王子』サマ。ちょっとは答えてくれたつていいんじやない？」

聞いてもいらないのにこいつがしゃべったのは、ちびっ子に関する決して良くは無い話だった。

“薔の王子”。

王族の特殊な能力、千里眼。

あらゆるものを見通し、万物を支配できるその力、その瞳。

光の象徴である金を受けられた、神に選ばれた血縁のみが所有するその力を、ちびっ子はきちんと開花させていた。それこそ、その年齢では出来すぎているほどだ。

けれど。

「まあ、君がお兄さんのこと話をしたくないほど嫌つてるのは知つてるけどさー」

彼の、兄。この国の“第一王子”は。

冷静沈着、冷酷無比。冴え渡る頭脳にその冷たい美貌。軍人としての実力も、王宮騎士の隊長格とほぼ互角というのだから、まじうことなき天才である。

現在俺より一つ上の齢十八といつ若さでありながら、現国王の補佐を見事に努めているその手腕。

そして、その青年は“瞳”的能力を完全に使いこなしていた。

空間把握能力、ある程度の先読み。それぐらいならびつ子でも出来る。

青年の力はそれを軽く越えていた。

遠視、気配の察知、心情の察知、近未来に限られるがおおまかに未来視。

それらすべてが、出来た。

それは、ある意味異常なほどに。

「国王すらかなわないその実力。母親も正妃だし、血筋も権力も十分。それに比べて、君は中位貴族の妾妃の生まれ。まあ、実力はその年にしちゃそれなりなんだろうけど」

現国王であるあのくそじじいでさえ、せいぜいが遠視とある程度の心情の察知だ。第一王子はその能力で父すらも越え、ほとんど国

一番の実力者といってよかつた。

今でこそ現国王と対立せずにその補佐を努めているものの、彼が一度兵を挙げれば勝敗は分からぬといわれてゐるほどだ。

“出来すぎた”兄。“普通以上”の弟。比較される。どちらが上でどちらが下か。そんなことに何の意味があるといふのか。

そして彼らは第一王子を“薔の王子”と呼んだのだ。

「いつまで経つても開花できない“薔”のまま。見事に花開いたお兄さんは違つて、君はそのまま枯れていきそうだね。君の年でさえ、彼は“瞳”の力を大いに引き出していたっていうのに」

「…………」

「…………そりや、国王から愛想つかされても仕方ないよね…………」

ぎり、とちびっ子が歯を食いしばったのが分かった。

その小さな手にますます力がこもる。握り締めすぎた掌から、皮膚を食い破った爪を伝つて赤色がのぞく。

相手は「ゴーゴー」と笑つていた。心底愉しそうに。冷たい歓びに唇を緩めて。

もう限界だった。

すつと立ち上がる。それに気付いたゼロが不安げな顔をして俺を見る。それを視界に入れながら男に歩み寄ると、俺の動きを田に留めた男がこちらを向いてん？　と笑みを浮かべた。

その作り物のような顔をめがけて、全力で拳を振り下ろした。

速さはそれほど無い。男はゆるりと脣を吊り上げて顔の前で手を構えた。十分に捕まえられると思つたんだろう。

なめんな。

「お前はもつ……黙つとけッ！……」

その構えられた手だと、男の顔面を思いつきり殴つた。

「ゴキ、と鼻つ柱が叩き折れた音がした。男が座つていた椅子が悲鳴をあげて碎け散る。そのままの勢いで男の頭を、見るからに硬そつな石造りの床に叩き付けた。

「おおん、と鐘を打つたような重い音が響いた。

俺はぱつと男の顔から手を離した。見事に鼻の骨が折れ、鼻血を流しながら男は気絶していた。最後に手加減した俺、よくやつた。多分あのまま全力で床にこんにちはさせたら、きっとこいつは天使とこにちはしていったことだろう。悪魔かもしけないが。

男の鼻血がついた手を男の服でふき取つて、手をパンパンと叩いて汚れを落とした。

呆けたような顔で俺を見ていたちびっ子とゼロの首根っこをつかみ、部屋から出て行く。

後ろに、男の仲間たちの視線を感じたが、知つたこひちや無かつた。

「さ、貴様！ 何を、何をして……！」

「ひめむかこ」

呆然としていたちびっ子がはつと我に返り、俺を睨みつけて怒鳴つた。それを一刀両断して、二人の首根っこをつかんだまま長い廊下を歩く。

アイヤリム王国のメインカラーである金が他の赤や銀の色に囲まれた廊下は、隅まで磨き上げられて綺麗だった。ところどころに配置された調度品は華美になり過ぎることなく、上品な美しさを保っている。

そんな廊下に田もくれず、俺は伝達されていた俺たちの部屋へと足を進めた。左手でつかんだちびっ子が何か言つているようだが無視する。逆に、右手でつかんだゼロは酷く静かだった。

部屋の前に着き、一度一人を下ろしてドアを開ける。地面に足がついた途端にちびっ子が飛び掛ってきたが、再び片手で押さえ、おかしなくらいに喋らないゼロが開けてくれたドアをくぐった。

~~~~~

部屋も廊下と同じように、なかなかに豪華だった。 いまだ一人で

眠ることの出来ない自分たちのために、頼んだ部屋は二人部屋。

ちびっ子を捕まえていた手を離した。

「き、さま……！　一体、何を考えている…」

「何も？」

すぐさま噛み付いてきたちびっ子に端的に返し、ベッドのうちの一つに腰掛けた。ティーズさんに教えてもらい、“勇者決定戦”までの間寝泊りしていた“黒の巣”よりもさわり心地がいい。やはり質が高いのだろうか。

「ふざけるな！　おれ、俺は、貴様などに助けてもらわすとも、あ

の程度の輩……！」

「助ける？　何言つてんだ、お前」「な、に？」

ちびっ子の言葉に反応して言えば、ちびっ子の動きが止まった。驚いたような、困惑したような。

そんなちびっ子に、俺は呆れたように言つた。

「あんなもん助けるつていわねーよ。つーか俺のハつ当たりだし。まあ、あの場面で動いていいのがぶっちゃけよく分からなかつたけど、我慢の限界だつたし」

俺があのイラつく男の鼻つ柱を文字通り叩き折つたことで、あの男のパーティーとの関係は一気にマイナスになつた。うまくやれば味方出來たかもしないのを、自分の私情で簡単にぶち壊してしまつた。

「怒るのは分かるし、謝るけど。軽率だつたけども。……俺無理だわ。うん」

「……なにがだ」

「お前をあそこまでコケにされた怒らなこと」

俺はいまだ戸惑つてこる様子のちびっ子をちょこちよこと手招きした。横に立つていたゼロと共に、恐る恐るとこつた風に近寄つてくるちびっ子の手を取り、そつと開く。

その小さな掌に残るのは、赤い鮮血と心が感じた傷。白らの手を見たちびっ子は、目を丸くして驚いていた。まるで、その痛みにさえ気付いていなかつたようだ。

両手でそつと包むようにしてちびっ子の手を持つ。

「 “癒” 」

柔らかい光がそつと傷を癒していく。この部屋にも監視の目があるかもしれないといふことは、頭から消えうせていた。それに、“ 勇者決定戦 ” で散々使つてしまつていたし。今さらだらう。

完全に傷が消えてなくなつたところで、魔力の供給を止めた。ちびっ子の掌を何度も見て、皮膚がなめらかに戻つてゐるのを確認する。

「 ……普通で、手をどんなに強く握つたって、血なんて滅多に出るもんじゃないんだよ」

俺はぽつつと、つぶやくみづて言葉を落とした。

「途中でやめちまつんだ。誰だつて痛いのは嫌だから。それなのに、お前は必死に我慢して、痛みすら分からぬほどに耐えてた。……頑張つてた」

自分が耐えれば済むことだから。

その身体を丸めそうになるのを必死にこらえて胸を張つていた。歯を食いしばつて、震えないために手を強く握り締めて。

この場所で生き残るためには出来るだけ味方が欲しい。多ければ多いほど、生き残る確率は上がる。そのために、この少年は。

悲鳴をあげる心を封じ込めていた。泣きそうになるのをこらえて。まだ、十を越えたばかりなのに。

「その頑張りを無駄にしたのは俺だ。」ごめん。謝る。 - でも「

俺は力なく笑つた。

「頑張ることも大事だけど、頑張りすぎないのはもつと大事だ」

少しの沈黙の後、ちびっ子は顔をうつむけたまま言つた。

「……そんなもの、戯言だ」

「ああ、そうだな」

「ただの、たわごと、だ……」

ふらり、と傾いた体をそつと支えてやる。もう、気力の限界だつたのだ。「今日は色々なことがあつたし。

泣き声をベッドに横たえて、身体を正面で向かなおる。

「……、口せ、やじった」
うか。
泣き声に顔を歪めている、少女は一体どうしたのだろう。

シリアルスパートが終わらない……。
ギャグを書きたいけど王城つてシリアルスなネタしか思いつかないんだよなー。

「……ユウ様は、」

ぱつり、とゼロは下を向いたまま話しだした。

「ユウ様は、”黒”です。キール様は”金”。お一人とも”有色人

”です」

「そうだな」

「……私は、”白”です」

「……そうだな」

ゼロの身体は小刻みに震えていた。それは一体、どんな心境からくるものなのだろうか。

……恐怖、なのが。

「普通なら、喋ることはおろか視界に入り、目を合わせるだけで首が飛ぶ。そんな身分差です」

「……」

「今でこそユウ様に助けられ、ユウ様の”所有物”であることで、私は”勇者決定戦”に出場し、それどころか王城に足を踏み入れています。……本来、ありえないことです」

「……なあ、ゼロ」

俺はゼロに、出来るだけ優しい声音で呼びかけた。

「お前は俺の”所有物”なんかじゃない。そういうても……無駄か

「無駄です」

ゼロはすぐ答えた。

「……いえ、むしろユウ様のものでない私に、価値はないのです」

「そんなこと、」

「価値はないのです、ユウ様」

俺の言葉をきききつい、ゼロが言つ。まるで自分に戒めるように、
強く、強く。

「ユウ様と共にいなければ、私は愛玩用の奴隸としての存在しかあ
りません。……白ハタとしての、存在しか」

白ハタ。……俺が新しく名前をつける前の、ゼロの名前。

「だから私は、ユウ様に感謝しています。この身の全てを捧げる」
とも出来ます

「……全てを？」

「はい」

ゼロは頷いた。

「この身体も心も力も知恵も、私が持てるもの全て、あなたのもの
です。たとえユウ様が否定されても、それは変わりません」

「……」

俺は、ゼロの表情に違和感を覚えた。

ただ悲しいだけじゃなく……何かを決めたような、顔。

……何を、言つ氣だ?

「だから……だから、」

ゼロは、意を決したようにバツと顔を上げた。

「これから、特に王城内では、私があなたのものである」とを否定しないで下さい。……お願い、します

「……理由は？」

「…………」

「あのふざけた男に、何か言られたのか」

すつ、と瞬間に冷たくなった空氣にも、ゼロは俺を真っ直ぐに見つめたままだった。

白い瞳。無垢で純粋で穢れなき少女。

「…………、分かった」

俺は口から出でた言葉を一つ飲み込んで、ゼロにしつかりと目を合わせて頷いた。

その言葉に、ゼロが田に見えてほひとするのが分かる。

俺は空氣を切り替えるように声を上げた。

「さあ、飯の時間になるまで毎晩でもしょひぜ。わつと誰かが呼びに来てくれるだろ」

「はいー。」

いそいそとベッドに潜り込むゼロに小さく笑って、俺も布団の中に入った。

「 めやすみ

~~~~~

静まり返った部屋の中、ゼロは薄く扉を開いて思ににふけっていた。敬愛する主は寝ようといつてくれだが、眠氣はまったくといっていいほどに無かった。

それでも、自身を眠りへ誘おうと扉を開じる。

「 .....、」

『 あのふざけた男に、何か言われたのか』

主の言葉が頭の中で反芻される。

主は鋭かった。特に人の心の機微に。それは、ゼロが思っている以上のことだった。

(確かに、あの人気がいった言葉で、私は揺さぶられてる)

あの、食えない笑顔の男。  
その男の言葉のほんの一部。

『 その、白、は、気がついたら消えていそうだしね』

棘のある笑顔で言われたその言葉を、主は知らない。確か、横で二人の男女と話していたから。

ゼロはそのことに安堵する反面、主にこのことを言つてしまつた。しかし、言つことは出来ない。言いたくない。

最下層に位置する“白”が、上位の貴族たちの目に触れる。それがどうことか。

短気な貴族なら汚らわしいとされる“白”を真つ先に殺そうとするだろう。

誇り高い貴族なら王城に足を踏み入れた“白”を嫌悪するだろう。賢い貴族なら後の争いの芽を潰そうと“白”を取り込もうとするだろう。

その道のいすれも、ゼロが“ゼロ”として生きることが出来る道はない。

全ては“白”  
白として。

主に所有物と認めてもらう理由。それは醜い自己保身。

王族と肩を並べる“黒”のものならば、安易に手を出すものはいないだろうから。

（本当は、キール様に頼つてしまいたいけれど……）

ほとんど年の変わらない、この国的第一王子。主とは違い自他共に“金”だと認められている彼のほうが、影響力は強いに違いない。

けれど。

（あの人は、キール様を見下していた……）

ずっと笑顔を貼り付けたままの、あんなふざけた男にさえ下に見られる。といつことは、キールの王城内での立ち位置がどれほど安全なものか分からぬ。

ゼロは権力や身分といったものに聴い。それでなければ生き残れなかつたからだ。

国境付近を同じ“白”たちと転々としながら、行く先々で迫害を受ける自分たちば。

だから、ゼロは自分の保護者としてキールを切り捨てた。

（……『めんなさい』）

じんわりと、涙がにじみ出る感覚がして慌てて顔を枕に押し付ける。泣き声を漏らさないようにするだけで精一杯だった。

（『めんなさい』）

変わらぬ年で、むしろゼロより背丈がほんの少し小さいあの少年は、必死に認めてもらおうとあがいているのに。

その“仲間”であるはずのゼロが、彼を認めていないのだ。

（『めんなさい』）

押し寄せる自責の念と罪悪感に押し流されるよつとして、ゼロは夢の中へと引き込まれた。

どうせ今日も、いい夢は見れない。

本当は分かつていい。

あのいけ好かない男の言葉が無くとも、自分は同じ行動を取り、同じ決断を下しただらう。あの男に責任を押し付けても、全ての咎はゼロのものだった。

ゼロは、自分が嫌いだった。

しかし、これからもそれは自分は変わらない」と知っていた。

変わる事が出来るのに変わらない。そんな自分が、なによりも嫌いだった。

## ルール説明

「失礼致します」

ノックの後、部屋に響いた男の声に俺は目を覚ました。ベッドから体を起こして扉の方を見ると、女使と思わしき風貌の青年が無表情でこちらを見つめていた。

「ああ……なんか用ですか？」

寝起きでぼんやりとする頭を覚醒させながら、俺は彼にたずねた。見たところ、俺より一、二年上に見える。青年は表情を変えることなく口を開いた。

「昼食のお時間でござります。食堂まで案内をさせていただきます  
「もうそんな時間か」

俺は青年に頷くと、両脇で眠っている子供一人を軽く揺さぶった。

「ほら、二人とも。飯だぞ飯  
「ん……」  
「は、い……」

ちびっ子は奇声を発しながらもじりじりと目を開け、ゼロはまだ眠そうに目をこすっていた。

うながすように一人の頭をぼんぼんと叩くと、もぞもぞとベッドから這い出る一人。それに苦笑しながら、俺もベッドを降りた。

(やつぱまだ「ゾモつて感じだなあ……）

「これでも齡十前後で、昼寝が必要な時期はとっくに過ぎていて思つたが。むしろいつもはもつと大人びているような一人だ。

（疲れてつから素がでてんのか……それとも寝ぼけてるだけか？）

俺はとりあえず一人を扉の前まで誘導し、始終無表情だった青年の後に続いた。

~~~~~

青年は無言を貫き通し、廊下を何度も曲がってたどり着いた大きな入り口の前で一礼して去つて行つた。

「ありがとうござこまーす」

青年の背中に感謝を述べても、会釈しただけで歩みを止めることはなかつた。

（……なんかすげークール）

そんな事を思いながら、完全に眠りから覚醒し空腹を訴える一人に押されるようにして、俺は食堂の入り口をくぐつた。

入つてすぐそこにはこの人数に必要なのかと思つほど大きな長テーブルが三つ。思わず無駄を感じてしまうほど並べられた椅子は、すでに六つ埋まつていた。

一番右端奥に座つているのはガイストさんとテオドロさんの一人

だ。二人とも食事はもう終えたようで、静かに話をしているようだつた。ガイストさんは初めに会つた時と同じようにひょうひょうとしていて、「ふははは」と笑つていたのが嘘のようだ。テオドロさんはいつものように仏頂面で腕を組み、ときどきガイストさんの話に相槌を打つていた。

そして正反対の左端のテーブルで食事をしているのは、あの男がいるパートナーだった。

鼻をへし折つてやつたはずなのに怪我の後は何一つとして残つておらず、男の顔は綺麗なままだ。ちくしょく、美形にここまでの殺意を抱くのは初めてかもしれない。

俺たちを見つけた途端に手を振つてきた男をスルーして、適当な席に座る。

すぐさま運ばれてきた料理に早速手をつける。

「なあ……なんであいつの鼻再生してんだ？　まだ一時間も経つてねーぞ」

「おおかた、治癒魔法を使える仲間がいるのだろう。もしくは、あいつ自身魔法の使い手なのかもな」

「ああ、そういうやそんな便利なもんがあつたんだつたな」

「ユウ様も使ってましたよね？」

「……あー、そうだつたな」

らしくもなくアーリアさんに偉そうに説教した時だな。あの時は何も考へないで古代語で治したが、魔語スペルを使ったほうが不自然じやなかつたかもしない。なにせ、普通の人は古代語なんてそれこそおどぎ話の世界だからな。今思えば、俺が手をかざしただけで治つたつて事になつてたりして。

「ん？ つまり治せば何度でもあいつの鼻を折れるってことか？」

「なんの拷問だそれは。貴様は何か、鼻に恨みでもあるのか」

「鼻が高いのにムカついた」

「……つまりそれはハツ当た」

「よーし静かにしてちびっ子と飯食え」

ちびっ子の言葉を無理やりさえぎりて食事を進める。両脇からじーっと視線が送られたが無視した。

空腹も手伝つか、ほどなくして食事を終えた俺たちは、ゆっくりと周囲を見渡した。

「で、だ。わざわざ飯食つた後も俺ら全員を引きとめてるって事は、なんかあるのか」

「……何をするんでしょうか」

「さあな。とりあえず、『勇者決定戦』、もしくは魔王についての事とこいつのは間違いないだろ？」

ちびっ子がそう断じたのとちょうど同じタイミングで扉が開いた。見ると、そこには恰幅の良い太鼓腹のおっさんと、先ほど俺たちを案内してくれた青年がいた。

おっさんはやけに裾の長い高級そうな服を着ていて、腕輪と耳環じかんを着けていた。色鮮やかな宝石が天井に取り付けられた明かりの光を跳ね返して輝いている。

「皆様、『おげんうるわしゅ』。ワタクシめはこのヘルベル宮の富貴、その如もヘルベル・ヒドワードにござります。以後、お見知りおきを」

おっさん エルベールは仰々しく頭を下げて見せた。年相応に髪の減った頭部が宝石と同じように光を反射して頭をテカらせているのがよく見える。

「今回ワタクシめがわざわざ皆様にお集まりいただいたのは、このエルベール宮で守らなければならない規則のご説明にございます」

「……説明？」

テオドロさんが低い声で聞き返す。それと対照的な高い声でエルベールは声を上げた。

「左様にござります、テオドロ・ペリツツォーリ様。ワタクシめが皆様にお伝えする規則は三つとなります」

エルベールは人差し指を立てた。

「一つ、勇者候補以外の人間に害を加えないこと。
二つ、エルベール宮の損壊は命を持つて償うこと」

エルベールが一本指を立てて言つ。

しかし エルベール宮の損壊に命がかかる?
つまり、派手に暴れて魔法をぶつ放したりすればアウト、ってことか。

エルベールは一呼吸置いた後、もつたいぶつた仕草で三本目の指を立てた。

「そして、三つ目は

「

「生き残りが誰か一人になるまで、殺しあうことにござります」

「…………は？」

沈黙の後、一番最初に口を開いたのは俺だった。
いま、この男はなんと言つた。

呆然として頭が追いつかない。

「んじあひへ.

「んー、おおよそ予定範囲内かな？ 規則つてのは本当にそれだけ
なのー？」

「はい、この二つをえ守つていただければ」

あの鼻男がエルベールと話してくる」とが頭の上を素通りしていく。
く。待て、待てよ。

俺はぐるりと頭をめぐらせて周りを見る。

表情が変わつてゐるのは

俺だけだった。

ガイストさんは口元に笑みを湛えたままだし、テオドロさんは腕
を組んだまま目を閉じてゐる。あの男のパーティーを見ても、誰も
うるたえたりしていなかつた。

ちびつ子と、ゼロですら。

まるでそれが当たり前だとでも言つよつて。

（なんで、だ。なんで

）

生き残りが一人になるまで殺しあう。つまり。

「同じパーティーのメンバーも殺さなくちゃダメなのかな?」「申し訳ありませんが、規則ですから」

エルベールの声にめまいがするようだつた。頭ががんがんする。

つまり、俺が生きっこから出るためには、あの男も、ガイストさんもテオドロさんも、あとの三人の男と、ゼロとちびっ子を、殺さなくてはならないということだ。

「……なんで、だよ」

声が震えた。

はい? と笑顔のままこちらを向くエルベールに叫んだ。

「な、んで! なんで殺さなくちゃいけないんだよ! 勝敗なら勝負でつければいい、殺す必要なんてないだろ!」

「規則ですので、」

「規則が何だつてんだよ! なんで

」

頭が、痛い。

吐き気がこみ上げるよつだつた。生か死かというこの状況も、それを受け入れるこいつらにも、そんなことを強要する規則にも。なんでなんでなんで、どうして。

そればかりを繰り返す俺に焦れた様子もなく、エルベールは言つ。

「これは古の誓約にも定められたことでござります。そもそもこのエルベール町は、代々エルベールの名を持つものが引き継いできた、『勇者』を『製造』するための、いわば工場でござります。ワタクシめは、この年でまだ『製造』を行った事がないのですが。いやあ、お恥ずかしい限りで」

太鼓腹を揺らして心底愉快そうに笑うエルベールが理解できない。『勇者』の『製造』？

『一応勇者』ひつちで製造してたんだけど間に合わなくてさ～』

この世界に降り立つてすぐの、あのふざけたエセ神の言葉が頭によみがえる。

エセ神はゲームの世界に憧れていのだと言つた。だからゲームの世界を作つたと。

魔王の大量創造による生命の滅亡の危機。そのために造られる『勇者』。

俺がここに呼ばれた理由も、『勇者』が足りなかつたからだ。

「……なんで……」

「あーもづ、ひつせいなあ」

理解が追いつかずつぶやいた俺に、誰かの声がした。

それとほぼ同時に聞こえたのは、勢いよく風を切る音と激しく甲高い金属音。そして、なにかが地面に落ちる鈍い音。

見れば、あの鼻男が赤く染まつた剣を振りかざしていた。

それを受け止めているのは鼻男と同じパーティーであるはずの茶
髪の男。

そして、刎ねられた首と二つの首無し死体、血まみれの床。

二人の人間が、仲間の手によつて今この場で死んだのだ
と理解するのは時間がかかつた。

ギチギチと金属同士が強くこすれあう音がする。一人は冷静な表
情でつばぜり合いをしていた。

「なんでどうしてって、君ゴダモ？ ほんとつひとおしいからやめ
てよね、そーゆーの」

返り血が飛んだ類をぺろりとなめ上げる鼻男に、ぞくりと寒気が
走る。同じパーティーのメンバーをためらいなく一振りで切り殺し
た男は、軽薄そうにへらへらと笑っていたあの面影はすっかりなり
を潜め、見下すような表情でこちらを見た。

「最初から言つてたじやん。死にたくないやつは棄権しろって。逃
げたいならさつさと逃げりやあよかつたのに、ここまで来て何駄々
こねてんの」

「そ、れは……」

「ゲームか何かだとでも思つてた？」

まるで思いつきりひっぱたかれたかのような衝撃が走った。

(……ちが、う。違う。俺はそんなことを、思つてなんて、)

「……」は現実だ。食事だってするし殴られりや痛いし血だって出る。俺は向こうの世界じや飛び降りて死んじまつて、だからこの世界が現実だと、

そう思つていた、はずだ。

(なのになんでこんなに、)

体が震える。痛む頭に心を覆い尽くす恐怖。

眞理の言葉に受けた衝撃

そう、『ゲーム』。『ゲーム』の世界だ。そう思つてい
た。

死の危険の感じるのはプレイヤーの俺じゃなく平面状のキャラクターで、死ねば何度も生き返ることが出来て、いくらでもリセットがきく非現実。

街で見かけた溢れるような人々はみんなモブキャラ。建物はただのグラフィック。

食事の味覚はすべて錯覚。

感じる痛みは幻。

魔法は夢。

魔物に殺された人々も夢。

飛び散る臓物も夢。

今日の前に広がる世界のすべては夢。

夢夢夢夢夢

。

朝が来れば終焉を迎える、すべて忘れる一夜の幻想。

そんな幻想が粉々に砕け散る。

「世間知らずの甘ったれな馬鹿にも分かるように言つてあげようか？ あんたは死にたくないりや、俺が今やつたみたいにお仲間を殺せばいいの。簡単でしょーよ？」

俺の動揺を嘲笑うかのように男が言つ。言葉の一つ一つが突き刺さるように鋭かつた。

「まあ、殺せないって言つなら別にいいけどねー」

均衡を保つていた一振りの剣が鋭くキンッと音を立てて離れた。鼻男は今まで剣を交えていた茶髪男に背を向け、俺を真っ直ぐに見据える。いきなり切りかかられたはずなのに、冷静な表情のままそれを受け止めていた茶髪男が背後を簡単に取らせた鼻男に切りかかる様子はない。

息を呑んで顔を上げれば、呆れた声音とは裏腹に人形のようないい顔がそこにあった。

そして。

「俺が殺してあげるから、サ」

鼻男が背後に回ったと俺が気付いたのは、頭上高くに掲げられた剣が、赤い飛沫を飛ばした後だった。

視界が真っ赤に染まつた。

鋭く振り下ろされた剣と共に宙を舞つた血液がぴちゃ、と俺の顔に着陸したのだ。

どろり、としたその液体に吐き気がして、その赤い視界で見る光景に絶句した。

「ぜ、る…………！」

「ゼロ！」

ちびっ子の悲鳴が、どこか遠くに聞こえた。

俺を庇つて鼻男の剣を受けたゼロが、地に濡れた床に力なく横たわっていた。

崩れ落ちるよじにしてしゃがみこむと、つんとした鉄臭い匂いが鼻を突いた。震える手で傷を確かめる。

切り裂かれたのは右胸から腹にかけての部分。身体を横断するような大きな傷から、じくじくと血が溢れていた。

失血で死に至るのはおよそ半分の血液を失つた時だ。こんな小さな身体で、これほどの血を失うのは、明らかに危険な状態だった。

ゼロが死ぬ。ゼロが死ぬ？

嫌だ。

「死なせるか？……！」

ほとんど反射的に、傷に両手をかざしていた。アーリアさんにやられたおつさんの時は、“毒”に対して“薬”を選んだ。

ゼロが負つたのは“傷”、ならば

「“癒”、“治”、“治癒”！…」

ありつたけの魔力を傷に注ぎこむように意識を集中させた。両手が薄い青色に発光し、光が傷に流れ込んでいく。みるみるうちに端のほうから閉じるようにして傷はふさがついて、その面影すら残すことなく姿を消した。

だとこいつの元、ゼロは意識を取り戻さないままだ。

（なんで、傷はふさいだ）

焦りで頭がうまく回らない。もしかして毒があつたのか、それとも血が足りないのか。

足りない。知識も冷静さも経験も何もかも。いったいどうすれば

いい。どうしようもない、の。』

「へえ、それが噂の古代語ってやつ？ 初めて見たなあ」

倒れているゼロなど田に入らないように、しげしげと俺を見て笑顔すら浮かべる鼻男。ゼロの横には、ちびっ子が俺と同じようにひざまづき、顔を蒼白にしてゼロの名を呼んでいる。周囲には、沈黙を守つたままの茶髪男と、仏頂面のテオドロさん、その横に立つガイストさん、エルベール、そして、『』のように床に転がる二つの死体。

今、この場で、ゼロが死のうと、死のうとして、こいつ、こいつが殺そっと、こいつが殺した。

こいつが殺した。

くらり、と眩暈のような感覚が俺を襲つた。

赤黒い感情に押し流されるようにして、白刀の柄に手をかけた。瞬時に刀を抜き、鼻男めがけて突きを放つた。

「“雷”！」

紡がれた古代語と俺の魔力に反応して、真っ白な刀身が透き通るような金の輝きに覆われる。バチバチと音を立てて迫つた殺意に、鼻男は

嘲るように笑つた。

「なにそれ。子供の遊び？」

渾身の一撃は、笑みさえ浮かべて見せた鼻男の剣の一振りで弾か

れた。

血に染まつたままの剣を握つた、だらりと下げられた腕を軽く跳ね上げる。鼻男がしたのは、たつたそれだけの動作だつた。

しかし、その衝撃は白刃をつたい、俺の腕が痛いほどだつた。ジインと、筋肉まで震えるよつた感覚を振り払つよつて、強く手を握り締めた。

心配そつた顔をしてこちらを見つめるちびっ子が視界の隅に入る。

俺は鼻男を睨みつけた。しかし、鼻男はそんなもの気にも留めずにじりじりを見ていた。

「ああ、『めんねえ。ちょっとイラつこちやつたもんだからや、悪いね。その子、死んじゃつたか』

「……死んでねえよ」

「ぴくりとも動かないのに?」

微塵も悪いと思つていないよつた表情で、鼻男は見下すよつて俺を見た。

「古代語を使えば助かると思つた? 甘つよね、その感覚。反吐が出来やつ」

鼻男はおじけたよつて肩をすくめた。

「死ぬもんは死ぬんだよ。そこには運命もなにもない。分かるでしょ? 誰だつてそつなんだから、や」

俺はふと、鼻男の様子に違和感を覚えた。さつきまで俺を見下し

てひょうひょうとしていたのと、今だけは吐き捨てるみつして言葉を口にした。

なぜのかなんてわけぱり分からぬ。でも、俺は口を開いた。

「でも、お前はそれに納得していないんだろう？」

初めて、鼻男が驚いたような顔をした。目を見開き、こちらを凝視している。

「、何言つてんの？　お前が一体俺の何を知つて、」「少なくとも、俺は納得してない」

動搖しながらも冷静を装つて鼻男がいつた言葉を思いつきついえきつて、呑きつけるように言葉を発する。

「だから、ゼロは助ける。俺の仲間は殺させない。俺も、死なない。誰も殺さない！」
「つに絵空事を言つてんのとー、そんなことが出来るわけ、」「出来るー、いや、俺はやるー。」「お待ち下さい、規則を破るとこつことは」「そんな規則糞くらえ！ー」

突然前に進み出てきたエルベールに高ぶつた感情のままに叫んだ。立ち上がって、ちびっ子を真つ直ぐに見つめた。

「まだぐつたりとしたままの軽いゼロの身体を右手で抱えあげる。

「ちびっ子　いや、キール。俺たちは行く。お前は、どうする

俺はこの場から居なくなる。逃げたといわれようがどうでも良い。俺は俺のしたいように、やる。

俺には何のしがらみもないからだ。この世界に、家族も地位も権力も無い。友人だつて数えるほどだ。だが、キールは違うのだ。

王族。神の瞳。王位繼承権。父である国王と、母もこの国に居るのだろう。この国から出たことが無いであろうキールにとって、この国は鳥籠であると同時に身を守る盾でもある。

俺には、キールに家族も何もかも捨てて一緒に来いなんていえない。

当ても無い。どうなるのかもさっぱり分からぬ。コレが最悪の道かもしれない。

俺は選ぶ。でも、キールに強制することは出来ない。俺だけでなく、誰にも。

決めるのは、いつだつてキール自身だけだ。

キールへ、左手を差し出した。

「お前が　　決めるー！」

キールは、何かに耐えるよつて目を強く閉じて歯を食いしばった。

幼いこの少年にのしかかる、重責。

それは俺には想像すらつかないものだけど、それでも、キールはそれに耐えうる強さを持っているのだ。

キールは目を開いて、俺を真っ直ぐに見た。

そして 手を伸ばした。

「 連れて行け！！」

止めようとする鼻男も、何かを叫ぶエルベールも、全てを振り払うようだ。

俺は、キールの手をつかんで、その言葉を放った。

「 “ 転移 ” ！！」

次の瞬間、俺たち三人の姿はエルベール宮から消えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8024m/>

クロキ ユウ の ぼうけん

2011年12月29日21時46分発行